
Fehlen world - 欠ける世界 -

長野晃輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F e h l e n w o r l d ・ 欠ける世界

【Nコード】

N 2 7 7 3 0

【作者名】

長野晃輝

【あらすじ】

あなたは過去を信じられますか。自信を持って自分の過去を語れますか？

過去を人の手で変えられてしまう世界に生きる僕は信じられません。過去は妄想ではありませんか？過去は本当にあなたの思うものですか？

もし僕の言葉を聞いて不安になった人は、写真を見たり旧友に連絡を取ってください。

あなたが過去の変わらない世界にいるのなら、それで不安は取り除

けるはずでず。

僕は神様が作った不完全な世界に生きている。だから、僕はこの不安を抱えて生きていく。

？ 欠落後

神様は六日で世界を作り、七日目に休んだという。

もしも神様が七日間きっちり仕事をすればどうなっていたら
う？

こんなにも世界は欠けていなかっただろうか？

夕日に照らされた教室を僕は掃除していた。

学校というのは結構機能的に作られている。校舎の建て方がそう
であって、必ず東と西をつなぐような直線の形なのだ。

理由は太陽の昇り沈みが東から西になっているためだ。東から昇
る太陽の光は東から差し込む。だから、生徒たちは西向きの黒板を
使う。

夕日とは西から差し込むものだ。

だから今、僕には黒板の文字が見えない。

でも知っている。

どんなに見たくなくても、夕日が輝いていても、掃除をしている
んだ。黒板だって掃除するに決まってる。

どんな言葉だっけな？ 確か大してうまくもない言い訳が書かれて
いたはずだ。

放課後の教室掃除をするはずだった。

みんなで掃除するはずだったのに、どうして僕一人が、こんなに
時間をかけて掃除している？

なあ、

神様が最後の日に休まなければ、世界はこんなに不条理じゃなか
ったのか？

「おーい、その君」

いつの間にか教室に誰かが入っていた。

その人は僕のように普通の人じゃない。生徒会なんて権力の中心に近いところにいる人が、普通の人間であるはずがない。

「もう下校時間近いんだが、何をやっているんだ？」

生徒会副会長、沢田拓斗さわだたくと。道を歩けば女子が振り返るイケメンで、勉強も運動も人一倍できる生粋の天才。

人並みに気を使っているであろう髪をばさばさと雑に掻いて、

「なんでまだ掃除？」

「先輩、日本語は正しく使いましょうよ」

「伝わりやいいんだよ、言葉つてのは」

ある種の真理を言って彼は掃除用具入れの中から塵取りを取り出す。

「何をしているんですか？」

「見てわからないのか？君の手伝い」

僕は何も言わずに彼の好意に甘えることにした。

ここまで数時間かけてしてきた掃除がものの十五分程度で終わってしまった。ここまでの苦勞が土台にあるとしても、少々あつけないものだ。

沢田先輩は疲れて席に座ってしまった僕にコーヒー牛乳を買ってきてくれた。

数時間の掃除の報酬が、百円で買えるパックのコーヒー牛乳というのは少し安すぎるが、何もないよりましかと自分を納得させる。どうしたことが口に含んだコーヒ―牛乳はとても美味かった。「これは黄金と同じ値段なのです」と言われても疑えないと思う。

沢田先輩は僕の前の席の椅子を引っ張り出し、どんっと腰かけた。「君はこのクラスの子か？」

僕は黙ったまま頷く。沢田先輩はそれ以上は何も言わずにただ前の席に腰かけたままだった。

その沈黙が僕には心地よかった。

下校を知らせるチャイムが鳴ると同時に僕は席を立った。この機

会を逃すと二度と帰れなくなりそうだった。

「君」

沢田先輩は僕を呼びとめた。

「これでも俺は生徒会の人間なんだ。もし何かあったらいつでも相談すればいい」

「ありがとうございます」

なるべく事務的な言葉を、無感情な声で発した。

「それだけだから」

先輩は僕より先に教室を出ようとした。

「彼女とはうまくいっていますか？」

今度は僕が彼を止めた。

少し驚いたような顔をする彼に、「もう全校生徒の噂ですよ」と僕は言った。

「上々だよ」

輝く笑顔を残して彼は去って行った。

？ 欠落前

「なあ、神様が最後の日に休まなかったら世界はこんなに不条理じやなかったのか？」

僕は驚いた。

僕が生徒会室の前を通ったのは単なる偶然で、放課後先生に資料を図書室に戻すのを手伝わされたためだ。

僕のHRである一年三組と、生徒会室、図書室は同じ校舎にある。ただし、生徒会室と図書室は上の階からすぐに来れない離れにある。要するに校舎の横に取ってつけたように二つは存在するのだ。

だから僕はイケメンの生徒会副会長の沢田拓斗先輩に話しかけられたことに驚いていた。

僕と彼に直接的な係わりは無く、言葉を交わす間柄でもないのだけど、どうしてそんな言葉を投げかけられたのだろう。

「すまない」

いきなり謝られた？

「誰にでもいいから愚痴を言ってやりたい気分だったんだ」

「そんなこと言われても……」

「ごめん」

ただひたすらに気まずかった。

「あのよければ聞きますよ」

この状況でそれ以外の何を言えというのだ。

この僕に、

「君は？」

ひじまなおき

「緋島直樹です。一年です」

生徒会室に招かれた僕は早く時よ過ぎると祈っていた。

いつもなら会長が座っているであろう奥の席に沢田先輩は座っていた。僕は彼の真正面に用意された椅子に座っていた。この状況、

まるで面接を受けているようだ。

放課後というのもあつてか、校舎には人が少なかった。まあ、クラスの誰かに見つかつて何かしらしたと思われたいのは有難いけどね。

「なるべくすぐに終わらせるから」

生徒会副会長が言うのだから信じてみたが。

結論を言ってしまうえばすぐに終わる内容ではなかった。

ついでにそんなに簡単に人に話していい内容とも思わなかった。

話を要約するところだ。

先輩には現在彼女がいる。その彼女はうちの高校に通っているが、今は入院しているという。

その人は将来有望とされる作家の卵で、いくつかの出版社が主催する文学賞を受賞したらしい。

でも、彼女は血液の病氣らしくもってあと数力月の命らしい。

なんというか、理不尽だ。

それ以外に言える言葉などない。その話こそが何かの小説にでもなりそうな不幸話。ありふれた不幸だ。そう思えるのは僕が第三者だからだろう。

そんな不幸を沢田先輩は一人で抱えたくなくて、僕に話したんだろう。

どうして僕にそんな話を？と聞いたら、「君は人が良さそうだったから」と彼は言った。

「僕にはあなたにかける言葉が見つかりません」

正直に言つと彼は弱々しい微笑みを浮かべた。

「そうだろうね。君は当事者でも何でもないのだから」

僕らはそんなことから親交を深めた。親の話やクラスの話をした（先輩は彼女との馴れ初めの話もしてくれた）。

僕の両親がすでに亡くなっていることを聞くと、彼は申し訳なさそうに目を伏せた。

「いや、あなたもつと気まずいこと話しましたよ」

僕らはそうやって不謹慎な笑い話を続けた。僕がクラスの人気者だと話すと、「草食っぽいもんな」と茶化した。草食っぽいのが人気になるのかは疑問だったが、とりあえず笑っておいた。

最後に、

「先輩、彼女と向き合ってください。こんなこと僕が言えた義理ではないですが、後悔しないためにもきちんとお互い向き合うべきですよ」

彼は曖昧に笑って見せた。少し言葉が過ぎたかもしれない。でも、撤回する気もなく僕らの出会いはそれで終わった。

？ 欠落前（後書き）

かなりグダグダで？が二つもあります。

ごめんなさい分かりにくいですが？以降はこの形式で進みます。

？ 青い光

僕は沢田先輩を見送ってからまだ教室にいた。

……。僕が沢田先輩に初めて会ったのは彼が生徒会副会長になった日のはずだ。

それは確か今年の春だ。僕はその時こういう人が人の上に立つのはなかなかのことだと思っただけだ。

しかし、記録上僕はその時にこの学校にはいなかったことになっている。生徒の名簿、クラス写真、その他すべての資料から僕の名前が消えている。

加えて、消えていたのは文章だけではなかった。

クラスメイトの記憶からも僕が存在が抜けていたのだ。

それが欠落だ。

昔から僕の周辺では欠落が多く起こった。

はじめて僕がはじめてその体験をしたのは五歳の時だった。

そのころ僕には小さいころから仲の良かった女の子の友達がいた。いわゆる幼馴染ってやつだ。

ある夏の日、彼女は消えた。僕の周囲から。人の記憶から。溶けた氷のように。

それが始まりだ。

それ以降僕の周りは劇的に変化を繰り返した。

人だけではなく有名だった建物が消えたりもした。昨日までテレビで活躍していた俳優が近所のコンビニの店員になっていたこともあった。

僕の世界は絶対ではなかった。

容易に揺らぎ、変化する。

その変化にはいくつかの法則があった。

一つ目は人の記憶や、写真、日記などの文章など全ての記録まで

もが変化してしまうこと。例えると過去が丸ごと変わってしまったようなのだ。今僕の親は12年前に交通事故で亡くなったことになっている。

二つ目に1週間以上その変化した状態が続けば、もう元に戻ることはない。逆に言うと一週間以内に元に戻る可能性もあるということだ。なぜ元に戻るのかはわからない。そもそもこの変化自体が何なのか分かってない以上、それを考える意味がないと思う。

「なんて、こんなことを今確認しても意味がないのに……」

僕はため息を吐いて教室を出た。

沢田先輩の彼女は間違いなく欠落に巻き込まれたのだろう。

彼女が患っている病がなくなった。それが今回の欠落。必然的に沢田先輩が僕に愚痴をこぼす理由がなくなり、僕と彼のつながりが消失したということだ。

彼からすれば僕と出会ったのは今日が初めてということになる。

僕の記憶だけ残して世界は変わるのだ。

夕暮れを背景にする校舎を後にして、僕は外に出た。

しばらく校門から続く桜並木を歩いていると、

「すみません。お時間よろしいですか？」

女の子に声をかけられた。

僕の前に堂々と立ったその娘は未完成の絵のような魅力を持った少女だった。

幼げな顔つきは可愛い。だが、成長期に入った体は大人っぽく、長い黒髪は綺麗だ。

大人の女性としては完成していないが、女の子の域は越えた今だけの魅力を僕は感じた。（なんかロリコンを肯定している気もする。うん、気のせいだ）

「はい？なんです」

一見ただけでは彼女の年齢を正確には割り出せないので、一応敬語を使うことにする。

「あなたは世界を変えたいと思ったことはありませんか？」

普段の僕なら相手にしないような質問だったかもしれない。

でも、僕は久々に得た友人のことで悩んでいた。だから答えた。

「はい。ありますよ」

静かに淡々と、僕は口を動かす。

「誰もが考えたことだと思いますよ。理不尽なことに泣いた人間であるのなら」

「そうですか」

少女は自分の左目に手を当てながら、右目で僕を見る。

「では、あなたの負素を見させていただきます」
アンチマター

左手を離れた時、一瞬青空のような光を見た気がして、僕の意識は途切れた。

？ 赤い雫

甘いおいを感じて僕は目覚めた。

シャンプーなんかによく使われる花の香りによく似ている。何の花だったかは忘れたけど、この香りは好きだった。

回りをよく見てみると、どこかの図書館のような部屋に僕は居るようだった。書架、というやつだろうか？

脚立を使わなければ一番上の棚まで届かないほど高い本棚と、その周りに乱雑に積まれた本の山。

どの本も何かの図鑑のような厚さだった。

なんだここは。

とりあえず立ちあがってみたが、それで何かが起きるとは思えない。しかし、動かないと何も起きないのもまた事実。

僕は邪魔にしかない本を踏まないように慎重に一步を踏み出した。

（それにしても、何が起こったんだろう）

青い光を目にしたところまでは覚えていたのだが、それ以降の記憶が全くない。

ここがどこで、どれくらいの時間が経って、なぜ僕がここにいるのかまるで分らない。

普通に考えたら誘拐だよね。この状況。

親もいない上に、親族とも疎遠な僕を誘拐したところでメリットはないように思える。

「……お目覚めかい？ 緋島直樹君」

ぎょっとして、僕は本をふんずけてしまった。靴は履いていないのだけど、それでも何か申し訳ないような気分に陥る。ごめん。ごめんね。

「あのー、俺様無視して本に謝罪の言葉を一心につぶやき続けないでくださいませんか？」

バタバタと何かがどこかにぶつかるような音がする。

「はて、僕もついに末期症状が。幻聴が、よりもよっておっさんの声が聞こえるなんて」

つい首つり用のロープを探してしまふ。もちろんない。このデカイ本で思いつ切り頭を打てば死ねるかな。

「えらいひどい扱いだな俺様！！というか幻聴じゃない！現実だ！」
バタバタ、バタバタ。

えらくバタバタ五月蠅いと思ったら、一冊の本が飛び跳ねていた。
「……」

冷静に、三分ほど時間をかけて熟考してみる。

「ポルターガイストか、そうか僕霊能力者に……」

「なつてない！お前さんただの凡人だよ！！」

「でー、さつきから独り言にツツコミを入れてくるうざい、もとい、律儀なあなたは誰ですか？」

「意外と口悪いなお前さん」

口が悪いのではなく、素直なだけだと思います。

「俺様はお前さんの二つ前の本の山の一番上の本だ」

「はは、そんなアホな」

「えせ関西はやめろ」

声のトーンが二オクターブぐらい下がった。いいじゃないか、えせ関西弁使っても。

言われた本の山は人の腰の位置ぐらいの高さで、その最上にあつた本がこのおっさん、そんなアホな。

本はこの部屋にある他の本と同じ図鑑クラスの大きさだけど、決定的に違ったのが高級そうな革ベルトでその表紙が括られていることだ。これじゃ本を読めない。ていうかこれさっきのポルターガイストの本じゃないか。

「……もしこの本がこの声のおっさんだとするなら」

「いや、だから仮定とかいらないでしょ。そう言ってたんだから」

「ということはおっさん、どM？」

「ちやうわ！ボケー！」

おっさんの関西弁は本物だった。

「それでここってどこですか？」

本のおっさん（？）を抱えて僕は本が散らばる部屋の中を歩く。

「美能山って知ってるか？」

確かうちの高校から、1キロぐらい離れたところにある山の名前だったはずだ。思い出した後に僕は頷いた。ってこのおっさんは視認能力があるのかな。

「その辺にある幽霊屋敷の中」

「幽霊屋敷？」

美能山は知っているけど、そのあたりに幽霊屋敷なんてものがあるのは知らなかった。そもそも僕の家は美能山とは真反対の方角にあるわけだし、知らなくても無理はないと思う。

「この近所のガキがこの屋敷をそう呼んでんだ。人は住んでるっていうのにな」

おっさんは嘲笑めいた笑い声を上げた。うーん。子供のやることを皮肉るのは大人げない。絶対僕はしないようにしよう。

「ちなみにあなたは人に分類されるのですか？」

「いーんや、俺様は人間じゃない」

でしょうね。と僕は内心つぶやく。

この本には見る限り、無線機などの通信機器は見当たらない。拘束を解いたら何か出てくるかもしれないけど、多分そんな機械はないだろう。

「人間じゃなかったら何なんです？」

さして興味もなかったがほかに会話のネタもなかったので聞いてみる。

「うーん。難しいな。俺様が何者か、なんて哲学的なことは考えたことないからな」

「そっいうもんですか？」

「俺様は日々を過ごすだけで手一杯なのだよ。ひゃひゃ」
どうでもいいかもしれないけど、下品な笑い方だ。

「ま、あえて何者かと言うなら、知的生命体だ」
驚いた。本は生命体だったらしい。

「それなら人間と変わらないんじゃないですか？」

「そう。俺様は人間と変わらない。ただ、物質的かそうでないかの違いしかない」

……。なんだかんだでこのおっさん、難しい話が好きなのではないだろうか。

「肉体がないだけで、基本は人間とおんなじってことだよ」

本ばかりの部屋を歩いて十分ほどでようやく出口らしきドアが見つかった。なんだか槍のような変な装飾がされているドアだ。

「本の山で出口を隠すとは、これは嫌がらせですか？」

「俺様がやったんじゃないからな」

子供のような言い訳は止めてほしい。

とりあえずノブをひねって引いてみるが、動かない。ああ、これ押すのかと納得し、割と思いつ切り押し開くと、

ガコン！！と半分くらいでドアに何かがぶつかった。

すつと顔を隙間から出して外を見ると、

「……」

黒髪がドアから生えていた。

つてのはおもしろくない冗談で、ほんとに女の子がドアに頭をぶつたりとひっ付けているだけなんだけど。

「お前さん、状況を冷静に見てないで、先に言うことがあんだらう」
おっさんに言われてはつとした。何僕はこの状況を楽しんでいるんだよ。まず謝らないと。

「ぐ、ごめん。まさか人がいるとは思わなくて」

黒いワンピースのような服を着た少女に話しかける。

すると少女は顔を付けたままグイっとこっちに顔を向ける。

「いえ、お気になさらず」

全く表情の変化がない顔を見て、大丈夫なのかなと安心したのも束の間。その鼻から一筋の赤い雫が万有引力に従い落ちていく。

「ぎゃー！は、鼻血！！」

驚きのあまり隙間から飛び出して彼女に駆け寄る。

女の子は黙って手を鼻にやり血に触れてようやく気がついたらしく、目を見開いて驚きを表現していた。

「と、とにかくこれで押さえていて！」

僕は手持ちのハンカチを彼女に渡し、

「おっさん！救急箱とかないの？」

「おっさんじゃない！エルだ！確か廊下の突き当たりの部屋にあったはず……」

おっさんことエルさんも動揺しているのか声に余裕がなかった。

そんなことにも気付かず、僕は救急箱を求めて駆け出した。

それが僕、緋島直樹と彼女、エイナ・ヴァルクユリア・ジユトム・テーゼとの二度目の出会いだった。

？ 心写

幽霊屋敷の中を僕はゆつくりと歩む。

山中にある屋敷のため、時折のぞく風景は見ごたえのあるものだ。いつの間にか夜になっていたようで、あたりは暗いのだがその方がいいこともある。たとえばきれいな月とか。町の夜景とか。

腕時計を見るともう九時だった。いい加減空腹も限界に達しそうなのだが、この身に起きたことを知ってからじゃないと寝つきが悪くなる。

そんな意地にも似た考えで僕はこの屋敷に残っている。

少女の出血事件でしばらく僕とエルさん（おっさん）はあたふたしていたが、あまりにも少女が冷静に対応するためなんだか情けなくなつた。僕って落ち着きないのかな？

あとは一人で治療するといって少女が自室（と思われる書架の向かい部屋）に籠ってしまったので、屋敷をふらふらとして暇を持て余す。

天岩戸、とは違うか。機嫌を損ねているというのは同じだけどね。この屋敷はあまり人が住んでいるようではなかった。よく見ると埃が溜まっていて、掃除が行き届いているとはお世辞にも言い難い。多分外から見た姿も綺麗ではないのだろう。

幽霊屋敷と呼ばれているのも少し納得する。蔦が外壁に絡まり、庭園の植物が好き勝手に伸びていたら誰だって幽霊が出そうだと考えるよ。

（それにしてもあの娘、確か学校の前で会った女の子なのかな）
実に今更な疑問のような気がするのだけど、さっきまで僕はそこまで考える余裕がなかった。……これを免罪符にしたい。

（あの青い光はなんだったんだろう？）

光を見て以降の記憶がない。現実的ではないかもしれないけど、

その光のせいで気を失ったのかもしれない。

……現実的、ね。

その思考に思わず笑みを浮かべてしまう。

その笑みは嘲笑だ。

僕は見てきているのに、現実的なんてがまだ考えている。

「何やら怪しい笑みを浮かべていますね」

ぎよつとして見るとジト目と出会った。

「怪しいってどんなふうに？」

「いたずらに成功した子供かいたずらを計画している子供のようにです」

……。

それは同じもののなの？

「とにかく傍目から見れば危ない人のようでした」

「たとえばが多すぎると逆にわかり辛いよ」

苦笑しながら、

「ところで、……その、大丈夫？」

「はい。鼻は少し赤いですが、血は止まりました」

そう言ってこちらを見る少女。

その眼は青ではなく、純日本人の黒目をしていた。

やっぱり見間違いなのかな。

今は目より鼻を気にかけるべきだよね。

「ほんとに大丈夫？」

「くどいですよ」

バシリ、一刀両断。

うん。なんて言うか、目が冷たい。

「話したいことがありますので、来てもらえませんか？」

「あ、うん」

拒否権はない気がした。

彼女が向かった先は応接間のような部屋だった。ソファアが二つ、

机を挟むように並べられている。赤い絨毯や壁にかかった絵なんかとっても高そうだ。ところどころ掃除の不徹底が目立ったこの屋敷だけど、ここだけはきちんと清掃が済んでいた。

三階建の屋敷の一階の一番広い部屋がここだと彼女は語った。

広い。六畳一間の部屋に住んでいる僕がすごく惨めに感じる。

まあ、広すぎる部屋に一人で住んでも寂しさが倍増するだけだし、僕は六畳一間の方がいいんだ。（強がり）

「オウ、兄ちゃん。待たせたな」

先に拾われたのか（？）革ベルトで縛られた本がおしゃれなテールブルの上に置かれていた。

「待たせたとはどういうことですか？」

「いや、本当ならこんな時間をかけるつもりはなかったんだがな。手間取っちゃった」

一体何に手間取ったのか、聞く前に「どうぞ」と席を勧められた。なんだかタイミングを逃して聞きづらい雰囲気になる。

突っ立っていても仕方ないので、言われたとおりにソファに腰掛ける。うわ、フカフカだよ。ここで寝たら気持ち良さそうだなー。

「……スウ」

「狸寝入りですか？」

いえ、これはちよつとだけマジ寝です。

うつすらと目を開けると反対側のソファに少女が座っていた。

「随分苦しそうに眠るんですね」

「……そうなのかな」

寝顔なんて自分じゃ見れないし、誰かに指摘されたこともないの
でわからない。

「うさぎさん、なんですか？」

「はい？」

「夜毎に枕を濡らす、寂しがり屋のうさぎさん」

なんかホントに小動物を見るような瞳にのぞかれる。

それが何故かくすぐったくて、痛くて、僕は素直になれずに

「そんなデリケートな性格じゃないよ」

「神経質な性格ではあるとこの小説を読んでいる皆さんにならわかっていただけるだろう」

「誰に話しているんですか？」

エルさん（本）に睨みを利かせる。

「気にするな」

かえって気になると思うが黙っておこう。

ややこしいからね。

「まあ、アホ話はそこまでにしようや、お二人」

後半はあなたもしてましたけどね。

「本題に入るとしましょう」

少女は何事もなかったかのように、淡々と紡ぎだす。

「あなたが体験してきたこと、その真実をお伝えします」

知りたくて、それでも知りたくもなかったことを、

彼女はまずテーブルの上にあったエルの戒めを解いた。

続いて何かの図鑑クラスの厚さと重さを持つその本を片手で持ちあげそのまま開いた。

シュ、シュという紙がすれる音がしばらく続き、真ん中の辺りまで開いた。

淡々とページをめくる彼女の姿を見ると、なぜかそのとき僕は二日前の出来事を思い出していた。

理由がまったくわからない。別に二日前に似たようなことがあったわけでもない。ほんとにふと二日前のことが思い出された。

二日前は、欠落が起きた日だ。

「二日前」

彼女はあっさりとした声で、

「あなたにとって何が起こりましたか？」

僕には、

「僕の日常が変わった。せっかくできた友人が他人になった」

自然と言葉が紡がれる。木の葉についた滴が地に落ちるように、
抗いようもなく僕の心が零れる。

「あなたはそれを望みましたか？」

僕は、そんなことはどうでもいい。

どうせいつものことだから。

「望んでなんていない！」

僕の意味とは反対に、言葉があふれる。

「いつだって！いつだって！僕は失ってばかりで！どんなに努力しても欠落からは逃げられなくて！でも諦めることもできなくて！」

心の吐露は止まらずにいままでの欠落のことまで僕は吐き出す。

いつの間にか、涙が流れていた。

そっと手が触れる。

「ありがとうございます。あなたの心を写させてもらいました」

そう微笑む彼女の左目は青く輝いていた。

「私はエイナです」

「ぼ……くは……」

「無理しないで、ゆっくり休んでくださいね」

優しいその声で、僕は瞳を閉ざした。

？ 欠落と改変

夢を見ている。

初めての欠落で消えてしまったあの女の子。その子の夢。

暖かい笑顔がかわいい子だ。

家が隣で、年も同じで、物心付く前（と言ってもその頃物心があつたかどうか分らない）から一緒に遊んでいた。

僕は子供ながらにその子を意識していて、たまにいたずらして泣かせてしまったりしていた。けど、いつも最後には仲直りして、暖かい笑顔を僕にくれた。

時折、僕は見たくなる。

今はもうない、彼女の笑顔を。

甘い匂いがする。

書架で感じた匂いと同じだ。

「……泣いていますね」

「まさか本当にウサギなのか？」

「私の分析が間違っているとしても？」

「偶にとちるくせに、って！止める！そんなにギュウギュウ閉めたら本が傷むやろうが！」

「……何してるんですか？」

起き上ったら女の子が図鑑クラスの暑さの本を革ベルトで思いつきり締めているというレアなシュチュエーションに出くわしました。

「おう！起きたか兄ちゃん。悪いけど助けてくんない？」

「必要ありませんよ。黙って刑を執行させてください」
帰りたい。

無表情なまま本を踏みつけているエイナさんを見ていて、心からそう思いました。

「見苦しいところをお見せしました。すみません」

慇懃つぽく言うエイナさんを見ながら「ハハハ」と乾いた笑みを浮かべる。

「あんがとう。お前さん口は悪いが、やっぱ良い奴だ。根暗つぽいけどな」

僕はエルを脇に抱えていた。あまりにも可哀そうと思ったので救出したのだけど、

「エイナさん、お風呂を借りていい？」

「どうぞ。ここを出て左へ一直線です」

「まてーい！！俺様抱えたまま水気のある場所へ行く気か！！」

ばたばたと暴れるので、お風呂を諦める。

改めてエイナさんを見る。

黒いワンピースのような服を着ている。どことなく近寄りがたい

雰囲気はあるものの、可愛い娘であるのは確かだ。

むしろその雰囲気がミステリアスな魅力を放っているといえる。

その彼女の左目は、今は黒い。

「どうしました？直樹さん」

「うつん。なんでもないよ」

「お前さん、エイナに手を出したら承知しないよ？」

「エイナさん、トイレはどこですか？」

「廊下を左に行って、三つ目の扉にあります」

「さっきより悪化している！？ちょ、おま！」

何だかムカついたのでエルをいじめて解消する。

ストレスは溜めるべきではないよね。

時刻を聞くと午前三時だという。

僕、今日どれだけ寝てるんだろう？

パタパタとスリッパを鳴らしてエイナさんは僕の数歩前を歩いて

いた。どこか子供っぽくて微笑ましい。

「何をにやけているんだよ。お前さん」

はっとして頬のあたりを触る。

「……やましいことでも考えてたんですか？」

振り向きもせず冷たく言い放つエイナさん。うん。なんていうか、オーラが怖い。

「全くの誤解だよ」

おっさんはいらないうことしか言わないな。お仕置きにベルトの穴一つ分締めてあげよう。

「ちょ、本は伸縮せんぞ！」

黙らせるためにもう一つ分締める。

（ギブギブギブー！）

大人しくなつたので開放する。エルへの対処法が見つかった。

「では何を考えてたのですか？」

と聞かれても……。答えに窮する。さすがに「子供っぽくてつい頬が緩みました」と言うわけにもいかないしな。

「その、僕他人の家に泊まったことがなくて、それで何気に初めてだん……って思ってたただけなんだけど」

「？それが楽しいのですか？」

「うん。まあね」

「そうなんですか」

嘘を言っただつもりはないけど、そう簡単に信じられると微妙に罪悪感を覚える。

「えーと、エイナさんは一人でこの屋敷に住んでいるんですか？」

なぜか敬語を使ってしまう。やっぱりこの娘、話しかけにくいよ。

「一人ではありませんよ。エルさんがいます」

エルは一人とカウントされるのだろうか？

「……ふふふ」

堪えきれずに漏れたという感じの小さな笑声が聞こえた。見ると少し肩が震えている。そんなに面白いこと言っただけかな？

「どうしたの？」

「ごめんなさい。まさかそんなことを聞かれるとは思ってもみなくて」

振り向いた彼女の笑顔は本当に嬉しそうで、

暖かい、気がした。

「どうして？結構気になると思うけど」

動揺を気取られないように会話を続ける。

「だって今日あれだけのことがあったっていうのに、そんな普通のことを聞いてくるとは思わなかったんですよ」

うぐ、確かに。僕ってそういう大きなことよりも、小さいことに気がすることが多いような気がする。細かい人間なのかな。

そう少しショックを受けていたのだけど、僕は意図せず微笑んでいた。

彼女が本当に楽しそうなので、それを曇らせるようなことはしなくなかったんだ。

エイナさんが向かった先はバルコニーだった。

少し肌寒い気もするけど、気持ちいい涼風が吹きぬける。こういうのは嫌いじゃない。

「ここからの景色は好きなんですよ」

手すりに寄りながら、エイナさんは微笑んでいた。

僕は人ひとり分の間をとりながら彼女の横に立つ。

深夜と早朝の境界、この時間では街を照らす人工の光はほとんどない。

自然の光だけがこの闇を照らしていた。

「うん。僕も好きだよ。今みたいな時間だと、特別綺麗だね」

「そうですね。でも、今の時期だと昼間はこの山の深緑が見ものだと思いますけど」

「それは考え付かなかったよ」

僕は空しか見ていなかった。暗い街を照らすこの空を。でも彼女は空じゃなく、この山の緑にも目を遣れた。それが僕らの違いなんだろう。

「……そろそろ本題に行きませんか？」

少し目を伏せながら放たれたその言葉に、僕は安堵感を覚えていた。

ようやくそこに行ける。

僕はきつと自分ではその言葉を言えなかった。

それは僕がこの娘との会話を楽しんでいたからかもしれない。

でも、女の子ばかりにリードさせていては申し訳ない。

「じゃあ、まず君は何者なの？目が青くて、それを見るたびに僕が眠ったのはどうしてなの？」

「私は、あなたの言う欠落を正すことができる存在です」

僕は思い出す。欠落は起きてから1週間以内に、元に戻ることもある。どういった条件で戻るのか、僕には見当もつかなかったけど、

「その存在は記録者^{リギスター}と呼ばれています」

「記録者？」

「不安定な世界を記録することによって確定する者だといいます」

記録とはどういうことだろう。

不安定な世界は分かる。僕が言う欠落が起きるこの世界ということだろう。

「記録とは？」

「……うまく説明できません。記録は私ではなくエルさんが行うものです。私はその補助をするだけです。家計簿をつけるときに暗算ではやりづらいですよ。私は電卓みたいなものですよ」

うすうす感じていたことだけ彼女の例えは少しわかりにくい。あと、的を射ていないことが多い気がする。

「つまりこういうことだ」

僕の困惑を察したのか脇に抱えたエルが話し始める。

「俺様が世界の記録をするためにはエイナの目を借りる必要があるんだ」

「目を借りる？」

「そう。どうもお前さんは俺様の本体がこの本だと誤解しているよ。うだが、俺様は精神生命体に近い存在だ。だから質量としての本体はない。物質に関与するためには俺様は幽霊みたいに借り憑かないとならねえ。今はこの本に取り憑いているだけなんだよ」

「そうか、おっさんは幽霊だったのか。と僕なりの解釈で全てを終わらせて流す。この人（？）の話は微妙に難しい。」

「目を借りるっていうのは視界を同調させるってことだ。俺様はその視界に映したものを記録することができる。正確には視角情報を文章情報に置き換えて……」

「ごめんなさい。わからないです」
諦めました。

「えーとだな。この本、こいつには1月前から今日までの間にエイナが見た光景が文字情報として載っている。俺様がこの本にそれを書き込んだというわけだ。これが世界を記録するってことだ」

「……よくわからないような、わかったような、イマイチはつきりしない。」

少し首を捻ったが質問はしなかった。

「わかったか？なら、続けるぞ。俺様たちがそんなことをするのはお前さんの言う欠落が起こらないようにするためだ。俺様たちはその欠落のことを改変（フューレンFehlen）と呼んでいる」

「改変？」

「そう。過去を変えることを表している」

「あの、僕が一般論を言うのも何なんですけど、過去を変えることなんてできるんですか？タイムマシンでも使えばできるのかも知れませけど」

僕の脳裏に某ネコ型ロボットや、車型タイムマシン等のタイムマシンが浮かび上がる。あの欠落がそんなもので起きているとは思え

ないんだけどな。

「タイムマシンね」

そんな僕に少し皮肉な笑い声が聞こえた。

「タイムマシン等による時空移動を伴う過去改変はパラドクスを生させる故に、成り立たねえ。因果の関係がおかしくなるからな」

僕は困り果ててエイナさんに助けを求めるように視線を移す。

……コクリコクリ。この娘、退屈すぎて眠かったのか立ったまま首だけで船を漕いでるよ。

唯一の味方がまさかの戦線離脱したため僕は仕方なく言おう。

「どういふことが説明を」

自分の無学をさらけ出すようでなんだか気恥ずかしいやら、腹立たしいやら。

「例えば、お前さんがタイムマシンを使って過去の自分を殺したとする。それで現代に戻るとお前さんが死んだ世界になっているはずなんだが、それだとお前さんは過去に死んでいるんだから、現代のお前さんが過去に行くことはありえないだろ？」

それじゃお前さんは殺されない。しかし、死んでいる。そんなわけわかんない状況に陥っちまうわけだ。これをタイムトラベルパラドクスという。

つまり原因と結果の関係が矛盾しちまう」

ふむ。難しいな。その理論を考えた人は普段から難しいことばかりを考えてきたに違いない。人生楽しんでいたのだろうか？（まあ、僕が言えたことではないかもしれないが）

「これに対して改変は過去に赴く必要がない。というよりもこの世界では時間というものが確固とした存在じゃない。現代にいながら過去の情報を改変できる困った世界なんだよ」

「時間が確固としていないとは？」

「過去を変えることは普通できないよな。でもこの世界の常識は違う。この世界では普通に過去を変えることができる。条件さえそろえば誰だって過去を変えることができる。」

それがこの世界の時間がちゃんとしたものじゃないっていう何よりの証明じゃないのか？」

なんだか問題な発言があったように聞こえたが、僕の関心はそんなところには惹かれなかった。

「……誰でも？ 変更は誰でもできるものなの？」

「そう。誰でも。お前さんだろうが、お前さんの知り合いだろうが、他人だろうが、エイナだろうが、誰でも」

つまり、僕が今まで体験した欠落は誰かが過去を変えたために起きたということなのか。

夏の日にあの女の子が消えたのも。

中学の入学式の日に関親がとうの昔に死んだことになっていたのも。

僕が今高校で転入生として、少し距離を置かれているのも。

誰かが望んで変更したというのか。

僕は自分の中からドス黒い何かが溢れ出してくるのを感じた。それは尽きることなく、次第に僕を飲み込んでいく。どこか懐かしい内側から張り裂けそうなこの感情。それは……。

ぎゅ、と何か柔らかいものが手を包んできた。

あったかい。ノスタルジックなその温かさはより懐かしいもので、黒い感情は嘘のように霧散していた。

「エイナさん？」

「……はい？」

どうして手をと聞きたかったが、

「その、……何でもないです」

この手の温かさを長く感じていたくて、僕は閉口してしまった。

「？ そうですか？」

少し首を捻った彼女はどこか眠そうな顔で、僕を見続ける。ぎゅう。とより強く握りしめられる。

僕は迷った末、少しだけ強く、壊れないように握り返した。

「青いね」。少年」

どこか楽しそうに笑うエルの声なんて聞こえなかった。
ただこの手の温かさだけが僕の心を占めていたのだ。

満足したように鷹揚に頷くと、エイナさんは一人屋敷内へと戻って行った。

「……ハア~~~~~。何だったんだろう？」

長い溜め息を吐いてから、僕は手すりに背中を付けてへなへなと座り込んでしまった。

「ぐうう。目の前で青春されて、俺様胸焼け気味」

悶えるようにバタバタと暴れる図鑑を見ながら思う。

「おっさんの目はどこにあるんでしょう。死ねばいいのに。ページの上下の端だけ全部折って閉じたら真ん中だけ浮くようにしてあげましょうか？」

「思考馱々漏れ！！兄ちゃんやバいぐらい毒吐いてるよ！！」

僕はそのままぎゃあぎゃあ騒ぐエルを無視して包まれた手を見る。
そこには彼女の温もりが残っているような気がした。

「初々しいやね」

「……ところで、過去を変える条件って何ですか？」

エルが漏らした一言は無視して、僕はさっき聞けなかったことを尋ねた。

「それは明日にしようや。あいつも眠^{エイナ}たかったみたいだし」

確かに眠そうだった。それもそうか。

今は午前3時。コンビニ店員ぐらいしか起きていない時間帯だ。
僕はしょっちゅう眠っていたせいで然程眠気は感じないが、それに付き合っていた彼女は限界だったのか。

僕は苦笑いして、

「僕ももうひと眠りします」

「おう、廊下に入っすぐ手前の部屋が客用の寝室だ」
その言葉を聞いてバルコニーを出る。

「って！！俺様置いてくの！？ねえ！ちょっと待てよー！」
エルを放置して客室へ向かう。

……夜露で濡れて湿気ればいいのに。

？ 欠落と改変（後書き）

今回は普段より多めの内容ですがいかがでしたでしょうか？

今後は毎週月曜日の更新を予定しております。

今後ともよろしくお願いします。

次回も増量予定です。

？ 急転　　もう一人の記録者

薄明るい中、僕の意識は徐々に覚へと向かう。けど、布団の魔力はなかなか僕を放してくれなかった。

これはいつまでも眠れそうだなと考える一方、自分が、枕が変わっても熟睡できるとは思わなかったとも考えていた。

しかし、いい加減起きないと、学校に遅れてしまう。ゆつくりと目を開くと。

綺麗な女の子が僕の顔を覗いていた。

金糸のような綺麗な金髪が朝日に輝いていた。

誰だ、この人？

エイナさんではない。

あの娘は黒髪黒目の日本人だ。時折左目がおかしい気もするけど、でもこの娘は金髪に碧眼の絵に描いたような外人さんだ。背が高いのは、個人的に羨ましい。僕は平均ぐらいしかないしね。

薄手のキャミソールから少し見えるプロポーションも申し分ない。特に胸が。ポーチを袈裟がけにしているととても強調されている。

ああ、僕も男子だな。

などとかくだらないことを確認するほど魅力的な女性だった。

「なんかブルーな子ね」

英語を話すんじゃないんだろうかという不安が強かったのだが、彼女が言葉にしたのは日本語だった。

「誰？」

「はじめまして、少年君。私はミルネ・ジウトム・リヴァリアス。この家の家主の従姉よ」

家主？家主ってこの家には元々一人だけだし（エルが一人に数えられるかどうかが気掛かりだが）、きっとエイナさんのことなんだろう。

しかし、エイナさんにこんな美人な従姉妹がいるなんて、知らない

くて当然なんだけど何だか彼女は天涯孤独のような感じがしていた。人との距離の取り方とか、言葉の掛け方とか、そんなコミュニケーションが苦手なようなんだ。

けど、従姉妹がそんなに仲の良い家族と言えるかは微妙な気がする。

「さっそくで悪いんだけど一緒に来てくれない？」

「大事な話がございます」

とどこからか女性の声が聞こえた。声の主を探してみるが、どこにもいない。

「えーっと、この声はやっぱり……」

「はい。わたくしはあのエルと同様の存在でございます。名をエスと申します。どうぞ宜しくお願い致します」

こちらが恐縮してしまいそうになるくらい丁寧な言葉づかいでエスさんはそう言った。

「いえいえ、こちらこそ宜しくお願いします。僕は緋島直樹です」
ベッドの上に正座をしてお辞儀をしました。

丁寧にされるとついペこぺこしてしまうのは日本人の国民性なのだろうか？何となく嫌だ。

とにかく僕は突然現れたエイナさんの従姉、ミルネさんと共に行動することになった。

……RPG？

制服に着替えた後に、よくよく考えたら学校サボってることに気づいたが、なぜかノリノリになっているミルネさんに「学校があるのでまた今度にしましょう」などと言ったらどうなるのか考えたら恐ろしいので黙って彼女に従うことにした。

行く前にエイナさんに一言掛けようとしたのだけど、ミルネさんが「そんなの後々……！」と急かしてきたのでできなかった。

僕らは山を下りすぐ近くの駅に入った。

エイナさん、僕の連絡先とか知っているのかな？

時間通りに電車が来ることにはしゃいでいたミルネさんを見ながら、僕はそんなことを考えていた。

？

というか僕、何か大切なことを聞き忘れてなかったっけ？

.....。

「あつ」

昨日の続きを聞いてなかった。

フルレン
改変を起こす人の条件とか、そもそもエイナさんたちがどうして僕に接触してきたのか、重要なことだよ！

あまりの事態に半ば呆れてしまう。

忘れるなよ、僕。

「じいじい」

朝にしては珍しく透いていた電車の座席に腰かけていると、じいじと隣のミルネさんが僕の横顔を見ていた。というかじいじじいって声に出てるし。

「え、あの、どうかした？」

露骨な視線を無視するほどハートが強くない僕は聞かざるを得なかった。

「別に。ただ女の子と一緒にいるのに黙って考え込むのはどうなのかな」って思ってたただけだよ？うん。別に怒ってはいないんだよ？」
なんとというか、うん、怒ってるね。

背後に阿修羅が見える。金髪に阿修羅ってのはミスマツチだ。

うん。つまりミルネさんは何か話せと言いたいのだろうか？

僕がしなければならぬ話題は今一つだけだ。

リギスター

「ミルネさんってさ、やっぱりエイナさんみたいな記録者なの？」

少しつまらなそうに口を尖らせるミルネさん。やばい、選択を間違えちゃったかな？

「そうよ。だって私とあの娘は従姉妹だもん。それにこの目、金髪でイギリス人みたいな顔つきしてるからばれないけど、あの娘とお

んなじ。記録者の証、それがこの蒼い目」

自分の氷のような青い瞳を指さしながら彼女はそう言った、

記録者は目が蒼いのか。てことはエイナさんのあの時の光も目と関係しているのかもしれない。

ミルネさんはそんな風に考え込む僕に気づかず、ぐだーと背もたれに体重をかけた。

……仮にも（失礼だから絶対に言えない）女の子がそんな気怠そうにしているのだろうか？

ちらつと見てみると薄く青いキヤミから少し胸の谷間が見えた。

僕はコンマ2秒で目を逸らした。

い、意外と大きかった。

キヤミは薄い服のはずなのに、どうやってたら着やせできるんだろうか？

「えっと、その服」

胸が見えるのをどうにかしてと言いたかったけど、そんな直球に言えるわけもなくもっていると、何を思われたのか今度は座席に腕をつきながら僕を見つめる。

ああ、そんなことするとさらに胸が見えて大変なことに！！

僕は慌てて再度目を逸らした。コンマ5秒で。

「服が、どうしたの？」

ゆっくりと一字一字はつきりと聞こえるようにミルネさんは言う。

「……、似合ってる、ね」

そんな無難なセリフしか出てこなかった。

そんな僕にミルネさんは何を思ったのか大きく頷き、続いてマシンガントークを繰り出した。

服をどこで買ったとか、どの雑誌に載ってたとか、だれだれが着ていたのを見て欲しくなったとか、そんなことだったと思う。

適切に（適当にしたら怖いので）相槌を打ちながら、こんな外人っぽい顔して日本語が流暢に話すミルネさんをどこか微笑ましく思っていた。

目的地に着くまではね。

「ねえ、……ホントにここが目的地なの？」

げんなりしている僕に対して、

「year！当然だよ！日本に来たらここに来るしかないわよ！」

テンション上がり過ぎて英語出てるよ。というかこの娘の母国を知りたいと僕は真面目に思う。名前が日本人っぽくないし日本人ではない（と断定したけど微妙に不安）。顔がイギリス系だと言っていたけど、じゃ、どこの国の人なの？とは聞いていないので、一人では解決できない疑問だね。ハハハ（発音H A H A H A）。

そんな現実逃避をしなければこの状況を受け入れられなかった。

何を隠そうここは聖地（？）。電子都市・秋葉原。テクノポリス

「聖地メッカがこんなに近くにあるとはね」

どこかとーくを見てそう思ったかつたけど、さすが都会、ビルばかりで遠くが見えない。オーマイガー！

いや、日本の電化製品が欲しいとか、そういう案件なら全然いいんだ。むしろ歓迎するよ。

いきなりアニメ調の女の子が描かれたイラストが掲げられた店に入るというのはどういう事なのだ。

外で待っている訳にもいかず、仕方なく店内に入ると飛び込んできた18禁のマーク。もう何も言えない。

（嘘だ。あんなに綺麗なのに）

金髪碧眼なのに、

ミルネさんが腐女子だったなんて！

恐ろしいことにエロゲショップ（というらしい）で無駄に箱がデカイゲームを買い漁り、それを僕に持たせて（これが結構しんどかった）からも買い物は続いた。次はギャルゲショップ（エロゲショップの全年齢版のようなもの）に直行し、そこでもゲームを買い漁った。

そんな調子でもう5軒もゲーム屋を梯子してお昼になった。

残り三軒は普通のゲームシヨップだったけど、そういう問題云々よりもこの両手一杯のゲームを何とかしたい。

まさかドラマのように女の子の買物で荷物持ちをやらされるとは、昨日までの僕には想像もできなかっただろう。

メイド喫茶で昼食を取ることになったけど、この時点で僕は疲労でダウン。ミルネはそれを気にせずメイドさんにオムライスをフリーしてもらっている。

極楽にいるようなその姿に僕は少し苛立ちを覚えた。

僕はエルに聞きたいことがあったのに、どうしてこんな状況に遭ってるんだろう。

？というかこの二人（忘れていたがエスも何かに憑依して、一緒にいるはず）僕に話があるんじゃないかなかったか？

「ミルネさん。いい加減にしてください」

後半戦へgo！といった風に気合を入れる彼女に耐え切れなくて僕はつい冷たく言ってしまう。

「うん？」

いや、そんな子供みたいな純真な顔をされても……。

なんていうかバカみたいだ。苛立ちも今ので立ち消えてしまった。

「いや、もういいです」

「そうはぐらかされるとかえって気になるというのが人の性というものじゃない？」

つまりさっさと話せということなのだろう。

「お二人は僕に話すことがあったんじゃないんですか？」

「……………」

沈黙、atアキバの歩行者天国。

「い、いややわ。それに気づくのが遅過ぎまへんか？」

「僕の所為！？というか動揺しすぎて京都弁になってるよ!!」

「ミルネ、あなたって娘は……………」

「いや！エスさんもあいさつ以来一言も話してなかったよね！完全に忘れてたよね！」

「いえ、わたくしは早くゲームをやりたいなと思っていただけにございます」

「あなたも腐！？それよりも二人揃って口調がおかしくなるのはどういう事！？」

やばい。この二人、想像を絶するほど頼りない。というか自分の趣味に入れ込み過ぎだ。

「それで話って何？」

いい加減にしないとこのまま日が暮れてしまいそうなので僕がリードする。

「その前に少しいい？」

彼女の目付きが鋭くなった。……両手一杯のゲームを見なければカッコいいのかもしれない。

「本当に知りたいの？」

「うん」

今更何をしたかと思っただけ、そう笑い飛ばすことができないような彼女の言葉や雰囲気^{フューレン}に重みがあった。

「あのね。私たちは今まで^{フューレン}改変について話した人の記憶を奪っている。混乱を避けるためにね。まあそもそも^{フューレン}改変が起きてもその人たちは気づけないんだけど」

というよりも彼女たちの言葉を信じる方が難しいはずだ。

誰も^{フューレン}改変について気づけないのだ。彼女たちや僕のような例外を除いては。

「でも君は違うでしょう？君は^{フューレン}改変が起きたことがわかる。それに私たちにもあなたの記憶を制御できないってエイナは言ってた」

（エイナさんが……）

彼女が僕を、記憶を変えようとしたのか。

「だから、私が真実を話したら、君はずっと記憶に苦しみ続けるよ？知らなければ良かったって思う時がいつか絶対に来る」

知らなければ、普通に生きていけた。関わらなければ変わらなかった。

でも、僕は知っている。

あの日、消えてしまった女の子に、伝えたかったことを伝えられなかった今の僕の後悔を。

僕は^{フューレン}改変からは逃げられない。この先も神様の怠惰が招いた理不尽で不完全な世界に生きていくしかない。

「僕は、それでも知りたい。これからも^{フューレン}改変に巻き込まれ続けるから、今知らないといけないことなんだと思う」

さびしそうに笑い、ミルネさんは頷いた。

？ 急転 〱もう一人の記録者〱（後書き）

予告通り今回は長いです。
なので分けて掲載します。

？ 急転く黒い負素く

「人の感情がどれだけ強いかわかってる？」

「さあ？僕は諦めることで改変が^{フューレン}あつたこの世界を受け入れてきたからね。僕の感情自体はそんなに強くないよ」

「それは君に限ったことじゃない。例えば私なんかは好きなゲームの批判をされたら『Ok戦争だ』ぐらいに怒り狂うよ」

いやそんな自慢げに言われても……。

僕らは執事喫茶に来ていた。執事といっても男だけでなく女の子の男装執事（というのだろうか）も半分くらいいた。

入ったばかりのとき、ミルネさんはまたしてもテンションのメーターが振り切つてしまい、また話を聞けなくなると冷や冷やした。まあ、さすがに今回は気分を切り替えて今の話に至る。

「直樹君は分からないかもしれないけど、人の思いってのはホントに強い力を持つてるんだ。悪いことだと知っててもしてしまったり、人を傷つけてしまったりしちゃうんだ」

「自慢じゃないけど、僕は育った環境はよくないからね」
ホント自慢にならないよ。

甘ったるいパフェが食べたい。食べ過ぎて気持ち悪くなるくらいに食べたら、幸せを味わえるかな？

「自虐なら止めた方がいいわ。聞いている人の気持ちを考えなさい」
何だか萎縮してしまう。幼いころ両親に怒られた時を思い出すけど、少し違う。

もし、僕に姉がいたならこの人のように僕を振り回して欲たにさせたり、怒らせたり、けど、なんだかんだで僕のために怒ったり、悲しんでくれたりするのだろうか？

（理想形過ぎかな……）

「ごめんね」

ここは素直に謝っておこう。

「気を付けてね。それで話を戻すけど、人の思いは本当に強い。過去を変えてしまいうくらい強いんだよ」

彼女の言いたいことが分かってきた。

僕だっと思ってたことがある。過去を変えたいと。

そもそも過去は変えられない（はず）なんだけど、それでも人は願わざるを得ない。

だけど、僕の場合は諦めてしまった。

諦めるのが普通だった。

「過去を変えるのは人の思い、というか願いつていうことなの？」
確認の意味を込めた言葉にコクリとミルネさんは頷いた。

「思いや願いなどという綺麗な言葉で表現されるような生易しいものではありませんよ。執念や妄執などの言葉が適していると思われるます」

ようやく喋ったエスさんは微妙にどうでもいいことを付け足す。

僕らに共通認識があるのだから、それでいいと思う。この丁寧な女性（？）はとても神経質なのかもしれない。

「エイナが君に接触されたのは、二日前、もう三日前か。君を中心にフォーレンが起きたから。改变の中心の人物が改变を行った人っていうパターンが多かったから、彼女も君が改变を行ったと考えたのよ」

だから、昨日エイナさんは僕を待ち伏せしてたということが。

「その時、エイナさんはアンチマター負素がどうか言っていたけど、それってどういうもののなの？」

アンチマターフォーレン「負素は改变を行ったものが持つ黒いオーラね」

何だか面倒くさそうな表情だ。

「ミルネ、あなたの説明は最低限の要点しか押さえてないわ」

「分かればいいのよ。詳しく説明したら無駄に時間かかるだけだし。ドラマの最終回だけ見たって訳わからないでしょう？」

なるほどね。予備知識がないとわからないということか。あれ？この娘ならアニメを例えに出すと思ったのだけど、違ったね。

「アニメはパターンさえ押さえれば、最終回だけで全話想像できる

わ」

どんな表情していたのか、僕の顔だけで疑問を読み取ったらしい彼女が答えてくれた。

「というか、どこの神様ですか、君は？」

「それでもきちんと言明しなければわたくしの気が済みません」

「うわ、自己中発言。」

最初はエルと違う丁寧な話し方で騙されていたが、難しいことを話したがる（理由はちがうのだろうけど）という点では、二人は結構似ている。

「後で報告書を出しなさい」

びしつと肩にかけたポーチに指さすミルネさん。ああ、エスはあれに憑依しているんだ。

それと報告書で何？読まなきゃダメ？

「仕方ありませんね。この場合はマスターのあなたに従いましょう」

僕の意見は終ぞ聞かれなかった。

……僕の為を思っ言ってくれたはず、だよな？

「それで、何処まで話したけ？」

「アンチマスター負素がなんなのかってところ」

「アンチマスターそうそれ、負素は改変をするとその人に現れる黒いオーラって言ったわね。まあオーラは普通の人には見えないんだけどね」

僕は普通の人なのだろうか？という疑問はこの場は押さえておく。
う。

「でも、僕は改変をフューレンしたことはないよ」

大袈裟に頷いたミルネさんはメニューを開いてから男性執事を呼んだ。そしてパフェとコーヒーを頼んでから、メニューの上からこつちを上目遣いで見る。

！かわいい。

大人っぽい雰囲気のミルネさんのそんな子供のような行動はホントにかわいい。ギャップがいいのだろうか。

見とれるわけにもいかないのでとりあえず執事さんの顔を見て、

「僕は紅茶で」とオーダーした。

……。

今一瞬すごい形相で執事が僕を睨んだんですけど。これって接客マニュアルにあるの？

ふと見ると周りに何人か僕らを、というよりミルネさんを見ている人たちがいた。（店員の執事も見ていた）

ああ、とミルネさんを見て今更のように僕は納得した。

（みんなミルネさんが気になっているんだ）

我ながら鈍感だ。この人はただでさえ日本人離れた美人（まあ日本人かどうかは知らないけど）だ。それが聖地に男と二人で来ているのが珍しいのかな。

よくわからないけど、秋葉原に用があるのは僕の方に周りからは見えるのかもしれない。実際は逆なのだけど。

少し気まずい感じの周囲の空気を気にせずに、ミルネさんは僕に話し続ける。

「エイナもすぐに君が改変したんじゃないって気づいたのよ。それですぐに目を覚まさせて、そのまま家に帰ってもらう予定だったんだけど」

周りが少し気になるけど、話を聞かないと。こんな状況になって僕が神経質な性格なんだなと再確認する。エスのこと言ってられないね。

「……ねえ、聞いてるの？」

不機嫌そうに頬を膨らますミルネさん。かわいい。美人系の女の子だけど、中身はそうでもないのかな。

なんて感心してる場合じゃなかった。周りの視線の中に僕への敵意が込められたものが二割ほど出てきた。

どうしよう。こういう時、漫画とか小説だとどうしたかな？食べ物に奢ったりしていたような気がする。

迷っている暇はなかった。

「ごめんね。ちょっと考え事してて。お詫びにここの代金は僕が払

「うよ」

「ホント！？ならもう一つパフェ食べよ！！」

え？マジですか？

「すみませーん！このハイパービッグパフェを一つください！」

え？何そのパフェ。何がハイパーなんでしょう？

メニューで確認。うん。この二リットルペットボトルぐらいの太さで、ビールジョッキみたいなの容器に入ったパフェは何ナノ？

パフェだろう。そんな事分かってるよ。どう考えてもカップルサイズでしょうが。

「ミルネさん、そのハイパービッグパフェは一人で食べるの？」

「もち！！」

「もちって死語じゃないの？というかやっぱり分ける気はなしですか」

「奢ってもらえるならいつもはできないことやりたいじゃない」

そうかもしれないけど、奢ってもらえるからと言って普段食べられない量が食べらるわけじゃないという思考には辿り着かないのだろうか。

「文句は受け付けないからね。ゴージャスビッグパフェを頼まなかった分感謝するべきじゃないの？」

メニューをしてみる。

「！？何この見た目普通のパフェなのに値段だけゴージャスなパフェ！？というかビッグはどこに行ったの！？」

「雰囲気は良さそうだね」

「そんなのは写真次第だね！？というかただのボッタくりにしか思えないよ！！」

おかしそくに笑う彼女をみて知らずに僕も笑っていた。

敵意が混じった視線が、僕らを見る視線の中の5割に増えた。

「それで、エイナがフェイナがどうして君を家連れ込んだかつてふうと

「いいから、食べ終えてから話してよ」

ほとんど聞き取れないよ。

「はむはむ。……ゴクリ。エイナは君が^{フューレン}改変の影響を受けていないことを知って家に連れ込んだんだって。確かに興味はそそられるけど、見ず知らずの男の子を家に入れて一晩過ごしちゃうなんてどうかと思うよ。はむ。はむはむ。ごくごく」

やたらと早口で言い終えて普通のパフェ、ビッグパフェ、砂糖を4本も入れたコーヒーの順番でミルネさんは手を付けていった。

「僕は^{フューレン}改変の影響を受けないわけじゃないよ。昔、背が5センチ縮んだことがあったよ」

「……なんで？」

「昔僕は背が高かったんだけどそれ以来全然成長しないんだ。隣のクラスの小さい男子が5センチ伸びてたから、多分その男子が僕の伸長を奪ったんじゃないのかな？」

ぶう！と吹いて（口の中には何もなかったのでセーフ）ミルネさんは大笑いした。

「く、くだらない！ふふ、あははは！お腹痛い！！あははははははは！！」

お腹痛いのは笑い過ぎじゃなくて、食べ過ぎじゃないかな？と思いつながら半分まで減った彼女のパフェを見た。

「いや、背の低い男の子には、なかなか気になる問題だと思うけど」「そんなものかな」

会話の合間にパクパクとパフェを掬う。この娘はどんな胃袋をしているのだろう。

「エイナさんたちにとって僕はそんなに珍しい人間なのかな？」

「珍しいどころじゃないって。史上初だよ」

「史上初って……」

そう言われても正直分からない。そもそも^{フューレン}改変だって他の誰かも気づいているんじゃないかな、と考えていたんだけど。

「私たちも^{フューレン}改変の影響を受けるんだよ？」

「え？そうなの？」

「うん。私たちは^{フューレン}改変が起きててもわからないんだ。気づくのはエスみたいな番号なんだ」

番号っていうのか彼らは。^{エルやエス}ということは、エルはしでエスはSなのかな？

「とにかく君はイレギュラー中のイレギュラーってことね。

それとは別に今回起きた^{フューレン}改変は君を中心に起きていたの」

「それってどういうこと？」

「君が^{フューレン}改変で何か影響を受けた張本人っていうこと」

確かに、今回僕はなぜかクラスの（僕の主観で言うと）友達たちとの関係がリセットされ、僕は転校生ということになっていた。それ以外に目立った変化はない。

「^{フューレン}改変の中心にいる人は^{フューレン}改変を行った人物である可能性が高いの。

何故かと言われれば、^{フューレン}改変を行う人はどうにもならない自分の環境を何とかしたいと考えている人が多いから」

例えば育った環境とか、身内の死とかね、とどこか乾いた笑みを浮かべる。何だかさみしそうな気がした。もちろん気がしたただけだけだ。

「まあ、それだけならもう少し話は簡単なんだけどね……」

「……」

ぼつつと外を眺めながらパフェを一口含む彼女は悩ましいほどに綺麗だった。

「人間は怖いからね。自分や人の為に他人を傷つけることだってあるよ」

「そうね。ホントに怖い」
^{フューレン}改変。

それはきつと自分にある悲しみや苦しみを取り除くことができる裏ワザみたいなものだ。

でもそれは内容によっては人に悲しみを強いる。

僕のように、両親が消されたり、幼馴染いなくなったりなんかす

るのだ。

「……本当に嫌だね。改変^{フューレン}って」
「？」

彼女と同じように外を見る。

そこには秋葉原を歩く人々がいる。

この人たち全部にそれぞれの願いがあつて、人を不幸にしても変えたい何かがある人もいるのだろう。

その人たちがみんな幸せになれる方法が欲しい。

これは甘い理想論だろうか？

考え込む僕をどこか温かい目でミルネさんが見てくれていることに、僕は気づいていた。

まあ、あれだね。

「おおうつううう……。き、気持ち悪い……」

パフェの食べ過ぎで吐き気を催している姿を見たら、なんか冷めちゃったけどね。

何が冷めたのかは明記しないけど、この人は残念な人で認識して良い。

ふらふらなミルネさんの足取りに合わせているため、さつきから全然進まない。

「一応聞きますけど、大丈夫ですか？」

「……大丈夫に、見える？」
全然見えません。

「……ふ、まだ終わらんよう」

まあ、公衆の面前で（パフェの食べ過ぎが原因で）もどしたら、この人のプライドは終わってしまいそうだけどね。

「後先考えずに食べるからですよ。暴飲暴食は7つの罪の一つですよ。反省しなさい」

その暴飲暴食の結果僕の財布は一葉さんを二人の野口さんと引き換えにってしまった。

というか、エスさん。貴女は食事中何も言っていなかったのに、終わったらいきなり責めるんだね。うん。やり方が姑息だね。これで高笑いしていたら完全に悪役だね。喋り方は丁寧なんだけど。

そこまではまだ日常だった。

変化は突然だ。

黒。

それは光を全て吸収するが故の黒ではなく、光が存在しない故の黒さ、世界の穴とでもいうべき漆黒だった。

黒い何かが溢れるように、侵食するようにそれは周囲を包み込む。

「いけません！！これは負素です！！」
アンチマター

「それって改変をした人間から持つ黒いオーラ？」
フューレン

「正しくは、彼らの絶望、苦しみ、悲しみ、嘆き、欲望などの感情が具現化したものです！」

焦るエルさんに触発されて少し僕も不安になってきた。

というかこんな時まで細かいところを気にしますか。

アンチマター
負素は僕を囲うように渦巻いていた。

周囲のざわめきが五月蠅かったのだけど、少し高いその声だけが僕の耳を打った。

「な〜に〜して〜てる〜？ひ〜じい〜まく〜ん」

何故か背筋がゾクゾクしてた。

いつの間にか立っていたその少女はニタリと笑う。少女の足元か

アンチマター
らは負素を吹き出している。

フューレン
（この娘が改変を……）

じつとみる。ショートボブの髪に、どこか幼げな顔立ちに、それに反した身長にスマートな体つきだ。

初めて会った時可愛らしいこの子が困っているのを助けた記憶がある。同じ高校の、同じクラスの女の子。

「森川、……未来さん」

「えへへえ。覚えててくれたんだあ〜」

どこか迫力のある笑顔に少し気圧される。

「おかしいな。君はあたしに絶対服従の絶対信頼しているように変えたはずなんだけどな」

「変えたってことは君が……」

「そう。変えたんだ！あたしが、君と皆との関係性を！！でも、どうして君はあたしのことを覚えてるの？

変えたのに。

君の今を変えたのに！！

ねえ！どうして！！どうして変わってないの！！！！」

こ、怖い！！

！の度に彼女はアスファルトをバン！！と音が鳴るように踏みつけていた。

「変えなくちゃ……。君はあたしにずっと頼ってていいんだよ？頼りなくていいんだよ？変えなくちゃ。変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ変えなくちゃ……」

何かすごいことを呟いていらっやいますか！！！！どうしたらいいのこの娘！ばくにどうしろというのですか神様！！

森川さんは寝不足みたいに充血した瞳をギロリと動かす。

「おお！！ヤンデレ登場！！」

何やらこの状況で復活したミルネさんが森川さんをつつり見ています。

「ていうかその発言でシリアスな空気感が台無しだよ！！」

誰か助けてください。

そんな祈りを込めてこの空気の創造主に目を向ける。

「きゃ！そんなに見つめないで」

も、森川さんがもじもじして照れていらっやいます。

諦めの意味を込めてため息を吐いた。

？ 赤い瞳の破壊者

とにかく僕は結構危ない状況にいるのではないのだろうか。

妖しく唇を裂くように笑う森川さんからじりじりと下がりながら、
周りを見る。

黒い穴のような負素が僕たちを囲っていた。
アンチマター

ここは暗闇の闘技場ってところかな。

今更ながら周りが静かなことに気づく。こんな禍々しい黒いものが集まったら何かしらの騒ぎになってそうなものなんだけども、
ま、そんなことに気にしてもいられないか。

「緋島く〜ん。君は、どうして秋葉で女の子と一緒にいるのかな？
デートなのかな？」

ゴゴゴとなんだか周りの負素が僕らを圧迫している。

ド迫力の笑顔を森川さんは浮かべている。……笑顔がこんなに怖いとは知らなかった。

「デートではないと思うよ」

すんなり否定すると何だか左斜め下からキツと睨まれたような気がした。……他にどう言えと？ミルネさん。

「買い物に付き合っただけだよ」

「パフェ奢ったのに？」

「……君はいつから僕らを見ていたんだい？」

あまりの事態に理解が追いつかないのか、恐怖よりも呆れの言葉が出た。ちなみになんかパフェと聞いて、「うぐっ！」と吐き気を再確認したのか気持ち悪そうに口元を押さえたミルネさんはしばらく無視する。本当は背中を撫でてあげたいのだけど、森川さんに刺激を与えるような気がして止めた。

「あなたたちが電車に乗るのを見て、そこから付いて来たのよ」

「学校サボったね？いけないんだよ、学校サボるのは。それも学年
主席の君が」

まあ僕もサボってるんだけどと笑う。

「あなたのほうがそうでしょう？」

「うん？」

「学年主席はあなたの方でしょう？」

……まあ、フューレン 改変を起こした人なら知っているだろうな。

確かに欠落が、フューレン 改変が起きるまでは僕はテストの成績は学年一位だった。もっとも改変後の今ではそんなに成績は良くないけどね。
フューレン 授業が進んでいるから付いていけなかっただけの話ではあるのだけ
ど。

「かつこいいよ、緋島くん。成績優秀で、スポーツもできて、顔は
まあまあだけど優しく困った人を放って置けない。そんな君が好
きだよ」

「……！」

何故だかミルネさんとエスさんが息を呑む音が聞こえる。僕はこ
んなに冷静なのに。

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ」

キツとさっきの二倍増しの眼力でこちらを睨むミルネさん。

「君！分かってるの？フューレン 改変者に告られて何嬉しそうな顔してるのよ
……！」

「まあ、どんな人からでも自分の人柄を褒められるのは嬉しいもの
だよ」

「……………は？」

「だから僕っていう人間性が褒められるのが嬉しかっただけだよ」
さつきからこの人は何をポカンと惚けた表情で僕を見ているのだ
ろう。

「駄目ですね この方 だめだ。こいつ」

いや、だから何がと聞こうとしたとき、

「じゃあ、あたしのモノになってよ。ずっとあたしの傍にいて」

傍にいて、英語で言つと stand by me か。

今度は息を呑むこともできなかったのか、物音すらたてられなく

なつたミルネさんが頬を赤く染めている間に僕はそんなくだらしないことを考えていた。

「ごめん。それはできないよ」

「……として？あたしと一緒にいたら緋島くんを苦しめる全部から君を守ってあげるよ？君があんな顔をしなくても済むようにするよ？君が頼りなくてもいいんだよ？そんなに無理しなくてもいいんだよ？あたしが支えてあげるんだよ？」

ああ、それは僕が欠落に巻き込まれてから、

この不完全で欠けた世界を知ってから、

どれほど望んだ言葉だったろう。

僕の苦しみを知って、支えてくれる。そんな言葉を僕はどれほど切望しただろう？

「ありがとう。でもね」

そう。でも。

「今苦しんでいるのは君だよね」

質問するのではなく僕は断定した。

森川さんは、意識的かどうかはわからないけどゆっくりと胸に手を当てた。

「僕はね、きつと誰にもこの苦しみがばれてないと思ってたんだ。

でも、君は分かってくれてたんだね。多分君はどうにかして僕を助けようとしてくれたんだよね。それだけで、僕はこの上なく嬉しいんだ」

心の底から微笑んだ。それがうまくできているかどうかかわからないけど、

「でも、君の方が今は苦しんでるよ」

彼女は何かに脅えるような顔をした。

「苦しくなんてないよ！あたしはあなたを支えてあげるんだから！苦しんでなんているはずないよ！！」

その言葉が支離滅裂であると彼女は気づいているのだろうか。

「あのね、苦しいのがわかるってことは自分も苦しくなるってことなんだよ？人が怪我をしているのを見たら、自分も痛いような気がするよね？それとおんなじなんだ。人の心の痛みや苦しみがわかるっていうのは、その苦しみや痛みの一部を感じるっていうことなんだ」

それが共感。共に感じるということなんだ。

「僕の苦しみが君にも伝染してしまったんだよ。僕はその苦しみを解いてあげたいんだ。僕の苦しみを理解してくれた優しい君を救いたいんだ」

「うるさい！うるさい！」

あたしが君を救うんだ！！誰もいないところで悲しそうにしている君を救うんだ！！」

耳を塞ぎ、僕の言葉を拒む彼女は癇癇を起した子供のようだ。

「残念だけど緋島君、彼女はきつと意志を変えないよ」

座り込んだままミルネさんはそう言った。

「負素は人の感情を増幅してしまうの。そうなってしまうと誰も人の言うことなんて聞けない。彼女を説得するのは無理よ……。おうえ」

しゃべりすぎて気持ち悪くなったのか蹲るミルネさん。つくづく締まらない人だ。

「あの方は自分の考えを譲らないでしょう。今は力でお眠りいただくのがが最も早く、危険の少ない対処法だと僭越ながら助言させていただきます」

「力でと言われても、僕あの子は殴れないよ？」

本当は喧嘩もしたこともない、人を殴ったこともない人間なんだけど、それを差し引いても彼女を傷付けたくはなかった。

それ以上に僕の直感が、いま彼女に近づくなと告げている。近づいたら刺されるぞとも言っている。刺すとピンポイントでわかるのはなんでだろう？

「残念ながら緋島様にはその手段しかございませんが、わたくしたち記録者はそれを持っております。記録固定メモライズと申しまして、負素だけを封印できるのでございます」

ならば早くその記録固定で彼女を救ってあげたいのだけど、肝心の記録者、ミルネさんが『む、無理ッス』と言いたげに片手だけを振って拒否の意を表している。

「この状況でそれを期待するのは無理そうだね」

「そのようですね」

僕はただ苦しむ森川さんを見守るしかなかった。

その時、話し声が聞こえてきた。

「で、本当にいいのか？」

「ええ。面倒ですからさっさとやってください」

このおっさん声と女の子の声は、エルとエイナさんが。

「俺様としては、あんま勧めねえ。時間はかかるが記録固定だけでもこの結界は壊せるんだぞ？」

心配そうな、あるいは否定的な意味を込めてエルは言い聞かせているようだ。

「大丈夫です」

一言で彼女はエルの提案を却下した。容赦ないね。

「上の連中はどうする？文句を言うてくるだろう？」

「言わせていればいいんです。彼らがどう言おうと、私がどう言われようと構いません」

「その言葉で俺様を騙せるか？親以上にお前を知っている俺様を？」

「では本音を言いましょう」

「おう、聴こうじゃねーか」

「あの人がミルネと一秒でも長くいるのが気に食わないんです」

「……。そうか。よし許す！」

ええ！？許しちゃうの？

「ありがとうございます」

「さあて、久々の開放だ！暴れてやろうぜい！！」

黒い壁の細かい隙間から赤い光が差し込む。

そして、音もなく僕らの背後の負素の囲いを、血のような赤い刃の太刀が切り裂いた。

そこから、波が引くように壁が裂けていった。そこに立っていたのは、

「よう兄ちゃん。元気かい？」

「……」

赤く光り輝く右目に、右手に朱色の太刀を持ったエイナさんだつた。

薄手のＴシャツに、青いスラックスを履いたカジジュアルな彼女がそこにはいた。

黒く少し長い髪が風で揺れていた。

「……アニセイター
破壊者」

ミルネさんがそう呟いたのを聞いた時、残った壁を形成する負素が揺らめいた。

「また女か！！」

頭を抱えていた森川さんが叫んだ。なんとなく僕が女たらしみたいだからその発言は止めてほしい。

呼応するように壁をそのままに負素がまた彼女を包み込んだ。

「この方は知り合いですか？」

僕らをかばうように前に出たエイナさんは首だけこっちを見ながらそう言った。

「う、うん。そうだけど」

僕の方を見ている余裕があるのかな。

「そうですか」

な、なんだろう。

エイナさんから果てしない怒気を感じるんだけど、僕は一体何をしたんだろう。

そんなふうになまってるしていると森川さんに集まった負素が弾けた。

数多の負素の弾丸が超高速で僕らに向かってくる。そう気づいたからと言って僕らは何もできない。僕はすぐ脇に蹲るミルネさんを庇おうと前に出た。

「おい、エイナ」

「……」

こちらを見たまま彼女は無言で日本刀を振るう。

神速とも呼べる斬撃が無数の弾丸を切り払っていく。

全く打ち漏らさず、全ての弾丸が僕らの前で塵と化していた。

……それにしても一言も発せずに正確無比に負素を打ち落とすエイナさんは怖い。

特にこっちを見たまま斬っているのが怖い。なんでこっち見てるの？ちよつと睨んでいるように見えるのは気のせいだと信じたいんだけど。

「……何やら楽しそうなイベントに巻き込まれていたようですね」

「そう見えてる？」

少なくとも今、僕女の子に襲われているんですが、

「はい。ミルネとさぞ楽しいご旅行をなさっていたんですね。その荷物がとても雄弁に物語ってくれていますよ」

ちらつと見るとそこにはエロゲー、ギャルゲー、普通のゲーム等々の入った紙袋。

いや、楽しんでいたのは僕ではなくてミルネさんなんだけど……。

「ふん。……私がどういう気だったのかも知らずに」

いったい何の話なんでしょう？

「……どうでもいいけど、うえっぷ。……『破刃』を持ち出すとは思ってなかったわ」

「……あなたは」

蹲って目尻に涙を浮かべながらエイナさんが睨む。この二人、仲悪いのかな？

「また、遊んでばかりで肝心な時に役に立たないのですね？」

彼女は呆れたきつた顔をして赤い左目でミルネさんをじっと見据える。

「……うっさいわね。ぶうう。……あ、危なかった」

金髪を揺らし、碧眼を歪ませ吐き気に耐えるミルネさん。うん。確かに役に立ってないよね。

「いつかのように私が解決してあげますから、そこで黙って見ていてください」

「……いつか記録してあげるわ」

「では私はその内この刃で刻んで差し上げましょう」

ホントこの二人、いったい何があつたのだろう？

いつかエルとエスに聞いてみようかな。

弾が尽きたのかようやく黒い雨が止んだ。

「その前に今回の件を片付けます」

その言葉に、何故だか僕は寂しいような気がした。

でも、それ以上に森川さんを早く開放させてあげたかった。

だから、黙って彼女を見送った。

森川さんとエイナさんの距離は十数メートル。

エイナさんはその距離を瞬時に駆ける。

「何よ！！」

負素を纏う森川さんは叫んで跳躍する。しかし、自分が作った黒い壁が邪魔をして大きな跳躍の割に移動した距離は大したことはなかった。

「あたしは彼を助けるの！！邪魔しないで！！」

「そんなことは知りませんよ。あなたが彼の何を知っているというのですか？何を分かつたうえで助けようとしているのですか？」

「緋島君が苦しんでいる。それだけが分かれば助ける理由には十分

過ぎるよ!!」

どんなに叫んでも森川さんの不利であることは変わらない。彼女はエイナさんに追い詰められていた。

どれほど黒い負素の弾丸を放つても、瞬時にエイナさんの太刀に阻まれる。唯一効果が有るとすればエイナさんが近づくのを先延ばしにしているだけだ。

「彼が何に苦しんでいるのも分からずにそれを取り除けるはずがありません」

「うるさい!!」

悲痛な叫び声がエイナさんに放たれる。

「そうだとしてもあたしは彼に頼ってほしい。だからそういう風に世界を変えたんだ!!」

「自分本位ですね」

剣戟と弾幕が止んだ。

エイナさんと森川さんが後一步分の距離まで迫っていた。

森川さんは周囲の負素に攻撃をさせたらしく、近辺の負素の壁が揺らめき、針のような形になって背後から彼女を貫こうとした。

だが、彼女を貫こうとしたまさにその時、先端から粒子の細かい砂粒が落ちるように形が崩れ消えていった。

「自分本位が何!？」

あたしは彼が好き。この気持ちは誰にも否定できない!」

「そうですね。でも……」

アンナさんは黙って空いた左手で黒い左目を抑える。

「その気持ちで彼を救えませんかよ。」

それに彼を苦しめている方法で彼を救えると思いますか?」

啞然とした彼女を青い光が照らし出す。

壁となっていた負素が霧散し、森川さんは糸が切れた人形のようにパタリと倒れた。

「終わったぜえい」

「彼女はとうなったんですか？」

「別に。ちよつと眠つて、それから起きて終わりだ」

冷たいようなエルの声だったけど、それは慣れた雰囲気を感じさせていた。

「今回の改変で起こったことは全てなくなります」
フューレン

「それと兄ちゃんこの娘のとはどういう関係なんだ？」

……とりあえず森川さんを起き上らせた。アスファルトに倒れているのも辛いだろうしね。

今更ながら、僕らが注目を浴びていないことに気付いた。

「わたくしが結界を張らせていただきました」

エスさんのフォローで納得していいものか。そもそもあなたそんな能力あつたんですか？

「それより関係だよ。関係。お前さんなんでこんなに思われてるんだ？」

汚いかもしれないけど自販機に森川さんをもたれさせると、背中に寒気が走った。

振り返ると青い左目と赤い右目を輝かせたエイナさんが僕をじつと睨んでいる。

どこことなく神秘的で、綺麗だった。

「……」

「どうなの？」

ミルネさんまで睨んできた。

どうと言われてもな。

「ただのクラスメイトだよ。入学式の日にちよつといろいろあつただけ」

「そのいろいろを聞きてーんだが……」

その前に、いい加減僕も言っておきたいことがある。

「とにかく、移動しない？」

というかさせてください。

男は僕一人だし、ミルネさんとエイナさんは見目麗しい美少女だし、眠っているけど森川さんだって普通にしていれば可愛い女の子だ。

この状況。具体的にはかわいい女の子3人を僕が連れているように見えない？

秋葉原でそんな人間がいたら、殺されても文句は言えないじゃないかな。いや、想像だけど。

まあ、結界張っているなら気にすることじゃないかもしれないけど。

見えてたらどうしようという不安が心を圧迫するのです。

「仕方ない。落ち着いて話したいし、移動するぞ」

エル言葉に僕はホッと、女性陣は不満げに頷くのがあった。全てはアキバに來たせいだ。僕は心からそう思う。

結局行き着いた先は昨日の屋敷。エイナ邸（？）でした。

その間いろいろあった。ホントにいろいろあった。

眠っている森川さんを背負っていたため警察に職質されたり、月目萌えーっ！とアキバのメンズに騒がれたり、電車の揺れで吐きそうになったミルネさんを介抱したり、猫に奪われたミルネさんのポーチ（エス）を追いかけたり、エイナさんの刀をどこにやったのか問い詰めたりいろいろあった。（ちなみに自由に出入り入れできるらしい。うん、予想通り）

もう絶対今日という日は僕の記憶フォルダから消去しよう。うん、どうしてまだ8時間も今日があるのだろう。

森川さんを僕が使ったのとは違う客室に寝かせ、書架に移動した。横長のテーブルを本の山の中から発見し、座れるように（僕が）本を片付けたところ、黒い本と紅茶とバームクーヘンを盆に乗せたエイナさんが書架に入ってきた

「わーい。お菓子だー」

キラキラした目でバームクーヘンを見るミルネさんは子供そのものだった。

ただそんなことよりもっと呆れることがある。

「まだ食べるんですか？」

「甘いものは別腹なの」

綺麗にウインクを決める。

いや、その別腹が既に満員御礼のはずなんだけど。

食べ始めたミルネさんは放置してエイナさんに向き合う。

「ところでエルは何に憑依しているの？」

「うん？この黒本だけど」

バタバタと黒い本がエイナさんの腕の中で動く。

「エルさん。こんな状態で動かれると紅茶が零れます」

「うおおおー！ー！止めるよ！絶対止めるよ！ー！」

「でしたら暴れないでください」

楽しそうにエイナさんは微笑んだ。

彼女の笑顔を見ると、なんだか胸が温くなる。

昔のあの女の子と同じように。

「でも、さっきまではその本持ってたよな？さっきはどうしてたの？」

「さっきはエイナが今着けてる黒いカラコンに宿っていた」

「カラコンって、カラーコンタクト？そんなの着けていたんだ」

今のエイナさんの目は両方とも黒い。それがカラーコンタクトなのだろう。

「ところで、お前さんはどうしてあの娘に好かれたんだ？」

くそうこの黒本、面倒なことを蒸し返さなくていいのに。

紅茶を注ぐエイナさんの手が一瞬止まり、バームクーヘンを食べるミルネさんの口が……、止まらなかった。

「好かれた、なんて大袈裟な」

「いや、もうお前さんのボケはいいから」

ボケではないんだけど。

「高校の入学式の時、家の近所で迷っていた彼女を案内しただけ。ただそれだけの関係だよ。まさかクラスメイトになるとは思ってたかったけどね」

それからも特に仲が良かったわけじゃないから関係は薄い。

「それが改変を起こしたからびつくりだよフューレンね」

なぜかみなさんため息を吐かれました。

しばらくしてから、「寝ます」とエイナさんが宣言し自室に帰り、ミルネさんもバームクーヘンを自分の客室にお持ち帰りした。

結果、書架に残ったのは僕とポーチのエスさんと黒本のエルだ。

「結局、森川さんの負素はどうなったの？」

せつかなので何か聞こうと僕は残った紅茶を飲む。

うん。なかなかの味だと思う。

「俺様のこの黒本に写した」

「移す？」

とつさに漢字の変換ができなかった。

「そう。俺様たち記録者は紙に人や場所、物の記憶を写すことが仕事だ」

「記憶を写すことによって、過去に起きたことを確定するのです」

長机の上に置かれた黒本とポーチは動かない。多分今他人が僕と見ると独り言を言っているように見えるんだろフューレンうな。

「過去を確定するというのは改変による変更を受け付けないようにするってことだ。そのためには紙の媒体に写して、時間で言々と百年経たないといけない」

百年も掛かるのかと思い、考える。

つまり今日は百年前写した記録が確定された日なのか。そういう一つ一つが今までの歴史を作ってきたんだ。

「この書架にあるのがエイナとその先代の記録者たちが写してきた記録だ」

ばらばらと乱雑に、けれどある種の調和がある本の山たちに目を

向ける。

いったい何冊あるのか想像できない。

大きな本棚がいくつもあるのに、それから溢れた本の山が床を埋め尽しそうになっている。これ全部が世界の記録なのか。

中には昨日のエルみたいに革ベルトで縛られた本や、今のエルのように黒い本があった。

「黒い本は負素を写した本と考えていいですよ？なら、昨日みたいにベルトで縛った本はどういうもの？」

「あれはまだ確定されてない記憶でございます」

「ところで俺たちからお前さんに折り入って頼みがあるんだがいいか？」

真剣な声音。この人でもそんな声が出せるのか。

俺たちか。つまり記録者の相棒であるエスさんとエル。

「なんででしょう」

僕は縦に長いこの部屋の窓から青い空を見る。夏の日差しの中それは少し目に染みた。

「大したことじゃねーんだ。これで今回の改変フューレンの件については片付いて、お前さんとの縁はこれきりかもしれないが、時々でいい、ここに来て二人と話してくれ」

「……」

「引き受けてもらえないでしょうか？」

沈黙を否定と受け取られたのか、エスは少し遠慮したような声で言った。

「構いませんよ。僕は。でも、どうしてそんな頼みを？」

「記録者は改変フューレンの影響を少なくするために人から認知されづらくなってるんだ。

例えばお前さんが昨日、学校でエイナから話しかけられなかったらお前さんエイナと関わろうと思わなかったんじゃないか？」

そういわれればそういう気がするけど、あんまり実感が湧かない。僕はかわいい女の子にほいほいと声を掛ける男じゃないんだけど。

「緋島さん、ミルネと過ごして何か感じませんでしたか？そう、ミルネではなくあなたが注目されていたとか」

「そういえば執事喫茶であまりミルネさんを見ている人はいなかったような気がする。」

「まあ、僕が敵意を込められた目でずっと見られていたからね。」

「それに、先程の戦いでわたくしは結界を張っておりません。あの子たちが人から見られなかっただけです」

「……。」

「あいつらにとっても久々なんだよ。友達って言える人間と話をするなんてのは」

「僕にとっても久しぶりでしたけど」

「だろう？あいつらもせっかく自分のことを忘れない友人と離れたくないだろうさ。それにお前さんの記憶も消せない。あいつらには今生で二度と出会えない人だろうさ。」

「お前さんだってあいつらと離れるのは辛くないか？」

「……。」

「改變のことを考えずに人と付き合うのは本当に久しぶりだ。」

（あの夏以来かな）

「でも、彼女たちも改變の影響を受けるってミルネさんが言っていましたよ？」

「もっとお前さんの記録は写してあるからな。記録者の二人はお前さんをちゃんと覚えてるだろうよ」

「記録すると彼女たちは改變の影響を受けないの？」

「簡単に言うとな」

「詳しく言いますと、我々と彼女たちの記憶がリンクしておりまして、彼女たちの記憶をわたくしたちの正しい記憶で改變された記憶を上書きするのです。故に貴方が受けるどの改變にも彼女たちの記憶は影響されません」

「エスの詳しい説明はありがたいけど、その実僕はどうでもよかったです。」

ただ彼女たちが改変で僕のことを忘れなければそれでよかった。
「お前さんも大変だったな。今日のところは帰ったらどうだ？俺様たちが後のことはやっておくからさ」

正直二人に挨拶していきたくったし、それに森川さんも気になっ
ているのだけど、それ以上に疲れが出ていた。

「それじゃ、お言葉に甘えて失礼します」

残っていた紅茶を飲み干し、僕は立ち上がる。

「エイナさんとミルネさんによろしく言っておいてください」

「ちよいまち。ミルネはあと2週間しか日本にいないから、それま
では何回顔出してくれよ」

「わかりました」

僕は一礼して書架を離れた。

本当にこの2日でいろいろあったな。

廊下を歩きながら僕は思い出していた。

エイナさんとの出会い。欠落の事を聞いたりして、そしてミルネ
さんに出会った。

きつと何度かまたここに足を運ぶことになるのだろう。

僕は改変に巻き込まれて生きていくのだから。
フューレン

「お帰りですか？」

突然扉が開いて固まってしまふ。ちよつとこれは心臓に悪い。

扉からひよつこりとエイナさんは顔を覗かせていた。

「どうしました？」

「え？うん、ちよつとびっくりして」

「え？」

「いや、いきなりドアが開いたからさ」

不服そうな顔をした彼女が横に並んだ。成り行き上僕らは一緒に
歩き始める。

「でしたら、ドアから出るときは必ずソックをしなければなら
ないのですか？」

ドアの前に人が歩いているなんて普通わかりませんよ?」

「うーん。そんな意味を込めて言ったわけじゃないんだけど」

「冗談ですよ。本気にしないでください」

クスクス笑うエイナさん。この人も人が悪い。

「ごめんね。本当は挨拶してから帰るつもりだったんだけど、みんな疲れているみたいだったし早めに帰ろうと思ってさ」

というよりも僕自身アキバ行脚に付き合わされてくたくたなのが一番の原因だけだ。

「いえ、気にしないでください」

少し寂しそうな笑顔を彼女は浮かべた。

そうだ。今のうちにその内又来ることを伝えよう。

僕はいたづらを思いついた時のようになんだかウキウキしたような気持ちになりながら、

「その内またここに来たいんだけど、予定とかあるかな」

キョトンとした表情から喜色満面となった彼女の変化は多分1秒にも満たないけど、僕には忘れられない1秒になると思う。

静かに「いつでも構いませんよ?」という彼女のクールさには思わず微笑んでしまう。

そんなことを考えながら、僕はゆっくりとした足取りで廊下を進んでいた。

これで事件が終わったのかどうかと、疑うこともなく。

？ 仮初の日常

無限の闇に囚われたような空間で彼、沢田拓斗はこの街に近づく波動を見ていた。

緑色の、どこか優しくもあるその波動はこの闇にとっては不愉快なものだ。

「本当にいいのね？」

闇は女の声をして少年に話しかける。

その声音が緑の波動と同じ優しさに溢れていることに、あるいは気付かないふりをして、拓斗は頷く。

「……」

沈黙の後、闇は彼を飲み込む。

母のように優しく抱いて、父のように力強く背を押してくれたような気が彼はした。

その時、少年・沢田拓斗はこの世界から欠落した。

神様が創った不完全さを正すために。

二日ぶりに学校に行くと、その道すがらクラスメイトの男子から声を掛けられた。

「いよう！ 緋島、昨日はどうしたんだよ？」

メガネを掛けた少年が仲良さ気に肩を叩いてきた。

「中村か、何だか久しぶりな気がするね」

「実際二日ぶりだろう。それで昨日は授業をサボって何してたんだよ？」

「何って言われても……。ショッピングかな」

僕の買い物ではないけど。

「優雅だな。お前」

「それほどでも」

もう面倒臭いので放置する。

中村は高校に進学してから知り合った男で、人並みに頭が悪く、人懐っこく明るい性格のために男仲間からは人気があるのだが、女子受けする顔ではないため彼女いない歴〃年齢だ。

それからもうろんな人に声を掛けられた。

クラス委員に、中学からの知り合いなどなどである。

「……お前、女にばっか声かけられてんな」

「そうかな？」

「うん。リアル青春白書を見せられたような気がするんだよ。死ねばいいのに」

言うちに事欠いてなんて暴言を吐くのだこいつは……。

「中村、そういうええ君はどうして僕に話しかけたんだよ？」

「決まってるだろう!!」

無意味に拳を握りしめこの男は宣言する。

「お前といたら、俺も女の子に覚えてもらえるかもしれないだろう

!!」

「……友達甲斐がないね」

「なにそれ？首相の言葉より軽いだろう？」

取り敢えず首相の言葉が軽いと思うのは止めようか。さすがに可哀そうだ。

そんな会話をしながら僕らは教室に着いた。

一昨日までは他人行儀に話しかけたクラスメイトも、今日は普通に挨拶してくる。

ほとんどは中村が聞いたような昨日の欠席について。

僕は同じような答えで誤魔化して、席に座る。

全部嘘みたいだ。欠落とか、記録者とか、破壊者とか。

そんなことを思っていると始業を知らせる鐘が鳴る。

僕は内容が戻った授業を苦笑いを堪えながら授業を受けた。

学食で昼食を済ませて、教室に戻ると僕の席を女子の集団が占領していた。

「……」

どうして女子は一か所に固まるのだろうか？ いや、男子も固まるんだけど、教室にずっといるというのはあまりない気がする。むしろまとまってどこかに行くことが多いんじゃないかな。

と、教室の端に固まって携帯ゲーム機をプレイしている男子の集団があった。

……。今って多様な時代だよな？

ミルネさんもあんな風にゲーム仲間と集まって遊ばないのかな？

「緋島君？ どうしたの？」

後ろから聞き覚えのある、というかミルネさんの記憶に関係する声だから、忘れるはずもない。

「……森川さん」

そこにいたのは昨日に引き続き学生服姿の（といってもここは学校だからそれ以外の服を見かける方が稀だけど）森川さんが後ろに立っていた。

……怖いと感じるのは悪いことですか？

「ごめん。邪魔だったね」

呆然としていたせいで入り口の前で立っていた。これは教室に入りたい人にはかなり邪魔だ。

「うっん。いいんだけど……。ああ、あの子たちね」

昨日とは違って落ち着いた様子なので一安心かなと内心ほっとする。

そうとは知るはずもない彼女は僕の席を占領している女子たちに視線を向ける。

そして最前列の左端、窓際の席の方まで歩いて行った。途中振り返って、彼女は手招きする。

することもなかったのでそれに従う。

森川さんは自分の席であるそこに座って、隣の席を指さす。座って、てことかな？

どうしよう？話すだけなら僕は立ったままでいいんだけど、それに自分の席が取られているからって僕も他人の席に座っていいのだろうか。

「どうしたの？」

首を傾げる森川さんに向けて微笑む。

「座っていいのかな？って思ってた」

「いいと思うけど。その人、今君の席に座ってる娘だから」

「……なら、お邪魔するね」

少し悪いことをしている気がしたけど、森川さんの目が怖すぎたので向かい合うように隣の席に腰かける。席ひとつで何を緊張しているのだろう僕は。

「……」

「……」

か、会話がない……。

それもそうかもしれない。

昨日あんなことがあったのだから、どうすればいいのかわからない。

「き、昨日は大変だったね」

……。

しまった！！自分から話にくいことを振ってしまった！！

ああ、もうこれだから。僕も人とコミュニケーションするのが苦手なんだ。

「昨日？……」

内心慌てふためく僕に森川さんの訝しそうな声が聞こえた。

「あれ？覚えてないの？」

「もしかして、昨日休んだこと？なら、ちょっと疲れが溜まってたみたい。一日中家で寝てたよ。心配してくれてありがとう」

……。

それとも、僕が負素や記録者のことをまだ理解していないだけなのだろうか。

森川さんがますます不審そうな眼で僕を見る。

ゆっくり首を振って、僕は今度こそ会話をした。

授業の事やクラブの事、クラスの事や夏休みの有意義な過ごし方についてなど。

本当に大したこともない、それでも大切な会話だったと思う。

「じゃ、今日はここまでにしよう。日直、号令」

日直の中村の号令で今日の授業は終わった。

結局特に何事もなく平和に今日という日が終わる。まあ、何かあったらそれは本当に困るのだけど、どこか物足りなくもある。

ただの無い物ねだりかもしれないけど、

机の中の教科書を鞆に詰めた。ちなみに僕は置き勉強をしていない。帰って勉強するわけでもないんだけど。

と、机の中から触ったことの無い紙の感触がした。

取り出してみると、薄いピンクの便箋だった。封はもちろん（？）ハートの形のシールでなされていた。

いわゆるラブレターっていうものだろう。

「緋島！？お前それは……」

僕は動揺してアイーンのポーズで固まる中村を尻目に、慣れた手つきで開封する。

そこには。

好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き

き好き……」

と両面びつしりと書かれた『好き』の嵐だった。

「一体何が！……ってなんだ森川のヤンレターか……」

「何そのヤンレターって？」

「お前が偶にもらうそのラブレターだよ。どう考えてもヤンデレだろ、その文は。ヤンデレが送るラブレター、略してヤンレター」

「どうだ！と胸を張る中村。どうでもいいけどヤンレターってやられたー！……って言う言葉を噛んだみたいだね。やられたー、やんられたー、やんれたー。……ってね？」

「……ってそれよりも何で僕があの子からラブレター貰っているの知ってるの？」

「それはな……、と、掃除の邪魔だか帰りながら話そうぜ」

その言葉を皮切りに僕は教室から退散する。

「お前の席に森川がラブレターを入れているのを見たやつが何人かいてな、そいつらからの情報で知ってたんだよ」

細かいけど、中村のラブレターの発音が妙にいいのはなんでだろう。

「……ってか、その人たち中身読んだの？」

「ああ」

即答するとはどういうことだ。と詰めかかりたいがこいつを責めてもどうしようもない。

「そしたら、あれだ。もうびつくりした。どんな切ラブな内容だろうと期待した俺あなんだったんだよ」

君がその読んだ人だったのか……。

「それ以来、森川は隠れヤンデレとして名を馳せているんだぜ。それに目立たないけど可愛いしな。お前も刺されないように気を付けるよ？」

「誰に刺されるの？」

「森川と、男どもにだよ」

……。僕の包囲網が完成する前にどうにかしなければ。

「っていつか、このラブレターって本気だと思うの？ここまであれだともう悪戯だってバレバレだと思うけど。それに名前も載ってないし」

しかも宛名だけじゃなく本人の名前も書いていない。これじゃ、誰が誰に宛てたのかも分からない。

「いや、悪戯で両面びつしりとは書かないだろう。そもそも森川はそんなことをする奴とは思えない」

「名前がないから森川さんのかどうかわからないけどね」

「だから、その内容を書くのは森川しかいないんだよ。目撃者の俺が言っただから間違いない」

目撃者というよりただの覗きだと僕は思う。

そついうことをしている内に駅前に着き、電車通学の中村と別れた。

どうせなら、駅中で本を買おうと思って中村が見えなくなった後、駅に入る。

この駅は割と市の中でも大きなもので、ターミナル駅になっていて、地下鉄や私鉄、バスやタクシーが多い。それに今の時期にはありがたいことに日差しを遮るアーチ状の天井がある。少し汗ばんでいたのが涼むこともできる。

ここは休日ともなれば出かける人で溢れるのだが、今日は幸いにして平日。週の半ばの水曜日だ。さらにその昼下がり。人もまばらな時間帯なので僕は悠々と歩む。

改札口を眼端で確認しつつエスカレーターのある端のほうにしばらく進むと、

「うつつ、ぐすつ」

どこからかすすり泣く女の子の声が聞こえた。

今が夜で、ここが墓地だったら怖いかもしれないとくだらないことを考えながらその声を辿る。

すると駅の隅、丁度人の死角になる階段の陰で、白い法衣のような服を着た小学生くらいの青みがかった銀髪の女の子が体育座りで

泣いていた。

意外に早く見つかったなと思い、ゆっくりと近づく。

「どうしたの？」

なるべく優しく見えるように笑顔を浮かべて話しかける。

「はい！？」

驚いたのか、飛び上がって背筋までピンと張った直立姿勢で立った少女にさすがに引く。どんだけ驚いたのだろう。この娘。

「いや、ちよつと泣き声が聞こえたから、どうしたんだらうって思つて話しかけたんだ」

法衣の所々が少し汚れていた。払ってあげようかどうしようかと考えていると、まじまじと少女は僕を見つめてきた。

そこで気づいたのだが、少女の眼は翡翠のような碧色をしていた。
(綺麗だな)

なんて見つめていると、少女は花が咲いたようにぱあつと笑い、
「本当でしゅー！！」

ものすごい勢いで舌を噛んだらしく、少女は舌を出して手で扇いでいた。

「大丈夫？」

「ほほすほひはひへふ(ものすごく痛いです)」

「どうしよう、医者に行く？」

「いいれ、はへへいふほへへひひへふ(いいえ、慣れているので平気です)」

「ならちよつと待つてるよ」

「あひはほうほはいはふ(ありがとうございます)」

ところで僕はどうして彼女の言葉が分かるのだろう。何この無駄な能力。

五分ぐらいしてから少女は涙目だったけど改めて、一礼した。

「ごめんなさい。ワタシがちゅ舌が悪くて、よく舌を噛んでしまうんです」

「あの勢いで噛んでいたらいつか君は下を噛み切ってしまうよ？」

怖い。言ってから思ったけど本当にありそうだよ。

「どうすればいいのでしょうか」

うーん。困った。どうしよう。

「ゆっくり話してみたら？無理して早くしゃべるから嚙んじゃうじやないのかな？」

「ではやってみます」

ところで僕は何をしに来たんだろう？この娘の空気に完全に飲み込まれてしまつて忘れちゃったよ。

「えー、じこしょーかいしますー！。アリス・レフェルトといいます」

アリスね。本当にこの娘、不思議の国に迷い込みそうだね。

というかのんびり口調がわざとらしいので少し苛立ちを覚えるのですが。

「うーん、この口調は疲れるので止めておきます」

提案した本人が言うのもなんですかお願いします。

「そんなことよりあなたにお願いしたいことがあるんです」

「うん？何かな？」

親を探せ、とか？この娘は泣いていたわけだし、そういうのならいいんだけど。

「今回の改変者の森川未来とそれを収めた記録者、エイナ・ヴァリキュリア・ジウトム・テーゼに会わせてください。緋島直樹さん」

碧の瞳を輝かせ、その少女、アリス・レフェルトは言った。

「彼と接触したわね」

黒い闇が漣のようにそれを纏う少年に、いや、少年だったものに告げる。

「きつとフェイクに気づいてる。どうする？」

少年だったものは嗤う。

「彼を消すことになるよ？それでもいいの」

「いいさ。俺は自分も消したんだから」

少年との邂逅は近い。

？ 調律者

アリスを連れて僕はエイナさんの屋敷に来ていた。

「相も変わらず大きい屋敷ですう」

ちなみにのんびり口調を何故か継続中。

そういえば自分からこの家に入るのは二回目だけど、前は森川さんを負ぶっていたし、この屋敷をよく見ていなかった。

屋敷というか本当に一人で生活しているのだろうか？と思わせる大きさだ。地上三階、地下はあるのか知らないけど、とにかくその屋敷は大きい。一軒家で三階もあれば十分すぎると思う。

また、近所の子供が幽霊屋敷というだけあって、想像通り蔦が外壁に絡んでいた。ついでに言つとその外壁も雨風で所々ひびが入り、汚れも酷かった。

「ワタシ、この家苦手なんです」

元の口調に戻ったアリスがギョツと腕にしがみつく。

「確かに怖いよね。僕もお化け屋敷とかは入れないよ」

というより行ったことないんだよね。遊園地とか。修学旅行は熱出して休んだし。……泣けてきた。

「あのー、しばらくこのまま握つてていいですか？」

上目遣いで頼むのは反則だと思う。

「ど、どうぞ」

何でこんな小さな子に敬語を使うのだろうと思いつながら、しがみつく少女の柔らかい手の感触にドギマギする僕。ちなみに僕はロリコンではない事をここに宣言しておく。

「……うう」

本気で怖がつてる。

中は綺麗だし、人も住んでいるんだけど。さっきはあわせて怖いと言ったけど、その実特に何も思わない。ちょっと怖さが分からない

い。

「とにかく中に入ろうよ。いつまでもこうしている訳にはいかないよね」

震えながらアリスは頷いた。

（そんなに怖いのかな？）

実はまだ門の手前だったりする。

ギギギツと錆びた鉄の音で、アリスはビックとその場で跳ねた。

「驚きすぎだよ」

「だ、だつてえ」

情けない声を上げるアリスは見た目相応に可愛い。

僕は苦笑しながら、門の中に入り、びくびくしているアリスに沿ってゆつくりと歩いて玄関まで辿り着いた。

ええっと、呼び鈴は、

「ああ、このライオンの口の中にあつたんだっけ」

趣味の悪い、人の顔ぐらいの大きさのライオンが右側の壁についていて、大きく開いたその口にこの家の呼び鈴があるのだ。

変だなと思いつながらも呼び鈴を鳴らそうと指を伸ばそうと、

「あのう……、指入れても大丈夫でしょうか？」

おずおずと話しかけるアリスを見つめて、何が問いかける。

「だつて入れた瞬間、ガブツ！て食いつかれるんじゃないんですか！！」

そんなことがあるはずがない。と思ったがかわいらしいことを言うものだと言を撫でる。

アリスは平らで撫でやすい頭をしている。それに性格も子供っぽい。まるで頭を撫でられるために生まれてきたような娘だ。（どんな娘だ）

彼女を見たまま僕は指を入れようとすると、

ガチャッとノブを回す音が聞こえた。

二人して固まったまま、見てみると大きめな扉がゆつくりと開かれた。

「……」

出てきたのは黒い双眸のエイナさん。彼女の今日の服装はジーンズにTシャツ、その上にノースリーブの黒い上着を着ていた。スレンダーな彼女の体つきがよく出ていて、似合っている。ちょっとかっこいい気がする。

そんな彼女の顔つきが無表情から不機嫌に変わる。といっても少し唇が斜め下に曲がっただけだけど。

「アリス……」

「おひゃー!!」

またまた思いつきり舌を噛んだらしく、蹲って涙を堪えるアリス。今思えば駅で会った時も舌を噛んだから泣いていたのかもしれない。そういえば本を買ったのを忘れた。特に欲しいものがあるわけではないのでいいんだけどね。

「思ったより早く来たのね」

「ははははふえふ」

「何を言っているのか分からないから、無理して話さなくていい」
対応に慣れているね。二人は付き合い長いのだろうか。

「お前さんにはつくづく迷惑かけるな」

おっさんの声が聞こえたと思って何かないか探してみたけど、本も何もないので多分エイナさんのカラコンなんだろう。

ところで、あまりにも二人が陰険そうなのでここは僕がどうにかするべきなのかな？

「こんにちは。エイナさん」

取り敢えずしてなかった挨拶を試してみた。

「……」

凍りつきそうなアイスアイズで睨まれました。

「エイナ、挨拶はきちんと返すものだろう?」

おっさんが親のように言って聴かす。

「……こんにちは。直樹さん」

もんのすごく不満そうに睨みあげるエイナさん。

「……」
「……」

そしてまた睨み合いを開始する二人の少女。物凄く居心地が悪いんだけど、僕何かしました？

「ま、ここで立ち話もなんだ。上がってこいよ」

エルの一声に渋々といった苦い表情で玄関を開いて、エイナさんは僕らを招き入れた。

そして僕らは何故か客室ではなく、書架に通された。

「お茶などはでませんよ」

アリスを睨むエイナさんが言う。

「お構いなく」

やや緊張気味にアリスは返答する。

本だらけのこの書架で唯一間の空いたスペースであるテーブルに備え付けられた椅子に僕らは腰かけた。僕とアリスは隣に、エイナさんは僕の向かいの椅子に座った。

その途端、エイナさんにはれないようにこっそりと僕の手を握ってきた。

手は少し震えていた。

「？」

彼女の顔を見ると少し赤かった。

まあ、この書架は薄暗くて気味が悪いかもしれない。そういうところを怖がっているのかもしれない。

（しばらくはこのままでいいか）

特に嫌なわけではないので好きにさせることにした。

「直樹さん」

はっとして正面を向くとエイナさんの無表情フェイスがそこにはあった。

「な、何かな？」

「どうしてあなたがアリスと一緒に来るんですか？」

「どうしてと言われても、

「たまたまだよ。たまたま」

「としか言いようがないので、二回言いました。」

「……たまたまと言いますと？」

「まさかの深く尋ねてきました。」

「ちよつと泣いているのを見かけて声を掛けたら、それがアリスであれ？ そういえばアリスは何で僕がエイナさんと関係してるって知ってたの？」

「考えてみるとたまたま声をかけた少女が改変について知っているのは、どれほどの低い確率で起きることなのだろうか。」

「それはこの天然の子供娘があなたのことを知っていたからですよ」
アリスより早くエイナさんが言う。

「そうだろうね。ということとは僕らの出会いは偶然ではなく必然だったのか。……今ちよつと格好つけました。ごめんなさい。」

「天然子供娘ってなんですか！？」

そこに反応したアリスは口をアヒルのようにまげて不満を表す。

「……天然かどうかはともかくそういうところは子供っぽいね。」

「全く、のこのこアリスの思惑通りに動かされるなんて、直樹さん、情けないですね」

この場合、僕は情けないのかな？ 冷たいエイナさんの言葉に僕は首を捻る。

「まあ、そんなことは置いとけ。エイナ、早く物を持ってこい」

エル的一声で、ジト目で僕を睨んだまま、エイナさんは席を立てて書架の奥へ行った。

「……後ろ向きに歩いてこの本の山の中、こけずに歩けるエイナさんはすごいと思う。細かいことだけど。」

「アリス、リギスター記録者とか改変とかの話を知っているってことは君も記録者なの？」

取り残されて手持無沙汰だったので、この際聞きたいことを聞い

てしまおうと僕はアリスに尋ねた。

「いいえ、ワタシの瞳は青くないでしょう?」

アリスは翡翠のような瞳で僕を映す。

たしかミルネさんは青い瞳が記録者の証だと言っていた。エイナさんもカラコンの下チューナーの右目は青い。だけど右目は赤い。

「ワタシは調律者と呼ばれる存在です」

調律者。確かピアノとか楽器の音を調節する人は、調律師でしたね。うん、多分何の関係もないんだろう。

「ワタシたちは封印した負素を浄化して、無害な思念して解放するんです。いつまでも本の中に閉じ込めておけるものでもありませんし、何より時間の経過とともに負素は大きく強くなることもあります。だからこそワタシたちはいるんです」

とても確固たる意志がある目をしている。この小さな少女がともたくましく思えた。……まあ震えながら僕の手を握っているのを思い出したら、頼りないと思ったけどね。

「すごいんだね。調律者って」

僕は言いながら昨日のミルネさんの言葉を思い出した。

『……破壊者』
アニコゼイター

記録者は世界の記憶を記して確定する者。調律者は負素を解放する者。では破壊者は?

破壊者と呼ばれたエイナさんはどういう存在なのだろう。

僕はそれをアリスに聞くべきかどうかと悩んだ。

しばしの逡巡の後、僕は口を開く。

「アリスは、破壊者って何か知っている?」

それを聞いたアリスの震えが止まった。

「知っていますよ」

淡々と彼女は告げる。

「どうしてもというのなら、お話しますけど」

「何か話したらまずいことでもあるの?」

歯切れの悪い反応に僕は逆に聞き返す。

「いいえ。ただ、本人が話されないのに、ワタシが話していいものかと思っています」

そうか。僕は納得していた。

もし話すべき事なら、彼女は既に僕に話しているだろう。それをしないということは言う必要が無いのだろう。それにどうして先にエイナさんに聞かなかったのだろう。僕は。

「ごめん。忘れて」

「はい」

それで僕らの話は終わった。

また震えだしたアリスがぎゅっと手を握ってくる。

ここは握り返したほうがいいのだろうかと思っていると。

「何をちくりあっているのですか」

背後から絶対零度の声がした。

「わああっ!!」

驚きのあまりアリスは僕の手を離して、さらに距離を取ろうと思ったのか僕を突き飛ばした。

椅子共々、僕は左側頭部から床に叩きつけられる。

痛い。

「どど、どこから出てきてるんですか!?!」

「後ろからです」

「そんなことは分かっています」

アリス、ならどうして訊いたの?とツツコミたかったけど、頭痛いし、巻き込まれたくないし、しばらく横になっておこう。

「さつきから直樹さんの手を触りすぎです」

「仕方ないんです!!この家が怖すぎるんです!!よくこんな家に住んでられますね!!」

「住めば都ですよ?」

それは用法的にあっているのだろうか?

「それに緋島サンの手が温かくて安心できるのがいけないんです!!」

あれ？それ僕のせい？それ僕のせい？

「なるほど」

納得しちゃった！？

「では試してみましよう」

そう言って僕に歩み寄り、しゃがみこんで手を握るエイナさん。

「……」

「どうですか？」

「癖になりそうです」

何がですか？という余裕もない。

彼女の細い指と僕の指が絡まってる。ちょっと冷たい彼女の手と触れ合っているのは、なかなか心地よいことだった。

だからとしても、僕らは一体何をしているのか。

「あの？そろそろ本題に入りませんか？」

「そうだけ。兄ちゃんを苛めて遊ぶな」

エルさんが窘めようやく僕からエイナさんは手を離れた。

どこかさみしく思うけど、無視だ。無視。

さっきと同じ位置に座ってから、エイナさんはテーブルの上に昨

日見た黒い負素^{アンチマター}が封じられた本を取り出した。

「これが今回の負素よ」

アリスはそれを持ち、

「では、さっそく解放します」

アリスの二つの緑の瞳が光を放つ。

それは黒い本を包み込んでゆく。

次第に黒本が色を変えていくのが見えた。

そこで眩さのあまり目を閉じてしまった。

光が収まったので見てみると、アリスが本をテーブルに戻していた。

その色は黒から薄い茶色に変色していた。

「……」

どこか不服そうな顔をするアリス。

「どうかした？」

「いえ、エイナさん、今回見つけた負素はあれだけですか？」

「どういうこと？」

「いえ、連絡したワタシが感知した改変とは違うみたいです。ワタシが感知したのは人の生命に関わるほどの大規模な改変です」

困ったような顔をして、エイナさんは僕に視線を送る。

「俺様たちはこの緋島直樹に改変の中心にいたことを知って、干渉しただけだ。そしたら、向うから呼んでもいないのに改変者が現れただけだよ。」

この男に関わることは以外は調べてない」

エルの言葉に、アリスも僕を見る。

「では緋島さん。今回、どのような改変が行われたのか分かりますか？」

その言葉に少し違和感を感じたけど、それよりも他にも改変が行われていた驚きのほうが大きくて、僕は彼女の言葉に従って思い出す。

今回の改変、欠落は何だったのか。

僕が転校生になってみんなから距離を置かれたこと。それは確かに改変の結果だ。

でも、それ以外に何かあったのだろうか。

たまたま目をやると、エイナさんの顔が見えた。そうだ。彼女と会う前に何かがあったような気が、

はっとした。

今回の改変は森川さんが僕を対象に行ったものだ。なら、あの人の変化に説明はつかない。森川さんがあの人の事情を変える必要が無いのだから。

僕はそれを口に出す。

「沢田先輩、僕の学校の先輩に改変が起きたはずだよ」

黒い霧のような負素を纏った少年、沢田拓斗は昼下がりの商店街を歩いていた。

そこには少なからず人がいた。

店の店員やその客。ピークは過ぎたといえ、決して少ない人がいる。

それでも黒い霧を纏う奇怪な少年に気付くものは誰もいなかった。

沢田は嘲笑気味に笑う。

今までは自分を消したという実感がなかったが、こうして人に注目されていないと知ると、その実感が溢れてきた。

彼らは沢田の存在に気付けないのだ。

それは沢田が負素によって自身の存在が無かったように改変したためだ。

しかし、その気付けないはずの彼を見つめる少女がいた。

金髪に碧眼という分かりやすい外人像の少女は紙袋を引っ提げて、少年の行く手を塞いでいた。

「なぐんか嫌な予感でしたんだよね」

少女は、記録者ミルネ・ジウトム・リヴァリアス、その人だった。

？ 調律者（後書き）

遅れましたが最新話です。
来週はきちんと月曜に更新します。

?? 黒の申し子

リギスター
記録者、ミルネ・ジウトム・リヴァリアスはある種の緊張を感じていた。

リヴァリアスの性を受け継ぐ記録者には生まれたときからある使命を課せられている。

アンチマター
負素の元凶の発見。及び、永久に封印すること。できない場合はその方法の模索。

負素には元凶たる存在がいるとリヴァリアスの先祖は仮定した。その存在を証明することこそが彼らの家の唯一の目的となったのだ。その元凶らしき負素の塊を宿した少年が彼女の目の前にいる。受け継がれた血故なのか彼女は柄にもなく燃えていた。

（絶対に封じてやる）

少女は異形ながら、他人に気付かれない少年と相対する。

「どいてくれ、俺はその先に用があるんだ」

「この先には山しかありませんから、お引き取りを」

ふざけた口調で彼を嘲る。

「あるさ。もつと重要なものかな」

黒い負素が動いた。

刹那の間で二人の間を駆けたのは負素の弾丸。それは森川未来が使ったものと同じだ。

紙袋からミルネは掌サイズのメモ帳を取り出した。

そして一枚メモを引きちぎる。

彼女の双眸が蒼く輝き、負素がメモの中へと吸い込まれた。後には黒に染まったメモが一枚、ミルネの手の中に残った。

メモライズ
「記録固定か、まさか攻撃に使っただけの負素までも回収するとはな。ご苦労なことだ」

「そんなに格式張ったものじゃないよ。私のこれは走り書き程度のものだから」

そう言いながらメモを丁寧にしまふ彼女に沢田は微笑みかける。
「そいつはどんな負素だった？ 誰の絶望や嫉妬、悔恨、悲哀、渴望だった？」

負素とは人の負の感情を得て存在する。言わば人の感情の塊に近い。

だからこそ、記録者たちはどんな負素でも封じて、浄化して、保持する。

人の感情を無闇に扱っていいものではないと彼らは考えているのだ。

だが、沢田の態度はそれらを冒流するものに近しいものだった。

「貴方のそれも封印してあげます」

「御覚悟なさいませ」

パートナーたるエスも怒りを滲ませながらも慇懃に言葉を告げる。

「無理だよ。俺には神様の加護があるからな」

「何を戯言を」

言いながら距離を取る。

間違いなく彼には負素の元凶たる存在が宿っていると彼女は結論づけていた。

理由はその負素の形。

森川未来などは典型的な改変者だったが、その負素も同様に普通の改変者が持つものと同じだった。

その形はあくまでも穴。世界に空いたような穴なのだ。それはこの世に存在するものではない。

だが沢田の持つ負素は違う。

それは霧、もしくは靄というわかりにくいものだが、確かに存在している。

その霧こそがこの負素が元凶に近しいものだという証拠。

今のところ記録固定以外の封印手段がないためミルネは沢田に近づき、その瞳に記録者の蒼い瞳を映させなければならない。

（行けるかな？）

相手は未知の存在だ。経過しすぎても不便はないだろう。霧のように漂う負素は、先ほどの様子だと沢田の命令で、すぐにも攻撃手段に変化するだろう。

（本来負素は人の意志の顕現で、攻撃手段ではないんだけどね）
改変者にとつての負素はただ改変をするためだけの道具に近い。その発生過程で自分の感情がその源流となっていたとしても、それは変わらない。だが、稀に相手を傷つけたという嫉妬や憎しみなどの感情が、負素を攻撃法としての側面を持たせている。森川未来の一件はその典型的な例だ。

道具は道具。それを改変に使うか、攻撃に使うかも使用者の一存で決まる。

だが、負素を攻撃に使うことは滅多にない。
改変すれば、大抵のものは思うままに変化するのだから、わざわざ人を傷つける必要もないのだ。

ミルネは紙袋から半透明なプラスチックのケースを取り出す。
両手に二つ持ったところで、紙袋を足元に置いた。

右手のケースの中には、完成した折り鶴がいくつも入っていた。
左手のケースの中には紙飛行機。

「メモも走り書きとして記録固定に使える。ならニッポンの伝統的アートのオリガミでもできるって、偉いご先祖様は考えたんだって」
紙飛行機を両手で構え、ミルネは微笑む。

「記録媒体として使ってる紙と違って、白いオリガミを集めるのは苦労したよ？」

そして投げる。

左の紙飛行機は先端に向けて鋭くなり、空気抵抗を減らし、速度を重視したものだ。逆に右手の紙飛行機は羽の部分が広くなり、そこに空気を受けて長く遠くに届くように折られたものだ。

沢田は特に何もしないまま進む。

次々に負素を封印する紙飛行機がミルネの手から飛び立つ。
見ようによつては微笑ましい光景だが、執念に満ちた形相で紙飛

行機を投げる彼女は、超現実的^{シュール}な恐怖を人に感じさせる。

それだけ彼女は必死で、この時を待ちわびていたのだろう。

リヴァリアスの家の者であるが故の呪縛にも似た宿命。

彼女はずっとそこから解放されたかった。いや、家族も開放してあげたかった。

両親は彼女を幼い時から各国へ連れまわした。

それはリヴァリアスの者なら誰もが経験すること。負素を追って世界中を駆け回る。

だからこそ、幼いうちから多くの文化圏を回り、言葉を学ぶ。

治安の悪い国を回ることもあるため護身術も学んだ。

自由な旅人と、他の記録者たちは彼女たちを揶揄するが、違う。

一か所に定住することもできない彼女たちはただでさえ、忘れられる運命の記録者。友達と呼ぶ人も自分たちのことを忘れている。

それがどれだけつらいことか。一か所に留まらない彼女がどれだけ寂しい幼少期を過ごしたか。

流浪の存在としての人生を終わらせる。それが彼女の目的だった。そして、従妹の紹介で改変の影響を受けない少年とこの地で出会った。

それはつまり、記録者のことも忘れないということだ。

覚えていてくれる人がいる。それは彼女をしゃがめるには十分すぎる理由だった。

（たぶん私は運がいいんだ）

彼女は笑う。宿命からの解放と友人を得た喜びを感じて。

だが、本人が思う程、運がいいわけでもないらしい。

沢田拓斗に触れる前に、紙飛行機は全て周囲の負素とぶつかり、真っ黒に変色して落下した。

それでいいよとミルネは笑う。

蓋を半開きにした鶴の入ったケースを持ち、一気に沢田へと駆ける。

ようやく沢田が反応する。

周囲の負素を前方に集め防壁とした。果たして負素にどれほどの物理的干渉力があるのかは分からないが、少なくとも自身の負素を封印される記録固定を防ぐことは成功している。

それでもミルネは余裕のある笑みを崩さない。

負素の壁に向かってケースを投げた。

十数羽の折り鶴が負素の壁に向かってばらばらに散って飛ぶ。

特にミルネと沢田を遮る正面部の負素に折り鶴はぶつかる。

黒く変色するのは紙飛行機と同じ。だが、散弾のように多方面から壁にぶつかった折り鶴は、より大きな変化をもたらした。

穴。

壁に人が抜けられるほどの穴ができたのだ。

そこへミルネは迷わず飛びこむ。そして、着地しその奥に悠々と立つ沢田の瞳を見る。

「記録固定！！」

実は特に叫ぶ意味はないのだが何となく、ゲームの影響で言わないといけないミルネは主張している。もちろん記録者全員で却下したのだが。

蒼く輝くその瞳を、確かに沢田は見た。

だが、負素は消えていない。

(どうということ！？)

驚愕にミルネの動きが止まる。

その隙を突くように負素の壁が分裂し、槍のような形に変化し、ミルネを襲う。

「つく！」

メモを取り出し、その槍を防ぎながらバックステップで後退する。相も変わらず悠々と沢田拓斗はその場に負素の申し子として立っていた。

「どうということ！」

その憤りの声を聞いて、沢田は嗤う。

「ははは！！分からないのか？なら教えてやろう！」

記録者といえども改変の影響を受けるだろう？だからお前らは負素の反応を感じて、改変の中心から改変者を見つけるのだろう！？」

「それが、どうしたのよ！！」

落ちた折り紙を回収しながら、叫ぶ。

「余裕だな？まあ、いいが。
つまり、改変によって《……》消えた人間に記録者は干渉できないだろう？」

何だそれはとミルネは固まった。

改変者が自身の存在が消えた。なら、記録者はどうすればいいいや、そもそもこの男の存在が何故自分に見えるのか。消えてしまった人間が見えるというのはどういうことなのだ。

「説明してやるよ。人間の存在を消すほどの改変っていうのはやはり影響が大きい。

その影響をふつうの改変は一週間、正確には一六七時間五七分三〇・二二三秒というリミットをつけて、世界に変化を慣らさせている。だけど人間はそうもいかないらしい。俺もすぐに消えると思っていたらどうやら半端な状態で固定されているようだ。

人の意識からは外れるが、物理的に干渉はできるようだぜ。

そして、一応は消えている俺の存在に記録者は干渉できない。そうだろう？」

どこかに意見を求めるように首を振る沢田の行動に注視できないほど、ミルネは驚いていた。

記録者たちの誰も負素の側に回ったことはない。なおかつ、一々改変の内容を気にするのはアリスのような調律者だけだ。

故に今、沢田がもたらしした情報は記録者が知らなくて当然のものだ。

（これじゃあ、勝てない）

どうすると自問するが、方法がない。

自分の存在を消されている以上、沢田の言う通りこのままでは干渉できない。

（あれ？）

ミルネは思い出す。すごく身近にそれを解決してくれる人物がいるじゃないか。

緋島直樹。彼がもしあの存在なら、この少年を負素から解放できるはずだ。

ミルネはじりじりと距離を取り、

「戦略的撤退！！」

煙玉らしきものを地面に叩きつけた。

煙に紛れ、彼女は進む。

彼の元へ。

煙が去った後、沢田拓斗は笑みを消した。

その背後で。彼が纏っていた負素。それが集まり、やがて黒いワンピースのような服を着た黒髪で黒い目の少女が現れた。

『ちよつと予想外だったけど、概ね計画通りといったところ？』

十代前半ほどの少女だったが、その割には少し落ち着きすぎていた。

「ああ、これであいつが出てくる。わざわざ出向く手間が減った」

『本当にできるの？』

負素の元凶とミルネはこの存在を呼んだだろう。

少女は負素を体から噴出させているのだ。

しかし、少女に言わせれば負素の元凶は人間だ。

自分はただそれから生まれた存在。自分は望まれもせず、存在を許されない。

人を氣遣う心ぐらい持っているというのに。

「できるかできないかではなく、やるかやらないかだ」

覚悟を感じさせる言葉だというのに、なぜこの少年は悲しみに満ちた瞳をしているのか。

それは悲壮な覚悟故。

自分の話を、悩みを聞いてくれた人を消すと決めた沢田の苦悩が現れたのだ。

（ほとんど自殺に近いことをした後、友を殺すか。俺はどれだけ王道な悲劇を歩むんだろうな？）

沢田拓斗は消える。

友だと感じた少年を待つために。

?? change my:

アリスは首を傾げた。

「どうして、その沢田とかいう人が改変者だとわかるんですか？」

……それ以前に君がどうして僕のことを知っていたのかが気になる。まあ言わないけど。

「その人、彼女がいるらしいんだけど、その彼女さんは病気だったんだ。でも改変の後はそうじゃなかったみたいだ。

森川さんがそんな改変をするとも思えないし、多分、沢田さんがもう一人の改変者だと思う」

沢田さん。あなたは、改変してまで彼女を救いたかったですか？でも、沢田さんは自分の恋人を助けたかっただけだろう。それは悪いことなんだろうか？

今になって改変が正しいかそうでないのか分からなくなった。人が世界を変えたいと思うことはそんなにいけない事なのか。圧倒的な理不尽に抗おうとした結果が負素ではないのか。

そんな考えが、僕の中でぐるぐると渦巻いていた。

「……」

「何を考えているんですか？」

僕の顔を覗き込んでエイナさんは言う。

「え、え〜と、たいしたことじゃないよ。ただ」

僕は一瞬言うべきかどうか悩んでから、

「改変で現実を変えることはそんなに悪いことなのかな」

「……」 「……」 「……」

エルさんも含めた三人は黙り込む。

「僕は、人を消したり、悲しませたりする改変はダメだと思うよ。でも、一人の女の子を救うために現実を変えることは悪いことなのかな？」

リギスター チューナー
空気が重くなり、記録者と調律者である二人の少女は黙り込んで

しまった。

そんな中沈黙を破ったのはおっさんの声だった。

「……兄ちゃん。俺は悪いことだと思うぞ」

僕は黙ってエイナさんを見つめる。ほんの数瞬だけの視線の交錯。しかし、彼女はすぐに目を逸らしてしまった。

「現実を受け止められずに、人間にできない過去を変えることで現実から逃げるっていうんだ。ゲームで言ったらチートだ。まあ、人生ってのは不公平かつ理不尽なものだろうが、受け止めなきゃならねえ」

おっさんの声で言われると説得力があるような気がする。実際人生経験は豊富そうだ。

「例えばその娘さんと同じ病を抱える人が百人いたとする。でも改変で救えたのは一人だけだろう。他の人は不公平だと感じるだろう？他の人はその方法を選べないんだから」

何となく気持ちちは分かる。

人は等しく平等であるといわれるけど、社会に出れば格差もあるし、不平等なんてない方がおかしい。当たり前のことだけど、だからこそ腹立たしい。

「それにな、そんな裏ワザをノンリスクで使えと思うのか？」

「改変に何かリスクがあるの！？」

「おお。どうした急に焦って」

焦っているのか僕は、と意識して深呼吸する。

「ごめんなさい。もし森川さんに何か悪い影響が出たらどうしようって思いました」

「……お前さん、ホントお人好しだね。自分のことを改変したやつ心配なんてよくできるな」

呆れたようなエルさん。そういわれても、あの娘は僕を消したりしたわけじゃないんだからそんなに根に持つことでもないと思う。

「まあ、いい。それで、改変の影響だが、改変者自身には何の影響もない。正しくはあるんだが、そんな顕著なもんじゃねーんだ。そ

れに、あの嬢ちゃんは今もう記録固定^{メモライズ}してる。影響はほぼないと言っている」

「そうなんですか……」

少しホツとする。僕は自分で思ってたよりも彼女のことを心配していたらしい。

「……」

なんか二つの視線が串刺しにしてくるのですが、そのくせに顔見たら逸らしてきます。どうしたらいいでしょうか、と。誰か答えてくれます？

まあ、無視。うん、無視。絶対無視。

「お前さんにとってはいいんだろうが、世界全体としてはよろしくねーんだ。」

俺様たちがどうして世界を記録しているかは知らないな？」

さて、なんか六話ぐらいでいろいろ難しい話をされた気がするが（タイムトラベルパドクスとか）、そんな話だったけな？

「確か、不安定な世界を記録して固定することが目的だったと記憶しているけど」

まあ、その後僕は根暗モードに入っただので、流してしまったけど。

「……エイナ」

びくつと跳ねて椅子を揺らした彼女。……まあ、今のタイミングで話しかけるのは意外だけど。と僕は密かに彼女に同情する。

「いい加減兄ちゃん目え見て話せ。お前の事やる。お前が話すが義務ちゃうんか？」

「……はい」

シユンと親に怒られたように肩を落とし、少し涙目のまま彼女はエルのその言葉に頷いていた。

ところで関西弁って怖いね。僕までびくびくしてたよ。

エイナさんはこっちに向き直ったけど、時々おどおどして目を逸らしていた。

「直樹さん。私たち記録者が改変を修正するのには理由があります」

それはそんなに改まって言わなければならない事なのだろうか。僕は少し疑問に思う。

「改変は世界の記憶を捻じ曲げるものです。それをするだけで世界の記憶はより不安定になります。そして許容量を超えたら私たちにも、どうなるかわかりません」

ふうん。と僕は頷く。

どうなるかわからないと言われてもピンとこないというのが本音だ。

それでも、一つだけわかることがある。

「確かに世界を自分の思い通りに変化させるものがそんな簡単にできるはずもないね」

「……」

それっきり彼女は黙ってしまった。まだ何か言いたそうにちらちらと僕を見ているので、これで終わりではないんだろうけど。

「エイナ」

さっきよりも少しだけ優しい声でエルさんは掛ける。

「……」

「言えないなら、ワタシが言いますよ？」

アリスはいつの間にか表情を消した顔でエイナさんを見つめていた。

「……」

呆れたように一息を吐き彼女は僕の方に体ごと向ける。

僕も彼女と顔を突き合わせた。

「…… 緋島さん。ワタシはあなたのことをエルから知らされてここに来ました。さっきの負素の浄化はついでにやったことなのです」

「僕のことを？」

そういえばミルネさんも僕のことをエイナさんから聞いたって言うてたし、僕はそんなに珍しいのかな？

「はい。あなたが改変を認知できると聞いたので、大急ぎで来ました」

「改変に気付けるのってそんなに特別なことなのかな？」

僕は正直いろんなことを受け入れるのに時間が掛かったので、あんまり人がどうか考えたことがない。多分普通の人はこんな力は持っていないだろうとは思っていたけど。

「特別ですよ。飛び級の特別です。スーパーのタイムサービスなんかめじゃないです」

……うん。それは、なんていうか、そうだろうね。もし、タイムサービスとほとんど変わらなかったら、ありがたみというか、僕今まで何に悩んでたんだろうって落ち込むよ。

「改変に気付くなんて蒼天の霹靂ですよ。寝耳に水ですよ」

なんかその二つをならべるのはよくないと思う。というか若干意味が違うと思う。細かいけど。

「そこでワタシはあなたに接触したの」

「てことは、あの時君が泣いていたのは僕を引き寄せるための演技！？」

通りであの後の彼女の対応が冷静過ぎると思ったんだよ。

彼女は不敵に笑い、

「いいえ、あれは本気で迷って自己嫌悪で泣いてました」

本気だったんだ……。今さっきの僕の感心を返してほしい。

彼女は照れたように頬を染め、少し舌を出した。

可愛いしぐさで誤魔化そうとする気満々だと思ったけど、そこを突くと蛇が出てきそうなので放置しておく。

「それで、アリスは僕に会ってどうするつもりだったの？」

アリスはまた真剣な表情に戻り、

「正直に言いますと、ワタシはあなたを調べるつもりでした。そうすることで世界に影響を与えずに改変ができるかもしれにやいのです」

今噛んだよね？結構重要なセリフなのに噛んだよね？まあ、最後まで言い切ったから良しとしておこう。

はにかむようにうつむきながら顔を真っ赤にするアリスは置いといて

て、僕は向かいのエイナさんとエルに向き直った。

「私たちには改変を感知することはできません。私たちは記録固定をすることによって初めて改変の影響を外れるのです。つまり、私たちが記録固定していない人や物に改変が起こった時、私たちはそれに気づくことはできないんですよ」

彼女にとって気まずいことはもう言われたのか、エイナさんはいつも通りの冷静な口調で説明する。

少し気になったけど、それは今関係無いかと割り切って、

「それは分かったよ。でも僕が気づけるからって言って、世界に影響を与えないように改変することができの？というかそもそも、記録者たちも改変をすることができたの？」

「お前さんに言っただけだったか？」

まあいい。記録者たちは記録固定で確定した世界の記録を書き換えることができる。世界の記録を変えるっていう点で、それは改変といえるだろう？」

まず後者の質問にどこか意外そうな声でエルが答えた。

それに頷いて、エイナさんは口を開く。

「私たちの改変でも世界に影響を与えることは不可避なことです。多少、負素による改変よりもましなだけです」

それでもそれは僕の言う欠落と同じなんだ。それは許されるのかな。まあ、内容にもよると思うけど。

「私たちの改変はそれぞれ違います。記録者がする改変は、負素の改変者たちを元に戻すことです」

厳密には記録固定だが、改変したままで固定すると本末転倒だ。だから、彼女たちは元の形に改変し直すのだ。

僕はエイナさんに頷き、今度はアリスを見る。

「ワタシは調律者です。ワタシたちにできることは負素を解放して無害な思念に変えることです。もしかしたらこれを改変と呼ぶのかもしれないですね」

二人の話を聞く限り、彼女たちの改変は悪いものとは思えない。

「それで僕の存在がどうして影響のない改変に関係するの？」

「それは……」

「それはですね……」

前者はエイナさんで後者はアリスの言葉だ。

二人はむっとした表情で睨み合う。

そのまま微妙な空気を醸し出しながら数分間が経過した時だった。

「お前らいい加減にしろ！！」

エルがキレた。

途端に子犬のように二人はびくびくしながら上目遣いで図鑑サイズの厚手本を見る。

……可愛いのもかもしれないけど、激しくシニールだ。

「俺様が説明するからお前ら黙ってる」

「はい」

同時に頷いた。どうでもいいけど、二人が息を揃えたのを初めて見た気がする。というか僕、どうでもいいってフレーズ多用しすぎだね。

「でな、兄ちゃん。お前さんは改変前の世界の様子を正確に覚えているよな？」

僕は思い出す。

消えてしまった幼馴染の少女。同じく消えた両親。無くなった建物に、コンビニ店員になったアイドル。五センチ縮んだ僕の伸長。僕の高校での扱いの変化。

自分では正確に覚えているつもりでも、それが本当に正しいものかは分からなかった。

「僕はそのつもりだけど、本当にそうなのかと言い切れる自信はないよ」

「いや、その辺は大丈夫だ。お前さんの記憶はエイナと俺様がしっかり記録したからな。それを照合して確かめたよ」

一応現状確認の意味で言っただけだとエルは付け足した。

しかし、そうなのか。正直なところ僕の記憶力は人並みなのだけ

ど、改変に関しては異様によく覚えている部分はある。ただ衝撃的だったから覚えてるだけだと思ってたけど、実際のところはどうしてなんだろう。

そんな疑問を今ぶつける訳にもいかず、エルの説明に耳を傾ける。「そのお前さんの記憶を使えば、改変によって歪められた世界を最も正しい状態に復元できる。だから、アリスはお前さんを調べようとして接触した訳だ」

……。

「つまり、僕を利用するつもりだったんですね。便利な記録装置マダーとして」

「……」

「……」

「……」

三人の閉口は肯定、と採っていいだろう。彼女たちはこの話題が出た時と同様に気まずそうに視線を逸らす。悪戯が見つかった子供がこんな態度を取ったと思う。

そんなに後ろめたいことなのだろうか。というのが僕の本音だ。人間は誰かを利用することもある。その人の力とか、人徳とか、優しさとかを利用することは珍しくないことだと思う。僕自身にそんなところはあまりないけど、でも僕は見ていた。

人を利用する人の姿を。だからこそ思う。

彼女たちは綺麗過ぎる。

新雪のようにただ白く、穢れを知らない。そんな綺麗さが彼女たちから感じられた。

（ああ、そういうことか）

僕は一人納得する。

彼女たちはこういう人との付き合いに慣れていないんだ。

記録者として、日々負素を封じるエイナさん。

調律者として、負素を無害化するアリス。

こんな二人では人と触れ合うことはそうなかったのかもしれない。

だからこそ、人との関わりに綺麗過ぎる理想を彼女たちは持っているんだ。

元々はただ負素を記録するために近づいたエイナさんが、たまたま僕の改変を受け付けない体質を見つけた。それをアリスに伝え、世界の為と言い訳し、僕を利用する。

もしかしたら、二人はそんな風に僕との関係を誤解（・・・）しているんじゃないだろうか。

僕は少し苦笑気味に笑う。

「でもね。僕はそれでいいんじゃないかと思うんだ」

二人ははっとしたように僕を見る。

「利用するつもりでもさ。そこから始まったつながりが、心地よく感じられているならそれでいいんだよ。僕はエイナさんのも、アリスのも、ミルネさんのも、エルのも、全部のつながりが心地いいんだ。二人はどうかかな？」

エイナさんは明後日の方向を見ながら静かに頷いて、アリスは迷ったように首を傾げた。

「それにね。僕としても利用されるのは吝かではないんだ。僕も改変に関わる人間だし、望むところだよ」

どんつと胸を叩いた。

二人は少しだけ朗らかに笑った。もしその笑みが、僕の言葉を聞いて浮かべたものなら、それはこの上なく嬉しいことだ。

気づけば僕も、笑っていた。

「それで協力ってどうしたらいいの？」

肝心なところだと思うけど、二人は同時に首を傾げた。

知らないらしい。この娘たちは僕に何をさせるつもりだったのだろう。そして僕はどうなるのだろう。正直、不安だ。

「しゃーねーから俺様が説明してやる」

威張った子供のようなおっさんの声。あなた、もう説明係という

認識でいいですね。

「お前さんの記憶を用いて改変するわけだから、お前さんが改変するのがベストなんだよ。という訳で、お前さんの情報を改変して、お前さんに記録者とか調律者の能力を与える」

つまり僕は今回の森川さんがしたように改変されるのか。まあ、悪いようにされるわけじゃないからいいけど。

そう僕は一人納得した時だった。

バンツツツ！と木材同士がぶつかったような音が響き、一斉に僕はその音源を探して書架の入り口を見た。

そこにはもう一人の記録者こと、ミルネさんが肩で息をしながら真っ直ぐにこつちを見ていた。

「どうし……」

「直樹君！！あなたの力を借りたいの！一緒に来て！！」

彼女は僕の元へ駆け寄り、腕をつかんで強引に立たせた。

「え、ちよつと……」

僕は呆然として彼女を見つめる。

そのまま、ミルネさんの青い瞳が輝きだして、

右脇腹に強烈な痛みを感じた直後、僕の左側頭部が床に激突していた。

「……ツツ！……う！！」

声も出さずに悶絶する僕の上で、ミルネさんと僕を横倒しにしたアリスが睨み合っていた。

「何で唐突に現れた上に、緋島さんに何をするつもりだったんですか！？」

「何って、直樹君を私の使い魔にする魔法」

「ファンタジーっぽいですね！！違うでしょう！！ワタシたちが今までビクビクしながら協力を求めてたのに、貴女は何の承諾もなくそういうことを……」

アリスが何やら文句を並べている途中で、ミルネさんはニヤリと人の悪そうな笑みを浮かべた。そして、自前のプロポーションを見

せつけるように体のラインを両手でなぞり、

「私なら事後承諾でもいいのよ。二人と違ってね」

そして、アリスとエイナさんを順に見ていった。

「破廉恥です」

エイナさんは一言だけ返してそっぽを向き、アリスは自分の体を守るように腕を抱いていた。

ちなみに僕には何の話か分からない。事後承諾でどうして体つきを僕にアピールするのだろうか。

「という訳で、私を手伝ってもらうために君の情報を改変するよ」

え！？今何を申されましたのでしょうか？（多分、過剰敬語）

せっかくみんなが今回じっくりと話し合って決めたことを、この人強引に決めちゃいましたよ。

転がったまま左側頭部と右脇腹を抑えていた僕を、彼女は見下ろす。

また彼女の目が青く輝いた所で、ゴンっという擬音のような音が聞こえ、彼女の体が後ろに倒れた。それに入れ替わりアリスの顔が僕の真上ににゅっと現れた。

「緋島さんはワタシの使い魔になってくれますよね」

ゾツとするような綺麗な笑顔で彼女は言つてのけた。

というか使い魔って何？僕、一体どんな改変を施されるの？

そのことを聞く前に彼女の翡翠のような碧色の瞳が輝き始めた。

……まあいつかは輝くと思ってたよ。

そんな感想はともかく、彼女の瞳に吸い寄せられるように見つめ続け、

ぎゅむ。

そんな擬音が聞こえた気がした。

柔らかい餅のようにアリスの両頬が伸ばされ、その引つ張る相手をアリスは睨む。おかげで彼女の瞳から解放された。

「ひはひ！ひはひはほー！」

相手は何故か額が円状に赤くなっていた彼女は笑みとも怒りとも

分別つかない表情でアリスを睨んでいた。

「アリス！あんたの石頭を頭突きをしないでよ！」

どうでもいいけどやっぱりこの二人も面識があったらしい。

取り敢えず巻き込まれた嫌なので、そろりそろりと這って二人から離れた。

そのまま入口から脱出してみようと顔を上げた時、

僕の目の前にしゃがみ込んだエイナさんと目が合った。

「……」

無言のまま僕を見下ろすエイナさん。

「あははは……」

乾いた笑みを浮かべ様子を窺ってみるが、彼女は何にも反応しない。

ふと手を左目に当てた。

「「つて！？待って！！」」

後ろの方で二人の声が響く中、

青いエイナさんの瞳の輝きに、僕は溺れていた。

気が付くと床と口づけをしていた。

「……」

むくつと起き上り座り込んで顔や腕に着いた埃を払う。

その前にはエイナさんを挟むように右にミルネさん、左にアリスと三人そろって体育座りで僕をじっと見ていた。まるで科学の実験を見る子供のように、輝いた瞳がそこにはあった。

「どう、ですか？」

アリスの瞳は中でもひととき輝きを放ち、本当に手に汗握り締めている。

「どう、とは？」

逆に僕は聞き返す。すると少し興が冷めたようにアリスは顔を顰めた。

「ですから、変化ですよ変化。体に力が溢れるようだとか、そんなことです」

僕は自分の体をぺたぺたと触る。別にどうということはない。細くも太くもない、平均的な肉の付き方をした僕の体だ。

「別に何も無いが……」

あからさまに落胆したような左右の二人。しかし、僕を改変した本人は冷静に、

「気分はどうですか？」

「いや、悪くも無いし、良くもない。常の通りだ」

エイナさんは腑に落ちないと言った風に眉を寄せ、

「記憶は大丈夫ですか？」

記憶？まあ、改変は人の記憶というか、世界にの記憶を改竄するようなものだから、確かに影響が出ていてもおかしくはないのかもしれない。だけど、僕にはそんな変化は全くなかった。

「別に何にもない。俺は何にも忘れていないぞ」

すると、三人がキョトンと目を丸くして僕を見つめる。

「どうしたんだよ。三人とも。俺の顔になんかついてるか？」

顔をぺたぺたと触る。まさか、埃がついてたのかな。

「あの、気付かないんですか？」

アリスがゆつくりと僕に悟らせるように語りかけたが、何のことだかさっぱりだった。

「だから何？はつきり言ってくれよ」

いつもそうでもないはずなのに、何だか無性に遠回りな態度が癪に障った。

「話し方、変じゃない？」

ミルネさんは気の毒なものを見るように慈しみを含んだ眼差しを向けてくる。

「話し方？何言っただよミルネ俺は別に、………？」

何か変だ。僕はいつも通りに話しているつもりなのに、なんか聞こえる音が違う。

「エイナ。君は俺にどんな改変を……」
そこで気づいた。

……嘘でしょう。僕はその時そう思った。
一人称と喋り方が変わってる。

それが最初に気付いた変化だった。

……しょーもない変化だったけどね。

?? 不正を正す罪

「俺？ いや、いや違う！！俺の一人称は、だから俺じゃないだろうが！！」

無意味に宙に向かってキレる僕。ホントに何なんだろうね。心の中の一人称は変わってないのに、何故か口に出すと俺に変わる。そんな妙な状況だ。

「とてもとてもわざとらしく見えるんだけど？」

ミルネさんが冷たく言った。

それについてはしょうがないと思う。だって、僕の言葉を変えられるのは僕だけであって、結局他人には分からないものなんだろう。でも、僕としては必死なんだよ。

「ってか！ エイナ！ 一体君は俺に何をしたんだ！？」

いちいち怒ったように怒鳴りつける僕。いけないね。短気は損気だよ？ 寿命縮むよ？

他人ごとにするなと言われそうだけど、僕としては誰かが勝手に僕の言葉を口に出す前に変換しているような気分なんだ。意識しても音に出る言葉は荒っぽくなっている。

しかもどうやら性格も変えられたらしく、第三者面した僕の心中も多少荒れている。イライラするんだよね。

僕に怒鳴られたエイナさんというと。

「……」

ぼうつと少し赤い顔で僕を見つめていた。

もじもじと体をくねらせ、髪を弄っている。

「……強引なのは嫌いじゃありませんから」

「「ああ、それでこうなったのか」」

エイナさんが何かぼそぼそと聞こえた気がしたが、荒れている僕の

耳には届かなかった。

加えてそれに返事をした二人の声もほとんど聞こえなかった。相
当イライラしているのか、周りのことがあまり見えないのだろうか。
というかホントになんで心中の僕はこんなに心穏やかなのだろうか。

取り敢えず深呼吸しろ僕。スーハースーハー。よし、多少落ち着
いたね。じゃあ、丁寧に質問タイムだ。

「エイナ。君はいつたい俺にどんな改変をしたんだ？」

どう考えてもこの口調は彼女の改変の結果だ。ゆつくりと、改めて
僕は問いかけた。

「取りあえずはエルさんが説明したように私の記録者としての力を
与えました。正確には、直樹さんを私と同じ存在にしたと言った方
が正しいです」

「いや、それは分かってる！説明してもらったからな！

そうじゃなくて、この口調に関してだ！俺に一体何をしたんだ！

？」

ああもう！この口調いい加減にしてほしい。喋る度に自己嫌悪に
陥るじゃないか。

こんな荒っぽい口調で話してたら、誰かに嫌な思いをさせてしま
うかもしれない。それを想像すると何も話したくなるよ。

自己嫌悪から脱して、僕はエイナさんの妙な変化に気が付いた。

「……ぽ」

何だか間抜けっぽい言葉が漏れていた。ってそうじゃなくて。

彼女の顔が何だか赤いのだ。

「……やっぱり強引なのは、……嫌いじゃないですね」

ぼそぼそ何か聞こえた気がする。けど、僕の耳までは届かず、彼
女はそのままじいーっと僕を見つめてきた。何か言いたいことがあ
るなら言ってほしい。まあ、今質問しているのは僕なのであって、
何か注文でもされたなら、今の（口調が荒く、短気らしい）僕は憤
怒するだろうけど。

「あのね緋島君。私たちの改変で与えた相手はいわパートナーなの」

エイナさんは使い物にならないと踏んだのか、ミルネさんが説明をしてくれた。

パートナーかぁ。

悪くない言葉だと思った。だがそれ以上に、

「それがどうしてこうなるんだよ」

疲れたのか勢いを失くし脱力した僕は溜息を混じりに呟く。

それを耳聴く聞き入れたミルネさんがニヤッとイタズラっ子のような笑みを浮かべ、耳元にゆっくりと近づく。

「どうしてかかっていうと、パートナーには理想の相手になって欲しいじゃない。だから改変する時に無意識にその人の性格を変えちゃうことがあるんだって」

……それはつまり、なかなか自分勝手なことで僕はこうなったってことか。

さらに体中の力が抜ける。もう座り込みたい。この図鑑の上に座っていいでしょうか？ 駄目ですよね。

「言い換えるとエイナにとっての理想の男性像が今のあなたって……、ちょ！ 脇を、にや！ ひい。あはははははは！ ……くすぐらないでえー！！」

音もなく忍び寄ったエイナさんによって本の山の影に引きづり込まれるミルネさん。南無。

…… なんとというか、今の言葉が本当だとすると。

…… 素の僕、完全否定？

「兄ちゃん？ どうして膝を抱えて隅のダークゾーンでカビカビオーラ纏って蹲ってんだよ？」

ダークゾーンって何？ カビカビオーラって何？ とつつこむ気力も奪われた。

見た目可愛い女の子に暗に自分を否定されるのがこんなに心に来るものとは思っていなかった。

もう別の事に思考をシフトした方がいいと判断し、僕はミルネさんと呼ばうとして本の山を覗き込むと、

服装が乱れ、仰向けに倒れ、真っ赤な顔をして、ハアハアと息を漏らすミルネさんを発見した。

……………。

「どうみてもこれはレイ、ムゴツ！」

小さな手が僕の口を塞ぐ。

目で確認するまでもなく、この手はアリスのものだ。

どうやら後ろから覆い被されているようだ。何か背中に触れているような、いや気のせいだよね。だってアリスちっさいし。

「いいですか直樹さん？それ以上はこの物語のイメージを大変損なうので喋っちゃだめですよ」

（世の中メタばっかりだ！）

思わず僕は叫んでしまったが、塞がれた手から「もがぼうが！」とか理解不能な叫びになったただけだ。

「くすぐったいですよ」

掌で口に蓋をされたままだったので息が彼女を擦っているようだ。

……。

そのまましばらく、ミルネさんが衣服を正すのを大人しく待つことにする。

というかいいい加減もういいでしょう？僕よ。一人称ぐらいどうこう言っべきじゃないよ。まあ、違和感ありまくりなのは事実だけだね。

そんな風に言い聞かしていると、ふと掌から外された鼻からいい香りがしてきた。

（いいから放してくれ）

放してくれないと、今の僕は狼になってもおかしくないんだよ。君の匂いは僕の男の本能を呼び覚ましてしまいそうなんだ。

普段の僕なら絶対にそんなことはできない。確認できる。僕は世間一般で言う草食男子だ。さらに加えて、我ながら自制心もある。

ところが性格が改変されてしまった訳で、さっきまでは幼児体型
気味のアリスにも、和風美人系のエイナさんにも、外人の色香を漂
わすミルネさんにも、そんな感情はあまり抱かなかったのだけど。
エイナさんの黒髪の艶や、ふとした時に浮かべる笑顔が気になっ
てしょうがない。

ミルネさんの太陽を反射する金髪と、白い肌に目を奪われる。
アリスのボディーランゲージや、その時に見た目に反した子供で
はない女性の香りが鼓動を早める。

つまり、この少女たちの魅力に今の僕は自分で思っているよりも
参っていたのだ。

（頼むから早く俺を解放してくれ）

アリスに身振り手振りで必死に伝える。

数分してようやく伝わったのか、アリスは僕を解放した。

「意外と苦しかったんだぞ」

恨みがましく睨みあげてみる。

少し赤くなりながら彼女は「ごめんなさい」と謝った。

なんか素直だなと思いつながら、まあ出会ったばかりだし、これが
彼女なんだろうと思って納得する。

ところで僕らがじゃれている間にエイナさんに襲われたミルネさ
んは服を整えて、今ではもう平然とした顔をしている。

「それで、ミルネは俺に何か用があったんじゃないのか？」

忘れていたわけではないんだけど、ちよつとアイデンティティ
が消失しかけてて、それどころではなかったんだよ。

「やつとそこまで戻ったわね。緊急なの。もう一人の改変者がいた
のよ。」

「……」

それはアリスたちとの会話でも出てきた話だ。

森川さんが関知し得ない改変。その改変を行った本人。

「私と協力してその改変者を止めて欲しいの」

「……」

そんなの、
僕も同じだった。

改変の中心。負素の元凶。

そして、沢田先輩。彼が自分自身を消したという話。

「そんなものがあの先輩に、ねえ」

ミルネさんのその話を聞いた僕はそう漏らした。

「リヴアリアスの話は知っていましたが、それがこんな近くにいるとは思いませんでした」

エイナさんは顎に手を当て可愛らしく考え込む。

「それを封印したら、負素が丸ごと消える。みたいな単純なことじゃないよね」

アリスは苦笑いをしながら頬を掻いた。

「確かにあれは負素の元凶よ。でも、あれが消えたところで、負素の問題は解決しないわ。負素は人間の感情から派生したものだし、人間がいる限りそれは続くでしょうね」

「あくまであれは大きな負素の塊にすぎません。しかし、あれは周囲に悪影響を与えるのです。具体的には周囲で負素がより多く集まり、改変が相次いで行われるといったものです」

補足的に説明したのはエスだった。どこから聞こえる女性の声に僕は頷く。

「なんかよくわかんねーけど、とりあえず放っておいていいもんじやないってことは分かった」

「……それで、どうするの？」

慎重に彼女は僕の反応を窺っていた。

「どう、とは？」

見つめ返すと彼女は視線を外す。

「鈍いなあ。兄ちゃん」

おっさんは黙っていてほしい。

「お前さんの知り合いなんだろう？そのサワダってやつは。それに自分を消して記録者による干渉を妨げるなんて大それたことをやってまで、そいつは変えたいことがあったんだ」

エルはゆっくりと、語りかけてくれた。

彼は僕を落착かせて、その上で判断してもらいたいのだろう。

その心遣いは嬉しかった。

「その全部を知ってて、お前さんはそれでもサワダを止めたいと思うのか？」

沢田先輩はただ恋人を救いたかっただけだ。

僕はそれを知っている。それに彼がどれだけ苦しんでいたのか、その片鱗を見ている。

確かにこんな改変なら、きっと許されてもいいんじゃないかと思う。

けど、

「そんなの聞くまでもないだろ？」

「……」

みんなが見守る中僕は。

「止める。ぶん殴って止めて、反省させてやる」
決意表明した。

彼の願いはとても綺麗なものだった。

人を救いたい。シンプルなその願望。

僕だって、同じ状況なら最善を尽くすだろう。

けど、

たかが、16の高校生に何ができるだろう？

沢田さんは僕より年も上で、生徒会副会長で、道を歩けば女子が振り返るイケメンで、勉強も運動も人一倍できる生粋の天才。

だけど、それでも。

僕らは変わらない。

ただ現実には打ちのめされるだけの人間だ。

そんな人間にできることは知れている。

まず嘆くだろう。そして、動くだろう。病気について自分で知見を深める。そして、少しでもいい医者、病院を探す。何が何でも彼女をそこに入れる。

次に祈るだろう。病気が少しでもよくなるように、家族と一緒に。

それでも病が彼女の身を蝕むのを止められなくなったとき。

僕なら傍にいろだろう。

そしてできるだけ普通に振る舞う。いつも通り。これが自分の日常だと信じられるように。彼女のいた世界を再現して見せるだろう。でもそれは、僕が当事者ではないからこそ思えることだ。

当事者に立った彼は絶望してしまった。

不完全な世界を恨んだ。こんな世界を作った神様を憎んだ。彼女の才を惜しんだ。自分の不甲斐無さを嘆いた。

それが負素を呼んだ。

それを手にした時、彼が何を思ったか、僕には見当もつかない。

僕は目の前の現実を誰かに変えられる立場だったから。

自分を消したとき、彼が何を考えたか、僕には想像すらかなわない。

僕はまだそこまで誰かを愛することができなかったから。

僕は改変によってそうなってしまうた。

彼は改変とは関わりを持たず、普通に生きて、人を愛した。

こんなにも違う僕ら。

それでも。

あの夕暮れの生徒会室で、僕らは同じ思いを、世界の不完全さへの悲しみを、分かち合った。

だから、止める。

改変に関わった人間として、例え不完全でも世界を変えることは

許されないと、僕は教えに行く。

きっと彼は恨むだろう。憎むだろう。惜しむだろう。嘆くだろう。
それでも僕は。

（あなたの改変が正しいとは思えないんだ。 沢田先輩）

?? 不正を正す罪（後書き）

次話は一章最終話となります。
お楽しみに。

?? 終幕

子供たちが言うところの幽霊屋敷であるこの屋敷を出る。

そして僕は。

闇を見た。

黒い霧が周囲を覆っていた。唯一空だけは視界が空けていた。しかし、そこから注ぐはずの陽光が闇に飲み込まれているように、ここは暗かった。

「全て負素ですね」

エイナさんは鋭い視線を周囲に向ける。

「これが負素の元凶ということにや!?!?」
舌噛みました ひははひはひはひは!?!」

少し怯えたのか早口で話したアリスは、こんな状況にもかかわらず、盛大に舌を噛んで手をバタバタ振っていた。

やれやれ全く、

「忙しいなあ!」

呟いた僕の前方、闇を裂いて彼はゆっくりと歩いてきた。

「よう後輩」

暗黒を従えて笑う彼は邪悪にさえ見えるが、その中に僕は寂しさを感じた。気の所為なのかも知れないけど。

向かい合い、視線をぶつける僕ら。いやがおうにも緊張感が高まる。

「兄ちゃんよお」

気の抜けたようなおっさんの声。なんか高まっていた緊張感が抜けていくんだけど……。

脱力して僕は肩を丸める。

「おっさん。頼むから真面目に生きてくれないか?」

「俺様の生き方にまで口出された!?!」

なんか異常に驚いていた。

「ったく。……お前さんな、そんな肩肘張るな」

「無理な相談ってやつだな」

実のところ僕には何の考えもなかった。
存在を消してしまった沢田さんをどうすればいいのかも分からない。

我ながらなんて馬鹿らしい。

そんな自己嫌悪を荒つばい僕は怒りに変え、今にも飛び出そうとしていた。

それは自制できるようなものではなかった。

スツと、空気を切るような速度で僕は駆けていた。

エイナさんもミルネさんもエルもアリスも僕を止めることはできなかった。

傾斜が比較的緩いところだけを踏みつけ、沢田さんの懐に入る。

ああ、なんか僕の運動能力も上がってるな。これは。

そんなことを思いながら、体は自然と動く。

拳を握り、引く。そして、全体重を乗せて振るう。

沢田先輩はそれを避けなかった。そして、防がなかった。そのま

ま沢田先輩の左頬がそれを受け止めた。

バゴッ！！という鈍い打撃音が静かな緑の海を騒めかせる。

人を殴ったのはこれが初めてだ。

痛い。体と心が、痛かった。

殴った拳を原点に、殴った右腕がジンジンと痛みを訴える。

殴られた沢田先輩が顔を向ける。ひどい顔だった。

泣きはらしたように目は真っ赤に充血し、まぶたも赤く腫れていた。顔は最後に見たときより細くなっている。いつか見た彼の自信や充実感に満ちたオーラなんてものは欠片もない。

だが、彼は笑顔を浮かべていた。

それは以前見たものと同じ、幸福と希望を携えた笑顔、彼女との仲を聞いたときと何一つ変わらない笑顔だ。

だがそれは、現実に打ちのめされた人の顔だ。

以前の、改変される現実の移ろいやすさに絶望し、諦めた僕はこんな表情をしていた。

その僕にとって諦めることこそが幸福と希望だったのだ。いや、それ以外に望みはなかった。それ以外に取るものがなかった。どうしようもない欠落を抱えた悲しみが、僕の顔からは溢れていた。

彼も同じだ。現実への絶望の果てに負素による改変を選択せざるを得なかった彼の心境。自分はいなくとも恋人は笑う世界を作った男の悲しみが滲んでいる。

種類や原因は違っても、同じ世界への絶望と悲しみを持っている。それはきつと彼も感じてくれているはずだ。

「で？」

そんな壊れそうな笑みを浮かべながら。

「お前がやりたいことってのは、俺を殴るだけなのか？」

バツ！！と黒い旋風が沢田先輩の足元から火山の噴火のように溢れ出た。

為す術もなく僕は引力を上回ったその浮力に吹き飛ばされる。

二バウンドして、三度目にして僕は舗装されていない斜面に叩きつけられた。さっき立って居た所よりも後ろなのか、振り返ったエイナさんたちが呆然とした表情でこっちを見ているのが見えた。

だがその目を気にすることはできず、あまりの痛みに体中の酸素を口から吐き出して僕はもがいた。特に制服に泥を付けながら引き摺った腕がジンジンと痛む。

幸いかどうかは分からないけど、その痛みのおかげで彼を殴った痛みはほとんど感じなくなっている。

「だいじょうびゅー！！」

アリスが盛大に囃んだ声が聞こえたが、今は気にしてられない。焼けつくような痛みを堪えながらなんとか起き上る。

目の先には黒い負素を噴出させる男が嗤っていた。

「大丈夫なんですか？」

僕の腕に手を伸ばしながら心配そうな声を掛けてくれるが、

「触るな！痛みが増す！」

鋭い言葉でその手を遠ざけてしまった。

さつきからこの荒い僕はマイナスの事しかないね。全く困ったものだよ。

その僕は流石にシユンとしたエイナさんに悪いと思ったのか「すまん」と一言だけ掛けて立ち上がる。

まあ、なんというか。おおまけにおまけてしてギリ及第点かな。

「それより、あれをどうするかなんだけど……」

眉間に皺を寄せた険しい顔をしてミルネさんは沢田先輩を睨んだ。

「何か案があるのか？」

そもそも彼女が僕の力を借りたいとか言ってきたんだ。何かしらできることがあるはずだ。

「ええ。でも、それをするには説明する時間が……」

一步一步、沢田先輩は僕らに近づいてきた。

僕の中の冷静な部分がそれに疑問符を浮かべていたが、僕という人間の表層を今司るのは荒い僕なので、気にせずにミルネさんの言葉だけを考えていた。

一体何を、誰に説明するのは知らない。しかし、それ以外に何の望みもないというなら、それにすぎるしかない。

「どうにかして時間を稼がないとな」

しかし、どうする？

舌を噛んで蹲るアリスは当然の如く戦力外。唯一の男たる僕も、今の彼に対して足止めにもならないだろう。ついでに僕がその説明を受ける側なので、やはり戦力外通告。となるとミルネさんが、エイナさんがその役を買って出ないといけない。

だが、現状はその思考する時間さえ与えてくれないらしい。

黒の申し子の周囲から噴出した霧状の黒い負素が渦に吸い込まれるように、一点に集まり始めた。

それは森川さんの時に見た負素の弾丸だった。

しかし、森川さんのと比べると明らかに違う点があった。

密度、というべきなのだろうか。大きさはそれほど変わらないが、森川さんのが雨粒だとしたら、こっちはコンクリート片のように一粒の威力が高そうだ。黒光りしているそれはまさしく弾丸といった印象を受ける。

「時間さえ稼げばいいんですね？」

僕の脇にいたエイナさんは立ち上がり、もう一人の記録者を睨む。

「……ホントは、あんたにだけは頼みたくないんだけど」

「直樹さんに何かしたら『刃』で刻んであげますから、そのおつもりで」

「失敗したら記録者の恥として永久に記録してあげるから、安心しなさい」

先日と似たようなやり取りの後、一度だけ目を合わせて、各々するべき行動をとるために二人は離れる。

「緋島君。ちょっと物陰で内緒話するわよ」

口調こそはふざけているが目が切れ者のような月光に似た光を宿していた。

僕はそれに黙って従い、ふらつく体に鞭打って駆ける彼女を追う。やはり、僕の力が決定打になるのだろう。

もつとも、ただ改変を完璧に正せるという僕の記憶が何ができるのかはわからないけど、

「直樹さん」

呼ばれたのでほとんど反射的に振り向いた。すると、

コンタクトケースが飛んできた。

驚掴みでキャッチし、声を掛けた主を見た。

彼女は既に背を向けていた。

「エル。『破刃』、使いますからね」

「ええい！こなくそ！こうなりや自棄や！派手にやっただれアホが！」

エルさんの返事と共に、疾風となったエイナさんが赤い光を煌めかせながら負素の弾丸を切り裂いていく。

それを見届け、僕はミルネさんの後へ続いた。

ミルネさんに連れられて屋敷の塀に隠れることにした。

塀の向こう側で「ブンツ！シュ！」とか刀を高速で振っているような空気のキレる音がしている。

エイナさんには悪いがそれを今気にしている暇はない。

「緋島君。あの彼の改変を修正することは可能よ」

やけに自信たっぷりと言い切るミルネさん。

言いながら彼女は時々エイナさんの様子を塀から顔を出して確認していた。

それを見ていると仲がいいのか悪いのか、判断がつかない。さっきまでのやり取りを聞いていた僕としては彼女の本意が見えない。「お前さん、なんであの男はここまで来たと思う？ミルネの話を加えても、奴がお前さんを探していたことは間違いないし、何か目的があるはずだよな」

どこからか聞こえるエルの声。それはどこか親や教師のように答へ僕を導くような優しさを感じるものだった。それに僕は。

「おっさん。なんであんな俺らの会話に参加できるんだよ」

……。

何故が一瞬空気が死んだ。

「緋島君って、細かいことを気にする男だね」

「お前さん、こんな状況でもそんなこと気にすんのな」

え？今の発言そこまで言われないといけないことかな？

地味に傷ついた僕に、「俺様は今コンタクトなんで、片方だけエイナの目に付いてて、もう片方がそのケースの中にあるんだよ。だから会話できるんだよ」とエルさんはゆっくりと説明してくれた。解説ありがとうございます。

「それで、沢田さんがどうして俺を狙っているかって話だったよな」
ミルネさんが（こいつ強引に話を戻した）みたいな顔で絶句して
いたけど無視します。

「改めて考えるとおかしいと思わねえか？ 奴は存在を消している。
本当なら今見えているのも奇跡に近けえ話だ」

そんな状態で記録固定をすることはできない。

記録固定は改变者の目を見て、行うものだという。だから、幽霊
にも近い今の沢田先輩には通用しない。目を見るも何もない。本来
ならそこに存在しないモノの目をどうやって見ればいいのだ。

「だけど、彼は緋島君を探してきた。それはどうしてだと思っ？」
そこで何かピースが繋がったのだろう。

僕の中の記憶が噴流となって次々と溢れてきた。そしてそこから
僕は二つの事象と、それによって導き出された一つの結果を掴み取
った。

改变に影響を受けずに記憶を保持する僕。そして、改变者。両者
に共通するものは何か。

二つの出来事。それは僕の記憶と初めて対面した改变者のことだ。
僕はどんな改变にも、自身の記憶が変化することはなかった。そ
れは自分のことや周囲の人間も果ては全くの他人に関する改变にも
絶対不変だった僕の記憶。

そして森川さんの記憶。彼女は僕の周囲の情報や、クラスメイト
達の記憶も改变した。だが、森川さん本人は、僕と同じ正しい記憶、
改变前と変わらないを持っていた。

「記録者は、記録固定をする時に改变者の記憶を使ってるんだよな
？ なら、その改变者の記憶を俺が肩代わりすればいい。ってことか」
僕は導き出した推論を自信ありげに語る。

これが正しければ沢田さんを消滅から救うことはこれでできるは
ずだ。

僕の記憶を使って改变を正す。そうすれば全てが元に戻る。沢田
さんは世界に戻る。彼の恋人は再び病を抱え、命の灯を消えそうな

までに揺らぐ。

それともう一つわかることがある。

「あの人が俺を狙うのは、自分の改変を完全なものにするためか」
自分を消すという自殺にも近い行動をとった彼なら、それぐらい辞さないかもしれない。僕を殺してまでもその改変を修正されたくないのだろう。

彼は僕を、殺す気でここに来たんだ。

「全て正解だ。

付け足しておくと俺たち番号は歪みを見つけることしかできない。
だから、もつとも正しい形に修正するために改変者の記憶を記録し、それを元に改変を正す」

正しい形を記録するが故の記録者だとエルは語った。

「だからこそお前さんに記録者の力を備えさせたんだよ。もちろん
エイナ達がお前さんの記憶を覗いてもいいんだがな、それだといろ
いろと困るだろう？ これからの関係上、な」

氣遣わしげなおっさんの声は誰に向かれたもののなか。気にはな
るがそれを言えばまた細かいとか言われそうだね。まあ、それこそ
これから考えていくさ。

少し僕が黙ったためかエルの解説の間エイナさんの勇姿を窺って
いたミルネさんがようやくこちらを向いて、

「話を理解したなら早く全部元に戻して終わらせよ」

終わらせる？

何を終わらせるんだ？

僕は再び記憶の噴流の中に手を伸ばす。そして、そこからその記
憶を掴み取った。

夕暮れの生徒会室、どこか陰を宿した表情で沢田さんは語ってい
た。

「俺の彼女は小説かってやつを目指しててさ。それでこの間、新人
小説家賞に応募したんだってさ、それでいい結果になりそうだって

話してたよ』

『すごいじゃないですか。それはおめでとうございます』

『ああ、俺も喜んだよ。でもさ、彼女の病気も悪化した』

『え？』

『医者のもって、あと数カ月だってさ。夏まで、もつかわからない』

『……』

『終わっちゃうのかな。あいつの夢も、人生も』

茜色の空を見上げる沢田先輩の瞳が、それと同じ色の輝きを湛えていたことを僕は覚えている。

僕はいつしか呼吸を止めて空を仰いでいた。

青かった真昼の空も、今は塵状の負素がそれを埋めるように停滞している。

それは世界の終末を連想してしまうような光景だった。

僕は迷っていた。

終わらしていいのだろうか。彼の願いを。恋人の命を。

改変は正しいことじゃない。間違いない。知らない内に現実を変えられるなんて、その喪失に気付かない事は何よりもひどいことじゃないか。

でも、その中心の思いまで否定していいとは思えない。

『どうしても、元に戻さないといけないのか？』

僕はそう呟いていた。

『兄ちゃん。お前さんはそう言うと思ってたよ』

僕の言葉に反応したのはエルだった。

ミルネさんはどんな感情もない仮面のような無表情で僕を見つめていた。

「結論から言うと元に戻すべきだ。誰がどんなことをどういう風に変えたとしても元ある様にする。それが世界にもっとも影響のないケリのつけ方だ」

分かってるんだ。

いろんな人がいたんだろう。改變に関して、いろんな悲劇や喜びがあったことだろう。

だから、この人は特別だと、エルもエイナさんもできない。

僕だつて沢田先輩を特別視していいわけじゃないんだ。

僕は顔を伏せた。そうだよ。分かつてるんだよ。みんなが幸せになることが、世界にとっては不都合なんだ。

「……ふざけんなよ」

僕の心中に激情が渦巻く。それに従うように体中の血液が僕の意思とは関係なく、この身を動かした。

「ふざけんなよ!!」

それに僕は今、その激情に従うよう改變されていたのだ。

立ち上がり、僕は心情を叫びあげ吐露する。

「世界にとつて不都合だろさ!!でも、俺たちは人間だ。そんな正しいか間違いかで行動できる存在じゃない。それでも改變しろつて言うなら、俺が最も望ましい形に変えてやる!!」

僕は扉から飛び出した。

開けた視界、負素カーテンの向こう側にエイナさんの朱色の柄に白銀の刃の太刀と、黒い刀をぶつけ合う沢田先輩がいた。

沢田さんはエイナさんを突き放すように刀を押し込んだ。それに反応したエイナさんはバックステップで距離を取った。

立ち位置的に沢田さんが僕に背を向けることになった。その向こう側に右目を赤く輝かせたエイナさんが太刀を構え直していた。

どちらかが動き出す前に、僕は走り出していた。

僕に気付いたエイナさんが驚いたように口をポカンと開けてこっちを見ていた。

何か抜けているようで可愛い。そんな感想を抱きながらも、僕は数十メートルの距離を詰める。

エイナさんの表情を見て察したのだろうか、沢田さんが獰猛な笑みを浮かべながら振り返ってきた。

そして彼は刀を振る。

すると先程と同じ、負素の弾丸が周囲に量産され、僕目掛けて一直線に駆け抜けてきた。

それを確認した瞬間、僕は普段からは考えられないような速さでジグザグに移動した。

全ての弾丸が僕の体の紙一重の間で外れる。

そうしている間にも僕は彼に近づく。

思いつきり力を込めた脚で大地を蹴り、僕はまるで獲物を襲う野獣のように沢田さんに飛びかかる。

咄嗟に胸倉を掴み、頭を打たないように彼の体を引っ張った。

沢田さんは何か空想でも見ているような、呆然とした表情で僕を見ていた。

「……どうした？今なら記憶固定できるぞ」

「ああ、してやるよ。……でもな」

僕は口に出す。最小限の改変で全てを丸く収めることができるハッピーエンドの方法を。

「俺はあんたが自分を消した改変しか修正しない！

あんたは生きて恋人と一緒に生きろつ！！」

目を丸くして沢田さんは僕の瞳を見つめていた。僕はそれをしっかりと見返す。……というか今チャンスだよな？どうやったら記憶固定ってできるのかな？あのおっさんやり方を教えてないんだよな。みんな変なところで抜けてるよ。

僕は何とかしようとポーズをとってみたけど、何も起きない。どうしたらいいんだよ？

「……ふっ」

下から漏れた息が僕の意識を思考から引き戻した。

「お前、馬鹿だろうっ？」

なんか酷いこと言われた！！

「何だよ？そのガキみたいな理想は？」

沢田先輩は僕を突き飛ばした。

僕は信じられない運動神経を用いてバク宙を決め、見事に着地した。

ゆらりと立ち上がった彼は掌で顔を隠しながら肩を震わせていた。笑っていた。

「くつくつく！馬鹿かお前！」

手を退けた彼の瞳は、どこか強風にさらされている。ロウソクの火みたいな危うさを連想させる。

「俺はお前を消そうとしてたんだぞ！それを分かってんのかよ？」

「分かってますよ」

僕はどこかイラついたように吐き捨てた。

「その上に言ってるんですよ。分かってくださいよ！」

俺がそうするって言ってるんだから、さっさと生き返ってもらいますよ」

驚いたように先輩は目を開き、顔を伏せた。

その時、白い影がゆっくりと僕らの間を横切った。

それは折鶴だった。

本物の鶴のように、どこか優雅にそれは僕と沢田さんの丁度中間点辺りに着地する。

沢田さんは何かを察したのか、顔を上げ、すぐさまそこから飛び退いた。

すると、

無数の紙飛行機が沢田さん目掛け突貫していった。

紙飛行機とは思えない速度でそれは次々に突撃する。左右に軽快なステップを繰り返し、徐々に後退し、僕らの距離は離れていく。

あれはどこから来るのだろうと見ると、

野球のピッチャーのように振り被りビュンと空気を切る。その音は離れた僕にまで聞こえる。

一陣の疾風のように紙飛行機は飛ぶ。

その名投手（？）は金色の髪を揺らす、碧眼の少女。

ミルネさんだった。

「つてなにやってんだ!？」

「というかその投げ方は正しいの？」

「……」

何だかとても怖い顔で睨まれているのですが、どうすればいいのでしょうか？

「……私だってこうしたいわけじゃないの!ただ、時間を稼ぐ必要があるからこうしてるだけ!」

何故か知らないがご機嫌斜め。僕は何か粗相そそうでもしたのでしょうか？

と悩んでいると、

「ミルネが戦っている間、ちょっといいですか？」

そんな言葉と共に、いつの間にか後ろに回り込んでいたエイナさんが僕の肩を叩いた。

「あの?さっきの言ったことは本気ですか？」

エイナさんは申し訳なさそうに、僕から目を逸らしながらも、ちらちらと僕の様子を窺うように視線を向けてくる。

「当然だろう?」

「兄ちゃん。………そらあ、俺らにしたらそれは許されへんことや。」

俺は………改変を許されへん。お前さん、それやるゆうんやったら、俺様は止めんで?」

「………それでもだよ」

「そないか。せやったら、エイナ」

ビクと肩を大きく揺らし、エイナさんは黒と赤の左右色の異なる瞳で僕をじつと見つめた。

「エイナ。命令する。緋島直樹に与えた記録者の力を奪え!」

「……」

僕はエイナさんを真っ直ぐ見た。

もし、彼女がエルの指示通り動くなら、きっとこの方が手早い。彼女たちは人の目を見て力を使うのだから。

ははっ。

僕は知らずに笑っていた。

僕はなんだかんだで最後にエイナさんに決断を任せてしまっていた。

抵抗もせず、逃げもせず、なんだか悟ったように他人に放り投げていた。

カッコ悪いな。僕が決めて突っ走ってただけの話なのに、今こうして、考えずにエルさんたちに全部投げ出していたんだ。

エイナさんは視線を泳がせているだけだった。

「……やです」

微かに首を左右に振り、子供のように舌足らずに彼女はそう答えた。

「エイナー!!」

「嫌です。わたしは直樹さんの願い、否定できません。あの人の願いは悪じゃないでしょう？なのに、改変だからと言ってそれを否定していいのですか？」

どこか無感情の反論。でもそれは子供の我が儘のように聞こえた。多分、僕の言葉もそう聞こえるのだろう。

「願いは願いや。悪でも善でもない。人の願いなんてもんは善悪で判断できるもんやない！エイナ、お前は緋島の願いを叶えたいだけや。そんなん世界の歪みの前で振りがざすような理由ちゃうわ！」

兄ちゃんも、顔見知りの願いやからって改変を許容していいわけない！

いいか？改変ゆうんは、悲劇が嫌やからゆって無理やり劇の内容を変えるようなもんや。受けるべきメッセージを捨てて、空想に逃げるもんなんや。

人の思いを踏みにじるんや！緋島！お前さんなら一番ようわかる

やる!？」

悲痛なまでのおっさんの声に僕は心中で頷いた。
そう。分かる。

僕はそれで現実を否定してしまったのだから。

容易に、頻繁に変わる現実や過去になど、人は生きてはいけない。
泥の上に人は家を建てて住むことはできない。雨で緩くならない確
固たる土の上にこそ人は家を作る。

変わらない過去があつて、目の前の現実があるからこそその世界だ。
それは道を歩くことに似ている。後ろを見れば過去という名の今
まで歩いた道が見えて、自分の足が現実という名の大地に足を下ろ
している。

改変のあつた僕の世界は、後ろの道が違つ道に変わる。大地が波
のように揺れる。

そんな道を歩いていきたいだろうか。

僕は、そんなことを望めなかった。

僕は流れに身を任せ、ただ、道を眺めていた。

道は変わらない方がいい。大地は揺れない方がいい。

そんなの分かつてる。

「でも!それでも!」

先の道が、崖だったら?

そしたら、道を変えるだろう。

「人が死ぬ未来を変えることは許されないのかよおっ!」

僕は宙に向かって叫んだ。

僕の中に熱が生まれた。

それは不満であり、悲壮感であつた。そんな負の熱を吐き出すよ
うに僕は息をした。

「兄ちゃん。いい加減理解せえ!」

僕は目の前に壮年の男性がいるような錯覚を覚えた。声とイメー
ジの異なる彼は、息を吸い込む動作をし、

「悲劇なんてありふれてるんや！自分らは特別やない！！」

ああ、それは。

僕は叫んだ時に感じた熱が薄れていくのが分かった。
だってそれは。

僕も認めたことだったから。

『なんというか、理不尽だ』

『それ以外に言える言葉などない。その話こそが何かの小説にでもなりそうな不幸話。ありふれた不幸だ』

その時の思考が僕の中でフラツシユバックした。

僕は視線を迷わせ、茶色に焦げた大地を見た。

「人は不幸を乗り越えるもんや！悲劇を受け止めるもんや！それが当然なんや！」

エルの言葉が僕の中に染み込んでゆく。

認めてしまった彼の言葉は、熱を持っていた。

揺るがない信念と、どこか暗い感情。それは一体何なのだろう？

しかし、それを考える暇はなかった。

僕は元に戻すしかないのだろうか。彼がしたように、理不尽に元に変えるしかないのだろうか。

エルの言葉は、みんなにも聞こえたのだろうか、動きを止めてそれぞれ僕を見ていた。

エルが沈黙し、エイナさんが悲しげな瞳で僕を見て、ミルネさんは僕らの様子を窺いながら、紙飛行機を投げる体勢を維持して、アリスはしゃがみ込んだまま涙目でこっちを見て、

沢田さんはどこか諦めたように笑って僕と目を合わせた。

そして、

最後に空を覆う黒い負素が、深淵から漏れたような掠れた女性の

声を発した。

『聞くに堪えないわね』

ソレは徐々に形を成していく。

負素は砂の粒子のように流れ、僕らの前に姿を作る。

頭から顔、首を経て、胴体と腕を作り、最後に足の先の形を取り、一気に変貌する。

髪は漆のような艶のある黒に、瞳は宵闇のように黒く、肌は薄白く変化し、体には黒いワンピースのようなものを身に纏わした。

ソレは十代の少女の姿を現す。誰もが愛おしさを感じるであろう外見とは相反するように、体から漆黒の負素が噴出している。

「負素の……元凶」

ミルネさんの声が遠い。僕は目線を彼女たちに集中させていた。

彼女は沢田先輩をかばうように前に立った。

『サワダ。あなたは目的を果たしなさい。その機械を消して、自分の望みを叶えなさい』

ミルネさんは引つ提げたバックから新たにケースを取り出した。

エイナさんはまたしてもどこからか朱色の柄の日本刀を取り出し、負素の元凶と呼ばれた少女に向けて構える。

いつの間にか復活したアリスは、碧の瞳を少女に向けた。

黒い少女は負素を発し、そこから無数の黒い槍を生み出した。そして、その槍はこの場にいる人物全てに矛先を向けていた。

まさに一触即発という状況。緊張で足が震えそうだった。

エイナさんが飛び出すために足に力を入れ、ミルネさんがケースの蓋を外し、アリスがその瞳を細めた。対した黒い少女は槍を発射するサインだろうか、両の手を振り上げていた。

「もう止めてくれ!!」

突然の声に、少女たちはその動きを止めた。

僕らはその声の主に否応なく視線を集めさせられる。

最後に黒い少女が振り返った。

その声は沢田さんのものだった。

「もう、……いいんだ」

彼はむしろ清々しく笑っていた。

「……」

黒い少女は怪訝そうに沢田さんを見た。

「いいの？」

「ああ。……俺はもう、緋島を消せない。俺には全部わかって、それでも俺を救いたっていうヤツを消せないさ」

黒い少女はしばらく沢田さんの真意を確かめるように沈黙し、そして鷹揚に頷いた。

『そう。ではこれは蛇足だったのね』

「いいえ、俺が願ったことは変わりません。あなたは気になさらないでください」

ふっと、最後に沢田さんへ向けて、消えそうな微笑みを残し、彼女は風に吹かれ、崩れる砂礫の絵のように、自身が生み出した槍と共に負素の粒子となって消えた。

後に残ったのは、さっきまでと比べ僅かな量しかない負素と、憑きものが落ちたように笑う沢田さんだけだった。

少女たちはそれぞれ僕に目を向ける。彼女たちの役目はきつとこまでなんだ。

ここからが、僕の出番なんだ

「沢田先輩」

僕は彼にゆっくりと歩み寄った。

彼は僕を見つすぐに。

「なあ、もう全部元に戻してくれ」

彼の生気はどこへ行ったのか。そこにいたのはただ夢破れた後の若者だった。

「さっきの『人は不幸を乗り越えるもの』って言葉、誰だか知らないが、少し胸に来たんだよ。そうだよな。俺だって時間を掛ければ、乗り越えられたのかもしれない。でも俺は、そんな不幸が許せなかったんだよ。乗り越える時間も、受け止める時間すら、あいつには与えられないことが許せなかった」

分かってくれと彼は僕を覇気のない瞳で見つめる。

僕はただ、無心で首をゆっくりと縦に振る。

不幸を享受できる人間などいないだろう。誰だって抗う。抗って幸せを求めるはずだ。

「沢田先輩はきっと方法を間違えたただけだ。それ以外はきっと何も悪いことなんてないはずだ」

ありがとうと彼は声もなく呟いた。

「エイナ」

呼ばれた彼女は面食らったように瞼を大きく開いて驚いていた。

どことなく顔が赤いのだがどうかしたのだろうか？

「はい？」

でも返事は普通だったから僕はそのまま無視することにした。

「俺に記憶固定の仕方を教えてくれないか」

漸く聞けたよ。本当に長かった。

そっという苦労を知ってか知らずか彼女はあっさりと返してくれた。

「同調すればいいんですよ」

「どうでしょう？」

なんだかだいぶ難しそうだけど大丈夫なのかな。

「彼の眼を見て、彼の記憶のことを考えてください。そうすれば、今のあなたならすぐに見えてくるはずです」

何が見えるのか、と思いながらも言われた通り僕は彼の眼を見た。

そうして意識を彼の記憶に集中させる。

彼の記憶。

そう、それは。

全く意味のない行為だった。

『いや、だから彼《俺》存在消えてるんだけど？』

エル、エイナさん、ミルネさん、エス、アリス、沢田さんの総員によるツツコミに僕はちよつと心の中だけで泣きそうになった。

「べ、別に勘違いしたわけじゃねーからな！！ただちよつと忘れてただけなんだからな！！」

『なお悪いじゃない（ですか）！！』

ミルネさんとアリスが驚いて声を上げた。

「べ、別にみんなの空気が重かったから、ボケた訳じゃねーからな！！」

『それ素つてことじゃん！！』

「べ、別にみんなのことなんか好きじゃねーからな！！」

『なぜツンデレに！！』

「……私のドストライクです」

『そついうこと！？』

エイナさんが何かボソツと呟いたような気がしたが、ミルネさんたちがうるさくて聞こえなかったということをお知らせしたい。

「と、とにかくまずは俺の存在を戻さないと駄目だろう？な？」

何故か最後には沢田先輩がみんなをまとめるように提案する状況に陥ってしまった。

「と言われても、そうになると私は何のアドバイスもできませんよ？」

確かに。エイナさんも改变者の記憶が使えないという状況は初めてらしいし、どうすればいいんだろうね？

「お前さんの記憶を使えつて言っただろう？」

おっさんの言葉にはつとした。そついえば何回かそんなこと言わ

れたね。

え〜とつまり、僕の中の彼の記憶を思い浮かべて、ここからどうしたらいいんだろう？

「終わったようだぞ」

記憶を思い浮かべることおよそゼロコンマ23秒。エルさんはそう言ってしまった。

「早いなー！」

そもそもどうやってそれを察知したの？

「記録固定は記憶と同調したらすぐに終わる。疑うなら、そのあんなに記録固定してみればいいだろう」

おっさんのけだるそうな声が、一気に肩の力を抜いた。

そんなに難しいことじゃないのだろう。なら、後は彼の改変を戻すだけだ。

僕は沢田さんと向かい合う。

僕は瞳を逸らして最後に尋ねる。

「本当に、全部戻していいんですか？」

彼は一つ溜息を漏らした。

でもそれは陰鬱なものじゃない。清々しい、晴れやかともいえるものだ。

「いいんだよ。俺はきつとあいつに向かい合わなきゃならなかった。弱くてくあいつの傍で手を握ってなきゃならなかった。」

けど、俺はそれが耐えられなかったんだ。俺が辛いからあいつを救いたかった。

俺は自分のために全部変えたんだ。傍から温もりが消えていく苦しみから逃れるためなら、俺が消えたって良かったんだ」

彼はその時僕の瞳を見て、青空のように透き通った笑みを浮かべた。

「俺はもう、あいつから逃げない。そのために、戻してほしいんだ」
存在を取り戻した彼の言葉は、何よりも確かな心が込められている気がした。

僕はそれを確かめ、彼の瞳と視線を合わせた。

そして、彼の、真実を。

ある青年の改変に至るまでの経緯を。ヒストリー

僕は見る。

そこは彼の記憶の中だった。そこでは僕は沢田さんで、彼の視界、彼の思考、彼の感情が僕に流れ込んでいた。

僕に悩みを話した数か月後、時期としては森川さんの改変が起きる前日、彼は黒い少女と出会った。

彼の中には未だに僕の言葉が耳に残っていた。

（あれから、あいつはますます弱ってる。でも、俺はそんな姿を見なくて、あいつの元へ行くのが辛くなってる。こんな状況で、俺はあいつに向かい合ってるって言えるのか？）

彼の疑問が僕へと流れ込む。僕の一言が彼にこれだけの悩みを抱えさせたのだろうかと少し申し訳なく思う。

だが、そんなことは記憶の中の彼には伝わらない。そうして邂逅の時を迎えるのだ。

またしても夕下がりの学校。帰ろうとする彼の前に、

負素の粒子から形を成した少女に彼は腰を抜かしそうになっていたが、それを意にせず、黒い少女は聖母のような笑みを浮かべて、沢田さんに言った。

『あなたは現実を変えたいと思う？』

それはいつか聞いた少女の言葉と同じだった。

変えられるものならと、彼は答え、少女はなら変えたいと本気で願いなさいとすかさず返した。

『そうすれば、あなたの負素は答えるわアンチマター』

少女はそのまま消えた。

半信半疑ながら、沢田さんは願った。

それはきつと彼が疲れていたからだ。

そして、突然現れた不可思議な黒い少女に少しでも期待してしま
ったからだと思う。

（あいつを元気にしたい。あいつが病気で夢を追いかけれなくな
るのは嫌だ。隣で笑っていて欲しいんだ）

その思考の後、彼は。

体から負素を流出させていた。

湧き出る地下水の如く、負素は彼のからだのあちこちから溢れ、
そして空間を覆う。そして、全ての光を黒の霧が飲み込んだ時。

僕の隣に朗らかに笑う少女が立っていた。

僕は呆気にとられ、これが沢田拓斗の記憶の中だということを一
瞬忘れていた。

これは記憶だと自分に言い聞かせると同時に、彼の思考が流れてき
た。

（まさか？本当なのか？こいつは今、病院のベッドの中で眠ってい
るはずなのに。体ももつと細くなって、車椅子無しだと歩けなく
らい筋力も落ちているはずなのに）

彼の視線に移る彼女は、地に足を着け、スキップでもしそうな程
元気だった。

そして彼女は彼の腕にその腕を絡める。改めて沢田先輩はその腕
に驚く。

自分が知っている今の彼女ではない。

病気になる前の、元気なころの少女、そのままだった。

どうしたの？と先ほどから微動だにしない沢田先輩を不審に思っ
たのか、彼の瞳を覗き込む彼女を。

沢田先輩は抱きしめた。

折れないように、優しく。離さないように強く。

「ナオっ！！」

戸惑う彼女を彼はただその腕の中に感じていた。

でも、その人を僕はまた病気に戻してしまう。

それは、わかってるんだ。

でも、この手にある温もりを、

輝いてる命を、

消したくないと思うんだ。

場面は変わる。

黒い少女と対面する彼は驚愕しているようだった。

「な、なんでだ！？なんで元に戻るんだよ！？」

狂乱といった様子で彼は少女に胸倉を掴んでいた。

『世界の自浄効果よ。本来ある姿から、別の姿に変化させれば、元に戻そうとする力が働く。それが記録者と呼ばれる者たち。それは弾力に似てる。形を変化させよう負荷をかければ、反発してしまう。それが真理よ。そして、一定以上の負荷がかかれば壊れるだけ』

一体何が壊れるのか、そんな事を沢田さんが分からないわけない。壊れるのは時間。歴史、過去、そんな概念が消失してしまうのだろう。そうなれば時間は一定には流れず、荒い風のように読めないものになってしまうのだろう。

もつともそれが正しいのかは誰にも理解できないし、証明できないだろう。

怖いほど冷静に語る少女にも、彼は圧倒されていた。

「……そんな」

（もしも、そんなことを知っていたら、俺はどうしていた？）

彼の言葉と同時に思考が流れ込む。

もしかしたら、彼はこの時点で改変したことを後悔していたのかもしれない。

僕の胸に注がれる彼の感情は間違いなく悔いだったから。

『例えサワダがこのことを知っていても』

しかし、先輩の思考を否定するかのように、黒い少女は無慈悲に宣告する。

『あなたは彼女を再生したはず。そうでなければ、負素は扱えない。サワダはあの時、例え何を犠牲にしてもあの娘を助けたいと思わして、それでここにいるのよ』

負素を使ったことこそが、改変できたことこそが証明だと負素は語った。

彼は青ざめて自分の体を抱いた。

「いやだ。俺はもうあいつの弱った姿を見たくない！」

彼は思い出していた。日に日に弱っていき、ついには自力で立てなくなってしまった想い人の姿を。

またそこへ戻ることは、彼には耐えられないことだったのだろう。負素の少女は体を粒子状の負素に変化させながら笑う。

『なら、記録者に打ち勝ちなさい。そのために己の存在を改変するの』

ついてらっしゃいと負素は彼を呼び寄せる。

それについて歩く沢田さん。

彼らはいつの間にか高校の校舎に来ていた。

見覚えのあるような夕陽が空を茜に染めていた。

負素に導かれ、彼がやってきたのは。

ああ、そっか。

この日に繋がるのか。

そこは僕が勉学に励む学校の教室。僕のクラスの教室だった。

そしてそこには、一人掃除を今も続ける少年が一人いる。

それは、僕だった。

「おい、その君」

どうやら先輩は気付いていないのか、そう普通に呼びかけた。

「もう下校時間近いんだが、何をやっているんだ？」

それは義務感からの行動だったのだ。

思考を共有しているからこそ分かることだ。彼にとって、数日前に出会った僕という存在は、負素の元凶と改変という強烈な出来事に押し潰されていた。悲しいことに、僕はそれが分かってしまう。何だかそれを寂しく思う僕がいる。

彼にとつて僕など大した存在ではなかった。そういうことだから僕は彼をぼうつと見ていた。多分彼について思っているんだろう。今更ながら思い出す。そうか、彼は森川さんの改変で僕のことを忘れていたんだった。

「なんでまだ掃除？」

「先輩、日本語は正しく使いましょうよ」

「伝わりゃいいんだよ、言葉つてのは」

そんな真実を言い彼は善意から僕の掃除を手伝う。

そうしてものの十五分で掃除は終る。

そうして僕はコーヒー牛乳を飲む。

黄金と同じ価値を持つそれは、彼の味覚では普通のコーヒー牛乳だった。

「君はこのクラスの子か？」

コクリと頷く僕に彼は疑問を覚えた。

（だったら何で一人で掃除を、……つてのは聞かない方がいいのかな）

ありがたい心遣いだ。それは僕らの間に花の良い香りのような沈黙を齎す。

この時のこの沈黙は本当に心地よかった。

僕らはコーヒー牛乳を飲み終える。僕は先に教室から去ろうと、彼に背を向けた。

（ちょっと、気になるけどあいつも待ってるし）

彼はどうやら彼女と約束をしているらしい。しかし、そのままで見送るのもどうかと彼は考えた。

「君」

そうして彼は僕を呼び止める。

「それでも俺は生徒会の人間なんだ。もし何かあったらいつでも相談すればいい」

「ありがとうございます」

淡泊な僕の返しに彼は苦笑いをして流す。

「それだけだから」

どこか間抜けな顔をした僕を彼は追い抜く。

そして、去ろうとして僕の言葉に止められる。

「彼女とは上手くいっていますか？」

驚いた表情で彼は僕を見ていた。

（どうして知ってる？ あいつはつい最近病氣から戻ってきたつてのに）

彼の思考が表に出る前に、その時の僕はどこか呆れたように、「もう全校生徒の噂ですよ」と先んじる。

人の噂って速いのな、と彼は僕の説明に納得してくれたようだ。

そうして今度は恥ずかしさが現れたのかマジかゝとちょっと赤くなり、彼は照れていた。

「上々だよ」

爽やかにそう言い放ち、僕と彼は分かれた。

廊下を早歩きで進む沢田先輩の心境は恥ずかしいやら、嬉しいやらといういろいろとごちゃごちゃになっていた。

鼻歌を歌いそう中の目の前に、

『サワダ、覚えておきなさい』

負素の女王は唐突に姿を現す。

悲壮なまでの微笑みを浮かべ。

『あれが、最後の鍵よ』

「鍵？」

ええと少女は頷く。

『あれがわたし達の敵に回れば、あなたは最後の手段にでるしかないわ』

「最後の手段？」

『あなたが自分で自分を消すことよ』

「俺が俺を」

『そう、そうすれば最悪、彼女だけは元気になったままよ』

「……」

（つまり、自殺のようなものか）

その言葉を彼は冷静に受け止めていた。

つまり、元に戻す存在である記録者から、彼女を守るために死ぬのだ。そうすれば、彼女は助かる。

『それは、頭の隅に置いてて。それともう一つ、あなた、あの鍵のことを忘れてるみたいだから。それを思い出させてあげる』

黒い粒子が彼の周囲を竜巻のように多い囲んだ。

そうして、それは彼の体に吸収されていく。

彼の中に、生徒会選挙の直後の僕との出会いの記憶が流れてきた。

「あれが、緋島君なのか？俺はなぜ忘れていたんだ？」

もしかしたら最後の手段を聞かされた時よりも、彼は動揺していた。

『彼は存在を改変されて、周囲の人物の記憶から欠落したのよ。だから、あなたを含めて、改変した本人以外は、だれも覚えてないの』

これが改変。人の存在を変えろという事なのだと、改めて彼は痛感していた。もし、さっき言われた最後の手段を行えばどうなるか。それを想像し、彼は薄ら寒い思いを押し殺した。

『その改変を嗅ぎ付けて、記録者がすぐ近くまで来ているわ』

彼の浮かれた様子はそこまでだった。

汗が、彼の体中から湧き出た。

（う、失うのか？俺はあいつが残る日常を）

恐怖で体が震える。その震えは彼の汗を地面に落とした。

「どうする？あなた、いい加減自分を消す覚悟位したら？」

自分を消す？

そうか、彼はまだ自分の存在を改変していなかったんだ。改変したのは、僕がエイナさんたちに会う前ではなかった。

僕があの時あった彼はまだ、恋人を思う先輩だったんだ。
それが分かっただけでも、僕は収穫だと思える。

やがて彼は僕の不思議な力を知る。改変前の記憶を保持し続けるという、孤独を齎すこの力を。

そして、僕は確かに鍵となった。

シンジツを知り、そして、沢田さんと敵対した。

そうして、僕と沢田さんはエイナさんの邸宅の前で二人対面する。誰もいないことから考えて、ここはまだ彼の記憶か何かの場所だ。彼は覇気のない笑みを浮かべ、肩を竦めた。

「緋島、俺は結局なんもできなかったんだ。お前が言った通り、向かい合うことも、何を犠牲にしてもこの現実を変えることもな」

彼は笑っていた。負素の消えた青一色の空を見上げて、涙をたたえている。それはまるで、ロウの翼を失ったイカロスのようだった。
「何もできなかったわけじゃないでしょう？」

僕はそう返す。

「あなたは自分を消してまだ、彼女を救おうとしたじゃないですか。俺を消してまで、その変えた現実を守ろうとしたじゃないですか」

だから僕は、あなたが何もできなかったとは思わないんだ。

結果や手段がどうであれ、沢田さんは彼女のために行動できた。

行動した。それはきつとだれも否定できるものじゃない。

「でもそれは結局消える。元に戻ることで、俺のしてきたことはなかったことになる。俺の記憶も消える。だったら、一体これまでしたことに何の意味があったんだろう？」

すぎるように彼は僕に問いかける。

それは僕が改変に絶望したのと同じだ。

変わる現実で、その事実がなかったことになるのなら、思い出も何もかもないのと変わらない。

でも僕は知っている。

「あなたのやってきたことは無意味なんかじゃない」
彼は疑うようにキツと僕を睨む。

「だって、

あなたのやってきたことを俺は忘れない。死ぬまで覚え続けてやるよ」

間抜けな、意表を突かれたような顔。

そんな顔だって僕は覚えている。改変にだって消せない。そうだ。

きつと僕がこんな記憶を保持しているのはそういう意味があるんだ。

忘れない。人の願いを。想いを。
全てを忘れない。元の世界も、変わってしまった世界も、僕は全てを完全に記憶する。

それが、そのために僕は生きていけるんだ。

「お前には、救われてばかりだ」

子供のように無邪気に笑う。沢田先輩は、今から消えてしまう、改変の記憶を失う彼は笑っていた。

「それは違いますよ。俺は、あなたが自分で見つけた救いを否定した」

「いや、俺はもしかしたら、間違ってるって知ってたんだ。でも知らない振りをしていたんだよ」

本当にそうだろうか？そんなことを思っていたのなら、彼はきつと自分を消すことはなかったと思う。

僕が信じられないと彼の本意を知ろうと、彼の笑顔の奥底を見るために視線を彼とぶつける。

「信じられないかもしれないが本当だ。じゃなかったら……」

「俺は今、こんなに笑えてないよ」

はっとした。

彼はさっきと同じ、いやむしろもっと輝いた笑顔を浮かべていた。それは、彼女の事を僕が聞いた時に浮かべた笑みよりも、もっと強く、明るい笑顔だった。

そうして、笑顔を浮かべたまま、彼は空間と共に徐々に消えてゆく。

青い、エイナさんの左の瞳の色と同じ光に包まれ、消えてゆく。

僕は彼の笑顔を記憶に刻みこむと同時に言う。

「救われたのはむしろ俺の方です!!

ありがとうございますっ!!!!!!!!!!」

そうして。

その初夏の、僕の欠けた世界^{Feel the world}の出来事は幕を下ろした。

目を覚ますとそこはつい数日前に見たベッドの上だった。

いつかと同じように夜だった。星明かりしか照らすものがないその寝室は、どこか神秘的に光り、さっきの夢の続きかと思えるようだ。

「起きましたか？」

隣には眠そうに目を細めながら微笑む少女がいた。

黒いワンピースのような寝巻を着たエイナさんだった。

となるとここは彼女の邸宅なのだろう。ご丁寧にも数日前に使った部屋に僕は寝かされていたのだ。

「僕は一体？」

あれ？そういえば口調が戻ってるよ。いつの間に。

「眠っちまったんだよ」

答えたのはバタバタと跳ねるベッドの上で本。どMとしか思えないベルトをぐるぐる巻きにしたその本はエルなんだろう。僕は上半身を起こ上げらせ、僕の足元あたりで跳ねるエルを一瞥する。そうしてエイナさんに向き合う。

「終わったの？」

彼女はゆっくりと頷く。

「全て、戻りました。沢田拓斗の改変は記録固定でこの本に記録されました」

彼女はエルを指差す。

「本に記録する。文字として、正しい世界を記録するんだったね。君たちは」

「はい。ですがそれだけではありません。私たちは改変者が実現しようとした世界も記録して残します。そうしてただ全ての記録を世界に還元する。それこそが私たち記録者です」

「そう」

僕はまた上半身を倒れさせ、仰向けに戻る。

なんというか、全身の力が抜けたような気がする。

ははは。

自然と笑みが零れる。それを彼女はただ不思議そうに欠伸をこら

えながら見ていた。

僕だけじゃない。彼の努力を、覚悟を、願いを、その本は記録している。エイナさんもきつと知ってくれている。

それだけで、とても楽な気分になれた。

「ありがとう」

僕はスツキリとした気分でそう言った。

「きつと君が僕を改変者かもしれないって疑ってくれたおかげだよ。僕は改変で変わる世界が、もう嫌になってたんだ。あのままだったら、僕はいつか自分で死を選んでたかもしれない」

それはとても素直な僕の心情の吐露だった。

「でも君に会ったから、君が真実を教えてくれたから、僕はきつとこの世界で生きていけると思う。だから……」

心の底から僕は笑う。それはいつ以来だったのだろうか。

そう、それは多分。

あの時、あの夏。

初めて経験した改変で、幼馴染の少女が消えた時以来なのかもしれない。

「ありがとう。エイナさん。君に会えてよかった」

「……………」

そうしてしばらく沈黙が続く。

つて、いくらなんでもノーリアクション過ぎない？

と僕は疑い、天井から視線を隣の彼女へ向けると、

「……………すう」

静かな呼吸音を発し、椅子に掛けたままエイナさんは眠っていた。

「……………」

マジっすか？

こんな素直に何か言うの久々なのに、全部終わった解放感から、ハイになって恥ずかしいことを言ったのに眠りますか？

脱力して、呆れを通り越した笑みを浮かべた。

「兄ちゃん。許してやってくれ。こいつ、自分が記録者の力を与え

たせいで眠ったままなんじゃないかって心配してさ。すぐに力を回収したんだが、お前さんも起きないし、俺様も流石に参っちまったぜ」

なるほど、だから僕の口調が戻っているのか。と全く気にする必要がないであろう細かいことを納得した。これ、ばれたら多分怒られるね。

バタバタと地に落ちた蟬のように彼は僕の元まで張ってきた。

「今、物凄く失礼な描写しなかったか？」

人の状況描写まで読まないでください。

「ホンマすまんかったな。お前さんには迷惑かけてばかりだ」

「何がです？」

「普通に考えて、知り合いの改変者とぶつけるってのは流石にマズかったわ。俺様としたことが、馬鹿な事をしたもんだ」

「でも、僕が彼を止めないと歪みが酷くなるかも知れないんでしょう？」

それでもだ、とエルはやけに真剣な声色で言う。

「それでも、きつかったろ？」

「……そりゃ、ちよつとは」

だから、僕は、最も都合がいいように改変しようとも考えた。でも、沢田さんはそれを否定した。僕が板挟みになるのを見ていられたかったのだろうか？今更ながら、彼にそれを尋ねたほうが良かったかもしれない。

しかし、そう思ったのはほんのちよつとの間だった。

彼は戻ることを望んだ。元に戻してくれと僕に頼んだ。

きつとそれが、大事なことなんだ。

「僕は結局何もできなかったんじゃないかって思います」

「……」

彼は無言で続けると示したような気がした。

僕はそのまま伝える。

「多分沢田さんを動かしたのはエルの言葉です。『人は不幸を乗り

越えるもの。悲劇を受け止めるもの。それが当然』ってやつ。彼はそれで、受け入れる決心をしたんだと思います」

僕もそれに共感した。沢田さんも僕も結局どこかで自分は特別だと思っていたのだろう。そうして、どうして自分がと悩んでいた。愛する人の死は少くない。

人の記憶から忘れられることも少くない。まあ、僕の場合は本当に特殊なことだけだ。

「でもよ。最後にはお前さんの行動がものを言ったんじゃないのか？」

「そうですか？」

「ああ、お前さん、あいつに消されそうだって知っても、それでもあいつを救いたって願った。それがあいつの心を動かしたんじゃないの」

どうなのだろう？僕はその辺り自信がない。

「わかりません」

「ひゃひゃひゃ。それでいーんじゃない？人間なんて思い込みと誤解で理解し合ってたんだ。お前さんがわからないのも当然だろうよ」

認めたくないけど、彼の言葉にはどこか説得力があった。

「そうかも知れませんか」

僕はエイナさんを部屋に送ってから眠ることにした。

とりあえず椅子に掛ける彼女を背負っていこうと、彼女を椅子から背に移した。

その体の軽さや柔らかさに一々驚いたけど、エルの手前何か不審な行動をして、後で報告されたくもない。なるべく心を無心にして彼女を運ぶ。

廊下を過ぎて、大きな書架の向かいの彼女の部屋の前に立ち尽くす。

「兄ちゃん？何してんだよ」

おっさんがバタバタと跳ねながら後を追ってきた。どうでもいいけど、あんたのその体（本）、沢田さんの記録があるんだろう？雑

に扱っていいものじゃないだろう。

そんな僕の怨念を籠めた視線をもともせず、彼は僕の隣でバタバタ運動を停止した。

「なんで部屋に入らないんだよ？」

「いや、勝手に入ってもいいのかな？」

「いいだろう？」

おっさんは何のためらいもなくそう言い切り、飛び跳ねてノブに取りつく。そして巻きつかれた革ベルトを器用に使い、扉を開いてしまった。

「ほれ、入んな」

あんたの部屋じゃないでしょう。とツツコミながらも、疲労感が強く、早く彼女をベッドに下ろしたかったので、バタバタと跳ねるおっさんの後に続いて、エイナさんの部屋に侵入してしまった。

彼女の部屋はともシンプルだった。

月光が差し込むベッドに、衣装ダンスが端に整然と並べられていた。女の子がよく置いておくであろうぬいぐるみやクッションといった小物は全くなかった。カーテンも壁紙も、果ては絨毯まで白の系統で纏められ、どこか病院を思わせる。しかし、どこからかする甘い香りが、そのイメージを払拭し、どこか王宮の寝所を思わせる神々しさを醸し出していた。

「ここが、エイナさんの」

否応なく背中に感じる少女の温度を意識してしまうが、頭を振り、彼女のベッドを隣まで近づいた。

そして背を向け彼女をゆっくりと下ろす。

そのままだと、座ったまま倒れたように、足がベッドから出てしまふので、意識しないようにしながら彼女を俗に言うお姫様だっこで少し位置を調整する。

そうして掛け布団を彼女に被せた。腕が酷く疲れていた。

やっぱり背負ってよかった。お姫様だっこでここまで来ていたら、絶対途中で疲れて休んでいただろう。

そうすると、ふと彼女の顔が目の前にあった。

掛け布団を被せて、シーツの皺を伸ばすと、自然とこの大勢になつてしまつていた。

ちなみにどんな姿勢かというと。

僕が彼女を襲おうとしているように彼女の上に四つん這いで、しかも顔を近付けている。他人が見たら間違ひなく通報ものだ。

早く戻つて寝よと、熱い顔を左右に振り、足をベッドから下ろして彼女から離れていく。

しかし、最後に右腕をベッドの上で突いていたのが悪かった。

ガシツと何かに右腕を掴まれた。

何かといわずともエイナさんであることは知れている。問題はなぜ彼女が僕の腕を掴んだかだ。

恐る恐る彼女の顔を窺うと、すうすうと穏やかな寝息を立てて、眠つていた。

ということは無意識で僕の腕を掴んだの？そんなことあるの？

ゆっくりと彼女の左手を放そうともう片方の手で彼女の指を放していく。

「……うつん」

え？起こしつちやた？

僕が身構える中、その少女は口をもごもごさせ。

「もう、食べられません」

完璧な寝言を発した。

いや、確かに寝言の定番だよ？でもさすがに本当に聞く時が来るとは思つてなかったよ。うつん。

僕は苦笑いを浮かべながら彼女の手から逃れることに成功した。肩をすくめながら僕は背を向けた。

「……さよならじゃ、ないですよね」

驚いて振り返ったが、そこにはさつきと変らないまま、穏やかな寝息を漏らすエイナさん。

今のはわざとか、それとも寝言なのか。

どっちでもいいけど、問われた以上答えたい。

僕は彼女の枕元に近づいて、顔を耳元に、そして、

「これからもよろしくね」

そう言った。

彼女の寝顔は動かなかったが、幸せそうに微笑んだように見えた。きつと気のせいだろうけど。

「お休み」

扉を閉めるときおっさんがそう言った。

「お休みなさい。また明日」

そう僕も挨拶を返した。

僕に宛がわれたその部屋の扉を開くと。

白いキャミソールを着た金髪碧眼の少女が僕のベッドに腰かけていた。

「ミルネさん？」

「こんばんわ。来たらいないんだもん。びっくりしたわ」

彼女は悪戯っぽく笑う。どうせどこに行つてたかも見通されているんだろうなと僕は何だか達観した気分になった。

「どうしたんですか？こんな時間に」

「うん。ちよつと恨み事と別れの挨拶を言いに来たの」

別れと聞いて僕は少し固まる。さっきはさよならじゃないかと聞かれて、今度は別れてきましたか。

「ま、突っ立てないで座れば？」

「一応僕が眠る部屋なんですけどね」

「男がそんな細かいこと、気にしないの」

茶化しあいながら僕はミルネさんの隣に座った。

「まずは恨み事ね」

彼女は宣言して、急に怒ったような、それでいてホッとしたような奇妙な表情で僕を睨んできた。

「よくも負素の元凶を逃がしてくれたわね」

そう言えば彼女は負素の元凶を探している人だった。僕がもたもたしていなければ負素の元凶を捕まえることができたのかもしれない。

そりゃ、恨み事の二つや三つ、言いたくなるよね。

「ごめん」

「別に怒ってるわけじゃないの」

ミルネさんはからからと笑った。

「ありがとうって言いたかったの」

「え？」

意外なセリフに僕は彼女を凝視する。

月光に照らされた彼女はどこまでも自然体で、嘘を言っている様子はない。彼女は一体何が言いたいのだろう？

「もちろん悔しいよ。逃げられたこと。絶対捕まえて、それでみんなに私たちの考えが正しいことを知らしめてやるの。でも、今回みたいなのは無理にしても後味悪いでしょ？」

パチツとウインクをする。ちよつとドキツとした。

「だから、ありがとう。」

今、とっても気持ちがいいの。なんていうのかな？達成感とか、そんな感じ。多分直樹君がいなかったらこんな気持ちにもなれなかったよ」

本当に明るく、太陽みたいにミルネさんは笑った。それは僕が見てきた彼女のどの姿よりも魅力的だ。雪みたいに白い肌も、サファイアみたいな蒼い瞳も、金糸のような金髪も、全ては彼女のこの笑顔を引き立たせるもののように思える。

「それと、もう一つ。お別れの話ね」

彼女は一つ咳払いをした。そうしてむしろ明るく言う。

「私は引き続き、負素の元凶のあの女を追いかけてたいと思います！」
ビシッと敬礼し、おちゃらけて言う彼女だったけど、そこには誰も引き止められないような覚悟を感じた。

もちろん僕も、引き止められそうになかった。

「……そっか。折角仲良くなれたのに」

残念だと僕は肩を落とした。エイナさん、ミルネさん、アリスともこれからも過ごせるとどこかで思っていたけど、違う。

彼女は負素の元凶を追う記録者で、アリスだって、多分僕以外にも目的はあるんだろう。

いつか、終わってしまう関係なんだ。

「って、何今生の別れみたいに思ってるのよ！！別れつつって一時的なものよ！！」

「え！？そうなの？」

「もちろんよ！！日本は私のお気に入り国だしね」

まあ、ゲームもあるしね。と僕はアキバでの彼女のはしゃぎっぷりを思い出した。

「でも、ずつという訳にはいかないの。アレを追いかけるのは私の使命だからね。あれが出てくるまで、また世界中を飛び回って来るわ。もう今日の飛行機でカナダに飛ぶの」

今日行ってしまうのか。あまりに急だけど、この行動力はミルネさんらしいのかもしれない。でも、そのらしさをもっとよく知りたかった。それぐらい分かるようになるくらい一緒に過ごしたかった。「じゃあ、ちよつとの間グッバイってこと？」

「うん。でもまた来るよ。エイナにも会いたいしね。……それに、あなたにも」

「え？」

ニカッと彼女は子供っぽく笑いぐつと僕の服を引っ張り、

僕の頬と、彼女の唇が触れた。

え？これってキス、だよな。マウス・トゥ・マウスではないけれど。なんで、どうして、挨拶？それとも、

啞然とする僕から逃げるように赤く上気させた顔をした彼女は扉

まで早歩きで向かい、

「欧米ではキスは挨拶だけど、私のは本気だから」と宣言した。

.....。

彼女は指で銃の形を作り、それを僕に向けた。
See-saw-winch-lll aim for your bridee!

「またね！私はあなたの花嫁の座を狙っているからね！」

「お元気でお過ごしください」

「あ、エス、いたんだ」

「いましたわよ！！」

そんな素のやり取りを残し、ミルネさんとエスは去って行った。

僕は呆然としながらも、彼女の唇の感触が残る頬を撫で、

「最後、ミルネさんなんて言ったのかな？」

と一人疑問に頭を悩ます、英語力には自信がない僕だった。

そうして、悶々としながらも迎えた木曜日の朝。

そう。まだ木曜日なんだよね。

ミルネさんに会ったのが確か月曜日の夕方で、森川さんとアキバで遭遇したのは火曜日、そして機能が水曜日。

しょーじき、まだ学校が二日も残っていると考えるといい加減やになっってくる。

しかも、今日はまたしてもエイナさんの邸宅で過ごしたのだ。美能山という低い山にあるこの邸宅から自宅までは学校を挟んでちょうど反対側。遠いよ。遠すぎるよ。

文句を言っても仕方が無いので、僕は大人しくベッドから起き上がる。

僕はベッドの片づけをしてからリビングへ行くために部屋を出る。ってリビングってどこだっけ？

この屋敷に寝泊まりしたのは二回目だけど、まだそんなに場所がどうこうと分かるほどではない。それだけこの屋敷は広いんだよ。

取り敢えず一階のまでは下りただけ、ここからどうしたらいいんでしょう？

というか、エピソードっぽいのに何でここまで迷走してるんだろう？

そう本気で疑問に思ってから、激しく後悔した。

「……僕もメタだし」

もうメタは止めるというツツコミはできないかもしれない。

結果から言うとりビングにはその後すぐに着いた。

アリスが僕を呼びに来たからだ。

僕の眠っていた部屋へ行く彼女と僕はホールで再会した。

話を聞くとエイナさんが朝食を作ってくれているそうで、もうすぐできるから呼んで来いと言われたらしい。

白い法衣を機嫌よく揺らす彼女を、僕は半歩下がって追う。

「ひじまサンはー、これからの事をー、考えてますかあー」

相も変わらずムカつく、もとい、苛立たしいゆったり口調で話すアリス。僕が提案したんだけど、もう君の舌を噛む事とかどうでもいいから止めて欲しい。

「これからって言われても。僕は別に」

何も考えていなかった。

アリスたちに改変を戻す協力をすると言った以上、僕も改変が起きる度に今回みたいに記憶固定を手伝わなきゃならないのだろう。

でもさすがに世界中の改変に対応はできないだろうなと思うと同時に一つの疑問が浮かんだ。

「ねえアリス。世界で改変っていくつ起きてるの？」

僕の身近でも一年で3・4回ほど、その中で僕自身に関する改変は少ないけど、それぐらいは見かける。

世界全体でなるとどうなるのか、想像できなかった。

「そんなの数えきれないですよ」

その言葉を言う時だけ、彼女は振り返って僕の瞳を見た。

僕はその透明過ぎるヒスイ色の瞳に、あまりにも黒い何かを見た気がして思わず足を止めた。

だが、すぐにターンしてアリスは踊るようなステップでまた進み始めた。

「改変は無数に起きています。ワタシたちが関与できないまま、世界に固定された改変も多々あることでしょう。かろうじて元に戻したものも多々あります。それだけ多くの人が今の世界に不満を持っているんじゃないかね」

彼女はなんてことなくそう言ってしまう。昨日の夕食の話でもするように。きつと慣れているんだ。僕以上にこんな世界の現状に。「そんなにあるんじゃない、僕の意味なんてあるの？例え、僕が世界に影響を出さずに改変を正すことができても、他の改変に飲み込まれてしまうんじゃないのかな？」

言いたくないけど、僕はそう言った。

僕は僕のことしかできない。当然のことだ。僕にできるのは、改変を見つけるだけ。その改変と、変わる前の世界を記憶することだけ。すべての出来事を漏らすことなく、しかも正確に記録するような、完璧な記録装置には決してなれないのだ。

彼女はいつの間にかステップを止め、立ち止まっていた。

僕は彼女の半歩後ろで止まった。

「分かってますよ。ワタシにも貴方にも、できることなんてたかが知れたことなのでしょう。でもそれを知ってるからって、できることをしない理由にはならないじゃないですか」

早口で彼女は淡々という。それは僕が言ったことを否定したいように、僕には聞こえた。

でも、納得もできた。

見ると、彼女は肩を震わせていた。何かを堪えるかのように、真つ暗な中、出口を探す迷子のように思えた。

理性ではアリスの言葉は受け入れられない。本当に無意味なこと

をできるほど、人間は優しくも強くもない。それは僕も同じだった。
でも。

僕は彼女の震える両肩に手を添えた。

彼女は一瞬、ビックと必要以上に驚いたけど、その内ずがるようにその背を僕の体に預けた。

小さな体は想像していたよりも軽かった。それでも、どこかこの手に収まる両肩は、とても遅いように感じられた。

「……君の言う通りだね。僕らは僕らのだけできることをするだけなんだよね」

「……、はい」

彼女はそのまま体を反転させ、僕の胸に顔を押し付けた。僕はそのまま彼女を抱きしめていた。

それが、きつと一番彼女を支えるのに適していると思ったから。

「ありがとうごひゃひまひゅ」

最後に噛んだのはアリスらしい。と僕は声を押し殺して笑った。

さっきまで震えていた少女を励ますことができるくらい、僕は優しく、そして強くありたいと思う。

とてつもなく、例えば授業中、見当違いの回答を自信満々に発言したみたいな気分だった。

「ワタシはー、しばらくここにー住ませて貰うことにーなりましたー」

「へー。それって調律者の仕事関係？」

彼女ははつらつとした外見相応の笑顔で頷いた。

「なんと言つてもー、ここは負素の量が多いですからー。エイナが記録固定した分の負素でもー結構な量ですー」

さっき噛んだこともあってか、何度目かわからないゆったり口調。

どうしてあげましょう？ やっぱり何か苛立つのですけど。

「とにかくー。そんなわけなのでー、エイナさんともどもよろしく
願いますー」

一体何を願ひされたのやらと思ひながら、僕は曖昧に微笑んで
見せた。

……日本人の十八番だしね。

時間は流れ、夏休みのとある日。

夏休みといつても今日は登校日。たいしたこともしないのに、僕
らはだらだと夏休みボケした体を引きづって登校する。

中村はそのテンションの高さも通常営業で、暑苦しいことこの上
ないのだけど、久々に会ったためか僕もつられて普段以上にハイな
テンションでヤツに付き合った。

森川さんは海に行ってきたと話して、記念写真を僕に押し付けて
きた。「あげる」って言われたから貰ったそれは、布地の面積が明
らかに少ないだろうとツツコミを入れたくなるような、際ど過ぎる
ビキニ姿の森川さんが写っていた。これを渡して彼女は どうしたい
のだろう？

そうして、

浮かれたまま登校日は過ぎただけど、

僕はその日、彼を見かけた。

大掃除を終えて、僕は保健室に配備されたモップを返却しに向か
った。

クラスメイト達には先に帰っていいかと聞かれたので、僕は頷い
ておいた。まあ、僕がジャンケンで負けた結果なのだから、大人し
く受け入れるしかない。……最初はグーの時は今度からグーをもう
一回出すようにしておこう。

僕がトイレから手を洗って出た時、生徒会室に入る彼を見かけた。
あの初夏以来、沢田拓斗さんは纏まった休みを取ったらしい。

誰が言った訳でもないのだが、学校で、生徒会の行事にも彼の姿を見かけなかったのだから、それはおそらく正しいのだろう。

多分、その理由は分かる。

僕は生徒会室の前に立った。

ガラス越しに見えるその部屋には、沢田さんが一人パイプ椅子に腰かけているだけで、他には誰もいなかった。

僕は合言葉を言うかのように、

もしも神様が七日間きつちりと仕事をしていたらどうなっていたんでしょうね？

そう口に出した。

?? 終幕（後書き）

一章は完結となります。

しかし、これだけでは（作者が）消化不良なのもう一話だけ。
終わった後の夏の話を投稿します。

EX 夏にきたる未来

もしも神様が七日間きつちりと仕事をしていたらどうなっていたんでしょうね？

なんて勢いで話しかけてしまった僕は、さっそく青くなって後悔した。

「ごめん、君誰だっけ？」

なんて困った顔をされてしまったのだ。

彼は読んでいた冊子を閉じ、パイプ椅子から立ち上がる。

まあ、忘れてたよ。沢田さん。

というか改變していた時の記憶を忘れているなら、僕と彼が出会ったのは生徒会室で彼の愚痴を聞いた一度きりだった。そんなの忘れて当然だった。四か月前の話だよ？

「ええ〜っと」

嘆きたいのはやまやまだけど、この状況を何とかしてからだ。

といつても、助けは無い。どうする僕？どうしよう僕？

「うん？なんかその困った顔は覚えがあるぞ。ちよつと待っててくれ」

彼は眉間を抑え、うーんと考え込む。

「そうか、君はいつぞや俺の愚痴を聞いてくれた緋島直樹君か！」

なんで！？なんで僕の困り顔で思い出せるの？もしかして、ぼくの印象って困り顔の少年ってことだけなの？

「どうしたんだよ。人気者！」

彼は極めて明るく、逆に僕はどう接していいのかわからずに閉口する。

「なんだよ。折角前とは違って明るいイメージで話そうとしたのにさ。君がそんなに困ってくれると、こっちも困るんだが」

だったら、困らせるようなことしないで！！とツツコんだ方がいい

いんだらうか？

「ええと、偶々見かけたので、声を掛けたんです。迷惑でしたか」

「うーん、迷惑つつうかビックリした。まさか覚えてくれているとは思わなかったからな」

まあ、あれだけのことがあったんだから、こつちとしては忘れられない。

それに、忘れることなんて絶対にない。

まあ、この彼には覚えのないことなんだろうけど。

「その、聞いていいですか？」

「何をだい？」

そうだ。僕はきつとこれが聞きたかったんだ。だからこそ、彼に声を掛けた。それを忘れちゃいけない。

「彼女さんのことです」

途端に暗い影を帯びる彼の横顔に、僕は何だか悪いことをしたなと反省した。

「先月。七月の二十一日に亡くなったよ」

「それは、なんというか。ご愁傷様です？」

「なんだよ『？』は」

「いえ。こういう時なんて言っていいのかわからないので」

泣き笑いのような表情を浮かべ、沢田さんは声だけで笑った。

そして僕に背を向けた。

けどそれは仕方のないことだ。彼の傷を決るようなことをいったのだから。

僕は黙ってここを去ろうとした。

スライドの扉に手を掛けた瞬間。

「待ってくれ」

と彼は僕を呼びとめた。

もちろん僕は止まった。そうして振り返ると、彼はさっきまで読んでいた冊子を僕に手渡した。

「……これは？」

彼は真つ赤な瞳で笑った。

「ナオが、……俺の彼女が病床で書いた最後の作品」

途端に、手にある冊子が鉛のように重くなつた気がした。

「ええっと、これをどうしろと？」

「貰つてほしい」

「ムリです！ムリです！さすがに無理です！！」

高速で僕は首を左右に振る。

そして冊子を押し返すように彼に渡す。

「そうかい？いつまでも俺が持つていていいものじゃないと思うんだけど」

だからと言って僕に持たせてもいいものじゃないでしょうが！！
「でも、俺はもう一字一句覚えるぐらい読み込んだし、他の人にも読んでほしいんだよ」

「だったら、出版社に送った方がいいんじゃないんですか？そっちの方が沢山の人に読んでもらえますよ。それに彼女さん作家賞をもらえるような人だったんでしょ？なら断然そっちの方がいいと思います」

彼はふつと苦笑し、僕に温かい視線を向けた。

「それについては俺も、ナオも、家族もみんな反対したんだよ」

「え！？」

どうしてだろう。そう疑問に思うと同時に、反対したことを勧めてしまったと僕は少し落ち込む。

「出版社はさ、『薄命の作家少女の遺作』って銘打って売り出そうとしたんだよ」

……。

僕が何とも言えず固まっているのを、彼は苦笑で見守る。

「確かに売れそうではあるけどね。でも、それだと彼女の書いた物語より、境遇をどうか言われそうで、ナオは反対したんだよ。俺たちも、あいつの意思を尊重して、本にするのは諦めたんだ」

自分より物語を見てほしい。そう彼女さんは願ったのだろうか？

どっちにしる赤の他人の僕には何とも言えない。

「だから、こうして手渡しで広めていくことにしたんだよ。いつか、本当に読みたい人の手に届くようになってね」

彼はそう言って冊子を僕に差し出す。後は僕がそれを手に取るだけだった。

僕は手を伸ばして、それを掴もうとして、やっぱり止めてそれを押し戻した。

彼は意外そうに瞬きを繰り返した。

意識して僕は笑う。

「……やっぱり受け取れません」

僕にその本を受け取る資格はないと思う。彼女を、その夢を絶つたのは僕なのだから。

改変を正し、彼女を病の淵へ再び追いやったのは僕なのだから。

「この本をもつと必要にしている人がいるはずですよ。だから、僕は受け取るべきじゃないんですよ」

どう思ったのだろうか、彼はゆっくりと首肯し、その冊子をまた僕に差し出す。

「なら、せめて読んでやってくれないか？」

僕は首を捻る。もらうのはダメだけど、読むのはOK？それはちよつとおかしいよね。やっぱりここは断るべきだろうか？うん。

「俺がこうしてナオの意思を尊重できるのは、君のおかげだと思うんだ。だから、君には読んでもらいたい。彼女がどういう風に世界を見ていて、この世界をどう思ったのか」

そこまで言われて、誰が断れるだろうか。

「……わかりました。じゃあ、しばらくお預かりします」

僕は、一時的にその本を受け取った。

それが、どんな物語だったか。どんな話だったかは、説明しない。だけど、最後に手書きで書かれたこの言葉だけは伝えたい

『世界はこんなにも、美しく、優しい』

彼の恋人が、どうしてそう感じたのか、僕にはわからない。こんな不完全な世界をそう思えたのか、想像もできない。

改変がある世界を知らないからなのか、あるいは僕が、世界の美しく、優しい姿を知らないだけなのか。

どっちにしろ、僕はそれを知りたいなと思う。

本を預かり、生徒会室を後にした僕は急いで教室へ戻る。

少し息を切らしながら、扉を開いた。

誰もいないはずのその教室に、一つの人影があつた。

それは綺麗な黒髪をしていて、僕の高校の女子の制服を着ていた。

「直樹さん」

僕はその人に笑いかける。

「遅くなってごめんね」

「本当に待たせすぎです。今日は隣町まで行くんですからね。わか
つてるんですか？」

「うん。ごめんね。お詫びに駅前でクレープ奢るから」

「食べ物で女性を釣ろうとは、浅はかですね直樹さん」

ちよつと後ずさるその人は、きつと嬉しそうに笑っていることだ
ろう。見えなくてもそれぐらいは僕もわかるようになった。無感
情なその声に弾むような喜びが宿っていることも分かる。

鞆を取って僕は先に走り出す。

「に、逃がしませんよ直樹さん！！」

彼女も僕を追って駆け出す。

もしかしたら、これが沢田さんが失いたくないと思えたものなの
だろうか。

そんな考えを胸に秘め、僕は彼女を呼ぶ。

「早くしなよ。エイナ！！」

彼女は。

エイナ・ヴァルキュリア・ジウトム・テーゼ。

不完全で欠けた世界を補う、記録者だ。

そして僕は。

緋島直樹。

全てを記録する完全記憶装置。パーフェクトマダー

誰かの願いも、過ちも、全てを記憶し、伝える存在だ。

R e p o r t

Title：今回の騒動における報告

● 緋島直樹

今回の騒動における最大の非常点。

改変の前の記憶を保持するという謎の能力により、改変者と疑う結果として我々の存在を教えることになってしまう。

対処法として改変で、その記憶を消去しようと試みたが失敗。

止むを得ずこちらの仲間として引き込むことに。

しかし、記録者エイナ・ヴァルキュリア・ジウトム・テーゼやミルネ・ジウトム・リヴァリアス、リギスター調律者のアリス・レフェルトとの接触の結果、親交を深めてしまった模様。

人間社会に交えることのできない彼女たちにとって、緋島直樹は居場所を与える存在となり、結果として彼女たちの心のよりどころとなる可能性は高いとみられる。

こちら側に引き込んだものの、一部命令を聞かず、自分の我を通す場面もあった。

御しがたいという点においても注意を図るべきだろう。

私見としてはこのまま監視を続けるべきである。

彼に対して穏便な処置を求める。

なお、以後彼の能力を完全記録装置と仮称する

パーフェクトマージャー

● 負素の元凶

今回の騒動における緋島直樹に次ぐ異常点である。

リヴァリアス家の仮説にあるその存在が、この件で初めて確認された。

今回の改変者の一人である沢田拓斗と協力関係にあった模様で、彼から観測された負素の量は通常の四倍ほどであった。

姿としては十代前半の少女で、服装は黒、黒髪黒目であるが、西洋風の顔立ちだった。

何のために人の形をとったか、何故沢田拓斗と協力関係にあったかは不明である。

記録固定した媒体の本から、沢田拓斗との関係は明らかになる可能性もある。

引き続き調査が必要と進言する。

●エイナ・ヴァルキュリア・ジウトム・テーズ

緋島直樹に協力を求めた点から、彼女も報告対象とする。

最初に緋島直樹に接触した記録者である点も重要である。

改変者と疑った彼が、特殊ケースだった点は不可抗力としか言いようがない。

しかし、彼女たちの「自分たちの記憶が、人間から消失していく」という記録者たちの特性のため、記録者のことも記憶できる緋島直樹に近づいてしまった。これは他の記録者たちにも共通してしまうことのため、以後彼への接触は注意が必要である。

事実エイナと同様にミルネ・ジウトム・リヴァリアスやアリス・レフェルトもまた彼に好意に似た感情を寄せている。

しかし、緋島直樹もまた彼女たちに好意を寄せている。

この点を利用すれば、彼が敵になることはないと思われる。

追加報告

エイナ・ヴァルキュリア・ジウトム・テーズが今回の一件で破刃を二度使用したが、負素の元凶や完全記録装置などのイレギュラー

故の行動である。この件で彼女を処分するのは適切ではないと思われる。加えて、完全記録装置の敵対化の恐れもある。今回の破刃使用は不問とすべきであると報告員として提案する。

●ミルネ・ジウトム・リヴァリアス

負素の元凶を追い求めたリヴァリアス家の末裔の彼女もまた、報告対象とする。

緋島直樹自身に起きた改変を修正する際、彼女も同行した。

彼女は所謂オタク、日本のアニメやゲームを好むためにその聖地たる秋葉原にて彼の改変を行った張本人たる少女、森川未来と遭遇する。ただし、その時ミルネは無能さを発揮した。

また、彼女たちリヴァリアス家が探し求めていた負素の元凶を発見したのも彼女である。

そこから緋島直樹に協力者として情報改変を施そうとしたが、エイナとアリス・レフェルトに妨害された結果、緋島直樹はエイナの協力者となった。

負素の元凶が確認された以上、彼女たちリヴァリアス家が度々議会に提出した研究資料を再度検討することを提言する。

●アリス・レフェルト

議会からの派遣員である彼女だが、些か緋島直樹と関わり過ぎている点から、彼女も報告対象とする。

アリス・レフェルトと緋島直樹の出会いとは不明である。ただ、彼女は終始緋島直樹に対して、甘えるような態度を見せていたように思える。

彼女が少々緋島直樹に対して観察対象に抱くべきではない感情を持っているように客観的には受け止められかねない。

彼女には一刻も早く元の任務を達成させ、議会の監視の下へ戻す

べきである。

なお今回改変者となった森川未来、及び沢田拓斗の両名については今後の経過次第で報告対象となる可能性はあるが、今回は必要性を感じなかったため、報告は以上である。

議会に対しては今回の進言、および提言を受け止め、真剣に議論していただくことを求める。

D a y s 1 8 J u n e t o 2 2 J u n e
P l a c e J a p a n
T o W a t c h e r s
F r o m L

Report (後書き)

今回は一章のまとめという事で投稿しました。

分かり易くまとまっているでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2773o/>

Fehlen world - 欠ける世界 -

2011年8月1日03時29分発行